

# 人文・自然・人間科学研究

第 34 号

2015 年 10 月

## 論文

徳富蘇峰と昭和戦中日記

— 1937-1945 年 — ..... 澤田 次郎 ( 1 )

アジア途上国の産業化と空間構造の変容

— フィリピンの事例から — ..... 新田目夏実 ( 1 )

『日本風景論』再考

— ポスト・コロニアリズムの彼方へ — ..... 小木田敏彦 ( 16 )

「パフォーマンス」の心理学に向けて：

ホルツマン「パフォーマンス」論のワークショップ実践への適用 ..... 保坂 和貴 ( 37 )

## 研究ノート

キリスト教系中等学校の英語教員に関する研究

— 立教学院の場合 — ..... 保坂 芳男 ( 53 )

『人文・自然・人間科学研究』投稿規定 ..... ( 63 )

# アジア途上国の産業化と空間構造の変容

— フィリピンの事例から —

新田目 夏 実

## Industrialization and Spatial Change in Asia:

A Case Study from the Philippines

Natsumi ARATAME

### 序

発展途上国は主に農業を主体とした地域であり、1950年代の都市化率は20%を下回る状況にあった。しかしその後の人口爆発もあって急速に都市人口が増加した。このような状況を背景として、過剰都市化や首位都市化、およびそのような状況下で生じる都市問題に関する研究が進展した。しかしながら、途上国でも徐々に産業化がすすみ、また、人口増加もそのピークを超え、単純な過剰都市化論では途上国の都市化過程を一般化することは困難になってきている。しかし、以上のような新しい状況を、過去の都市の発展段階論研究との関連で体系化、一般化しようとする研究は少ない。

そこで本研究では、特にアジア途上国の近年の都市化動向を、都市人口の空間的分布の変動とその要因の観点から検討する。具体的には、まず、都市化理論のレビューの後に、途上国の都市化動向を概観する。次にフィリピンの首都圏を取り上げ、中心部と都心部周辺および郊外部の人口動態の変化を明らかにする。最後に、産業立地に注目し、人口と経済活動の関連について明らかにする。以上の手続きを踏まえ、首都圏の都市部と郊外地域の盛衰、さらには首都圏外地域を含む拡大首都圏の成長パターンについて考察する。

### 1. 研究動向と課題

#### 1.1 新しい課題

戦後発展途上国の都市人口は急速に増加した。しかし、経済発展は遅々として進まず、

増加する都市人口に十分な雇用機会と社会的サービスを提供することができないという状況が発生した。この結果生じたのが都市部における失業や不完全就業問題であり、多くの貧困人口が集住するスラム地域の拡大と恒常化であった。これが「過剰都市化論」である。

このような急激な都市人口の増加は、首都を中心とする特定都市に集中する傾向がある。人口規模第2位、第3位の都市と比べ、第1位の特定都市に極端に人口が集中するのが、「首位都市」(primate city)問題である。経済発展とともに、都市規模分布はよりなめらかなもの(対数正規型)に変化していく傾向があるため、都市人口にみるこのような極端な人口分布は、発展途上型都市化の一つの特徴として指摘されてきた<sup>(1)</sup>。

過剰都市化論や首位都市問題を中心として、アジア途上国の都市化と社会変動については既に多くの研究がある(新田目 2007, 2010a, 2010b; 新津 1989)。そこで明らかになったのは以下のような傾向である。

まず、形態的にみれば、郊外化や都心部の人口増加率の減少に加え、さらに遠方の農村部の都市化を含む「拡大首都圏」が発展しつつあることである。徐々にではあるが、首都圏以外の地方都市の成長も顕著になりつつある(新田目 2007)。次に、都市居住者の中に、貧困層とともに「中間層」が増大し、新たなライフスタイルを享受するグループが増加しつつある。その背後にあるのは産業化である(新田目 2010a, 2010b)。さらに、失業、貧困などの古典的都市問題は依然として重要であるが、経済のグローバル化を背景にして、都市中間層を支える都市下層労働者層が拡大している可能性がある(青木 2014)。

このような都市化状況は、その功罪を含み、産業化にかかわる政府の政策的誘導と企業の立地に負うところが大きい。この意味で、「過剰都市化」という側面は依然として重要であるが、同時に、途上国都市の空間的構造の変化の分析にあたり、産業化に伴う人口集積と分散という側面が、より適切なものになりつつあるように思われる。これは途上国の都市化パターンは例外的なものであるという従来の見方(特殊論)に対し、先進国の都市化論との連続性・継起性(普遍論)を想起させる現象である。途上国都市に起こりつつあるこのような変化は、

- (1) 途上国都市の成長エンジンは外資系企業である場合が多いという意味で、特定の途上国都市への国際産業立地論という問題と、
- (2) 途上国の大都市圏内部の人口分布がどのように変化しているのか、またそのような変化が産業立地の変化とどのように関係しているのかという都市の発展段階論と、
- (3) 途上国の大都市と中小都市の機能的役割分担の変化という都市システムの変化という3つの側面がある。それぞれ重要なテーマであるが、本稿では、第2番目の、産

業立地と人口分布の変化にかかわる都市の発展段階論の問題を中心に検討する。

## 1.2 都市化と経済成長

都市の成長過程を都市圏人口の空間的分布の変化に基づいて整理したのが、地理学者のクラッセン（L. H. Klaassen）である。従来の都市化理論が都市への人口集中と郊外化に関心を持っていたのに対し、その後の欧米の大都市部で生じた都心部の衰退と再生に関する知見を加え、都市化（urbanization）、郊外化（suburbanization）、反都市化（counter-urbanization）、再都市化（reurbanization）という4段階の都市圏の発展段階モデルを提唱した<sup>(2)</sup>。それぞれ2期に分けられる（表1）。

第1の都市化段階は、工業化初期に典型的にみられるものであり、都市圏全体で人口が急増する。都市化段階前期は、都心部で人口が急増する絶対的集中期であり、後期には、都心部と郊外部の両方で人口が増大する相対的集中期となる。

第2の郊外化段階では、郊外部の人口増加が顕著になる。郊外部の人口増加は、非都市地域からの人口流入に加え、都心部からの人口移動により生じている。この時期、都市圏全体では人口増加が継続するが、徐々に都心部より郊外部の人口増加が顕著となる。前期にはまだ都心部人口は増加しているが、後期になると、都心部の人口は停滞から減少に転じる。

第3の反都市化段階にはいると、まず都心部の人口減少が大きくなり、次いで郊外部の人口減少が始まる。この結果、都市圏全体で人口減少が始まる。

最後の再都市化段階に入ると、都市圏全体の減少速度は徐々に低下する。郊外部の人口減少は続くが、都心部の再開発などが始まり、都心部の人口は増加に転じる。

以上は欧米の知見に基づく帰納的モデルであり、そもそも都市圏を都心部と郊外部に分けるなど、単純化し過ぎているきらいがある。また第3段階と第4段階については実態認識のレベルで異論も多い（小林 2014; Rérat 2012）。ただし、その点も含め、途上

表1 都市の発展段階論

| 発展段階   | 人 口 変 化 |      |      |       |          |
|--------|---------|------|------|-------|----------|
|        | 分類タイプ   | 中心都市 | 郊外地域 | 都市圏全体 |          |
| Ⅰ 都市化  | 1 絶対的集中 | ++   | —    | +     | 都市圏人口増加期 |
|        | 2 相対的集中 | ++   | +    | +++   |          |
| Ⅱ 郊外化  | 3 相対的分散 | +    | ++   | +++   |          |
|        | 4 絶対的分散 | —    | ++   | +     |          |
| Ⅲ 反都市化 | 5 絶対的分散 | --   | +    | —     | 都市圏人口減少期 |
|        | 6 相対的分散 | --   | —    | ---   |          |
| Ⅳ 再都市化 | 7 相対的集中 | —    | --   | ---   |          |
|        | 8 絶対的集中 | +    | --   | —     |          |

（出所） Clark（2003）, p. 63.



国都市の今後の変貌過程に対して、比較の準拠枠を提供することになると思われる。以上の発展段階を、現在明らかになっている部分を中心に理論的・実証的に説明すると、概略以下ようになる。

まず、先進国の近年の知見によれば、都市化は経済学的には集積の経済（agglomeration economies）で説明される。特定地域への企業の集積は、当該企業に対してメリットがあるだけでなく、近接して立地する企業群に対して経済的メリットが波及するため、都市部へのさらなる企業立地を促進することになる。そのような企業群の都市立地は、雇用の提供、所得の増加を通じて、都市部、ひいては一国の経済成長につながる。この場合、都市部で供給できない労働者は、非都市部から供給されることになる。このような生産活動の集積は消費の集中につながるため、より多くの企業・人口が引き付けられることになり、その結果、都市人口がさらに増大する。このような経済活動の連続的拡大と都市人口の増大が、都市圏の拡大をもたらすことになる。この過程が、クラッセン・モデルの第1段階、すなわち都市化段階である。

ただし、都市で利用可能な土地面積・容積には限りがある。経済活動の集中は地価の上昇につながる。過度の都市人口の増大は、過密、電気・上下水道などの不備不足、大気・水の汚染、住宅不足や交通渋滞などの様々な「都市問題」を引き起こすことになる。他方、道路網の整備や通信環境の発展は、輸送・通信コストの低下を引き起こし、都心部への企業立地や居住インセンティブの低下につながる。企業立地と人口の都心部からの離散化は、このような現象を反映するものであろう。この過程がクラッセン・モデルの第2段階、すなわち郊外化段階である<sup>(3)</sup>。

経済活動と人口の都心部離脱が継続するとどうなるか。産業の郊外移転とともに都市の税収は減少する。郊外移転した産業とともに労働力も郊外移転するが、その過程でリストラが行われたり、移転コストの払えない労働者は、仕事を失い貧窮化することになる。この結果、大都市は維持管理費用のかかる老朽化した公共財を抱え、医療・福祉支出等が増大するため、財政難に陥る。これがクラッセン・モデルの第3段階であり、アメリカ大都市で実際に起こった現象である（Willson 2012）。反都市化段階とは、単なる人口分布の変化ではなく、このような都市生活、都市経営上の諸問題を併発している状態なのである。このような都心部の危機的状态に対して、様々な都心部再開発事業が試みられることになる。これがクラッセン・モデルの第4段階である再都市化である。

なお、類似のプロセスは日本においても観察される。東京都の人口動態を都心部（区部）と郊外部（市部）に分け人口増減をみたものが表2である。戦後1947年から1960年代半ばまでは、都心部と郊外地域がともに大きく増大した時代であり、都市化の段階といえることができる。1965年以降は郊外化時代であり、都心部人口の増加率はマイナスとなり、東京都の人口増加はもっぱら郊外部の人口増化によって生じるように

表2 東京都の人口動態—区部、郊外部

(人)

|        |      | 東京都        | 都心部       | 東京都       | 都心部       | 郊 外     |
|--------|------|------------|-----------|-----------|-----------|---------|
|        |      |            |           | 前期との差     | 前期との差     | 前期との差   |
| (都市化)  | 1947 | 5,000,777  | 4,177,548 |           |           |         |
|        | 1950 | 6,277,500  | 5,385,071 | 1,276,723 | 1,207,523 | 69,200  |
|        | 1955 | 8,037,084  | 6,969,104 | 1,759,584 | 1,584,033 | 175,551 |
|        | 1960 | 9,683,802  | 8,310,027 | 1,646,718 | 1,340,923 | 305,795 |
| (郊外化)  | 1965 | 10,869,244 | 8,893,094 | 1,185,442 | 583,067   | 602,375 |
|        | 1970 | 11,408,071 | 8,840,942 | 538,827   | -52,152   | 590,979 |
|        | 1975 | 11,673,554 | 8,646,520 | 265,483   | -194,422  | 459,905 |
| (反都市化) | 1980 | 11,618,281 | 8,351,893 | -55,273   | -294,627  | 239,354 |
|        | 1985 | 11,829,363 | 8,354,615 | 211,082   | 2,722     | 208,360 |
|        | 1990 | 11,855,563 | 8,163,573 | 26,200    | -191,042  | 217,242 |
| (再都市化) | 1995 | 11,773,605 | 7,967,614 | -81,958   | -195,959  | 114,001 |
|        | 2000 | 12,064,101 | 8,134,688 | 290,496   | 167,074   | 123,422 |
|        | 2005 | 12,576,601 | 8,489,653 | 512,500   | 354,965   | 157,535 |
|        | 2010 | 13,159,388 | 8,945,695 | 582,787   | 456,042   | 126,745 |

(出所) 総務省統計局「国勢調査報告」、都総務局統計部人口統計課「東京都の人口（推計）」、「人口の動き——「東京都の人口（推計）」より作成。

(注) 郊外には市部と郡部を含む。

なる。1960年代後半以降、東京都心部の人口が既に減少している点については特に注目するに値する。1980年代に入ると、都心部に加え郊外部の人口増加はかなり少なくなる。その意味で、クラッセンのモデルのような人口の純減は起こっていないが、反都市化段階とみなすことが可能であろう。しかし2000年代に入ると、「都心回帰」現象が現れ、区部、郊外部ともに、人口増加が進行している。この間に完成した都心再開発の象徴が、汐留地区に建設された巨大複合都市汐留シオサイトであり、港区六本木に完成した六本木ヒルズである。これが東京の再都市化段階である。

以上は近年の先進国の経験であるが、都市化の発展を歴史的にみると、今日のアジア途上国の経験との類似性と相違点を指摘することができる。

例えば、産業革命の起点となったロンドンでは、まず産業化の進展とともに、ロンドンにおいて労働需要が激増した。その一方で、困い込み運動の結果、多数の土地から切り離された労働力が農村に存在していた。このような余剰労働力が、増大する都市の労働需要に呼応する形で都市に移動したのが、ロンドンの都市化であった。この意味で、労働移動は、都市－農村間の就業格差・賃金格差の平準化をもたらすメカニズムでもある。類似の発展過程は、他の欧米諸国で、そしてその後急速な経済発展を遂げた日本や他のアジア途上国の中で観察されることとなった（渡辺1986）。

それに対し、多くの途上国都市においては、戦後の人口爆発の結果、産業化による雇用吸収力を越えて労働力人口が増加したため、上述のような「過剰都市化」や「首位都市化」状況が現出することとなったのである。ただし、近年の経済発展もあり、また、出

生率も徐々に低下しつつあるため、その状況には大きな変化がみられる（新田目 2010b）。単純な過剰都市化論では、ひとくくりにできないような状況が生じているのである。そこで、次に現代のアジアの都市化状況について具体的に検討してみたい。まず、アジアの都市化の一般的傾向を「メガ都市化」と「首位都市化」の観点から明らかにする。次に拡大都市圏の成立について、フィリピンを事例に検討する。最後に、経済特区がいかに都市の外延拡大に貢献しているか、日系企業の進出とフィリピンの経済特区の発展を事例として検討する。

## 2. アジアの都市化動向 ― 都市化の進展とメガ都市化

まず都市化率の動向を見てみたい。表3は世界人口と世界の都市人口を見たものである。世界人口は1950年の25億人から2010年には69億人に、2050年には93億人に達する。都市人口は7億人から36億人まで増加し、62億人になることが予測されている。この結果、1950年に29%だった都市化率は2010年には50%を越え、2030年には60%を超えることになる。先進地域と途上地域を比較すると、途上地域の都市化率は戦後はまだかなり低い水準にあったが、2010年には46%となり、2030年にはやはり50%を超える。このように、2010年以降、世界の二人に一人は都市に住む世界都市化の時代を迎えつつあるといっても過言ではない。ただし、都市人口の変化をよく見ると、先進地域ではほとんど増加がみられない。増加しているのは、発展途上地域である。そこで、この間の都市人口の増加がどこで起こっているのか、具体的に、地域別に見たものが表4である。表4は推計期間の間に増加した都市人口の合計を100としたとき、相対的にどの地域で都市人口の増加が生じていたかを表したものである。

表3 世界人口、都市人口、都市化率

|      | 1950          | 1970  | 1990  | 2010  | 2030  | 2050  |
|------|---------------|-------|-------|-------|-------|-------|
|      | 人口 (100 万人)   |       |       |       |       |       |
| 世 界  | 2,532         | 3,696 | 5,306 | 6,896 | 8,321 | 9,306 |
| 先進地域 | 811           | 1,006 | 1,144 | 1,236 | 1,296 | 1,312 |
| 途上地域 | 1,721         | 2,690 | 4,162 | 5,660 | 7,025 | 7,994 |
|      | 都市人口 (100 万人) |       |       |       |       |       |
| 世 界  | 745           | 1,352 | 2,281 | 3,559 | 4,984 | 6,252 |
| 先進地域 | 442           | 671   | 827   | 957   | 1,064 | 1,127 |
| 途上地域 | 304           | 682   | 1,454 | 2,601 | 3,920 | 5,125 |
|      | 都市化率 (%)      |       |       |       |       |       |
| 世 界  | 29            | 37    | 43    | 52    | 60    | 67    |
| 先進地域 | 54            | 67    | 72    | 77    | 82    | 86    |
| 途上地域 | 18            | 25    | 35    | 46    | 56    | 64    |

(出所) United Nations, Department of Economic and Social Affairs, Population Division, *World Urbanization Prospects, the 2011 Revision*.

表4 都市人口の増加に対する貢献

(%)

|         | 1950-70 | 1970-90 | 1990-2010 | 2010-30 | 2030-50 |
|---------|---------|---------|-----------|---------|---------|
| 世 界     | 100.0   | 100.0   | 100.0     | 100.0   | 100.0   |
| 先進地域    | 37.7    | 16.8    | 10.2      | 7.5     | 5.0     |
| 途上地域    | 62.3    | 83.2    | 89.8      | 92.5    | 95.0    |
| アフリカ    | 8.8     | 12.6    | 15.4      | 24.1    | 41.0    |
| アジア     | 42.9    | 56.7    | 63.8      | 60.0    | 47.9    |
| 東アジア    | 20.8    | 23.2    | 30.9      | 21.7    | 2.7     |
| 南・中央アジア | 12.4    | 19.3    | 18.4      | 23.4    | 31.0    |
| 東南アジア   | 5.7     | 8.6     | 9.4       | 9.2     | 8.4     |
| 西アジア    | 4.0     | 5.6     | 5.1       | 5.6     | 5.8     |
| ヨーロッパ   | 21.7    | 9.8     | 2.6       | 2.6     | 1.4     |
| 中南米     | 15.5    | 16.0    | 12.0      | 8.4     | 5.1     |
| 北 米     | 10.1    | 4.5     | 5.5       | 4.3     | 4.1     |
| オセアニア   | 1.0     | 0.6     | 0.5       | 0.5     | 0.5     |

(出所) 表3に同じ。

まず先進地域と途上地域を比較すると、上述のように、先進地域の都市人口の増加による貢献度は1950-70年を最大としその後急激に低下する。1990-2010年についてみると、世界の都市人口の増加分の90%は途上地域で生じているのである。その中でも最大の貢献をしているのがアジアであり、1990年から2030年まで、世界の都市人口の増加のほぼ60%がアジアで生じることが予測されている。ただし、増加した都市人口は、広大なアジアの中で均一に分布しているわけではない。ここでは二つの傾向を指摘することができる。一つは人口1000万人以上の「メガ都市」数の増加であり、もう一つは、中小都市数および都市人口の増加である(表5)。

まず規模別都市数であるが、メガ都市数は、1970年はわずか2つであったが、1990年には10都市となり、2010年には23都市となった。しかし、上述のように、実際に

表5 規模別都市数

(数)

| 都 市 地 域 | 都 市 規 模   | 1950 | 1970 | 1990 | 2010 | 2025 |
|---------|-----------|------|------|------|------|------|
| 世 界     | 50万～100万  | 102  | 186  | 299  | 513  | 750  |
|         | 100万～500万 | 69   | 128  | 237  | 388  | 572  |
|         | 500万～1千万  | 4    | 15   | 19   | 38   | 59   |
|         | 1千万以上     | 2    | 2    | 10   | 23   | 37   |
| 先進地域    | 50万～100万  | 68   | 95   | 111  | 127  | 167  |
|         | 100万～500万 | 37   | 66   | 90   | 104  | 118  |
|         | 500万～1千万  | 3    | 6    | 4    | 8    | 13   |
|         | 1千万以上     | 2    | 2    | 4    | 6    | 8    |
| 途上地域    | 50万～100万  | 34   | 91   | 188  | 386  | 583  |
|         | 100万～500万 | 32   | 62   | 147  | 284  | 454  |
|         | 500万～1千万  | 1    | 9    | 15   | 30   | 46   |
|         | 1千万以上     | 0    | 0    | 6    | 17   | 29   |

(出所) 表3に同じ。

増加しているのは途上地域においてであり、2010年の23のメガ都市のうち、17都市が途上地域に立地し、しかも、17のメガ都市のうち13がアジアに立地している。その意味で、上述のように、世界の都市化が急速に進んでおり、その大半がアジアで生じ、その増加は殊に大都市部に集中しているといえよう。これは過剰都市化論の主張と一致する。ただし、実際には、中小都市数が急増しているという点にも注目する必要がある。途上地域において50万から100万人規模の都市数は、1950年の34から2010年には386と11倍になった。100万人から500万人規模の都市数も同様に急増している。従来過剰都市化論との関連で、メガ都市問題が研究の中心となる傾向が強かったが、このように、メガ都市以外の都市化も着実に進行しているのである。今後メガ都市問題と並んで、中小都市の都市化にも同様な注意を払うべき必要があろう。最後にメガ都市が、それぞれの国の都市システムの中で、どのような地位を占めているのか、またその地位が変化しつつあるのかどうか示してみたい。

従来の過剰都市化論では、「産業化なき都市化」という論点に加え、それが、目に見えるような形で、特定の都市部で生じているという点が強調されてきた。これが特定都市への人口集中問題、すなわち「首位都市」(primate city)問題である。厳密に言えば、前者は統計的問題であり、後者は地域的・空間的問題であるが、産業化が進むにつれて、よりバランスのとれた都市規模序列が現出する傾向があるという意味で、過剰都市化論と合わせ検証する必要がある。結論からいうと、アジアでは、特定都市への人口集中は、徐々に改善の兆しがみられるように思われる。表6は総都市人口にしめる主要都市人口の割合を示したものである。

まず、参考までに東アジアに属する東京(首都圏)を見ると、都市人口に占める東京の割合は30%を越え安定している。東京は、実は他の途上国と比べても遜色ない一極集中状態にあるのである。次に、韓国のソウルは、1970年代には総都市人口の40%を占め、典型的首位都市といってよい状況にあったが、2010年には24%まで低下した。南アジアではパキスタンのカラチが人口第1の都市であり、今後も20%台が続くと予想されている。東南アジアについてみると、インドネシアの首都ジャカルタとマレーシアの首都クアラルンプールは、1990年以降、首位性を低下させている。フィリピンとタイの首都マニラとバンコクも、一時よりも比率が低下している。以上のことから明らかのように、かつては首都圏の首位性がどんどん増大していくかのように思われていたが、実際は同じレベルか、むしろ首位性が低下しているのが実態である。過剰都市化の経済的側面である雇用問題、貧困問題が解消されているかどうかは、この結果からだけでは明らかでないが、少なくとも、単純な首位都市化論で不十分な状態にあることは明らかである。

以上過剰都市化現象に変化がみられることを指摘したが、都市化率やメガ都市数・メ

表6 総都市人口に占める大都市圏の割合

(%)

| 国・地域               | 都 市             | 1950 | 1970 | 1990 | 2010 | 2025 |
|--------------------|-----------------|------|------|------|------|------|
| 東アジア               |                 |      |      |      |      |      |
| 中 国                | 上 海             | 7    | 4    | 3    | 3    | 3    |
| 日 本                | 東 京             | 26   | 31   | 34   | 32   | 33   |
| 韓 国                | ソウル             | 25   | 42   | 33   | 24   | 23   |
| 南アジア               |                 |      |      |      |      |      |
| バングラデシュ            | ダッカ             | 2    | 3    | 7    | 8    | 8    |
| インド <sup>(注)</sup> | カルカッタ/-ボンベイ/デリー | 7    | 6    | 6    | 6    | 6    |
| パキスタン              | カラチ             | 16   | 21   | 21   | 22   | 22   |
| 東南アジア              |                 |      |      |      |      |      |
| インドネシア             | ジャカルタ           | 16   | 19   | 15   | 8    | 8    |
| マレーシア              | クアラルンプール        | 17   | 12   | 12   | 7    | 8    |
| フィリピン              | マニラ             | 31   | 30   | 27   | 26   | 26   |
| タイ                 | バンコク            | 40   | 40   | 35   | 35   | 38   |
| カンボジア              | プノンペン           | 82   | 81   | 42   | 54   | 55   |
| ラオス                | ビエンチャン          | 28   | 55   | 44   | 37   | 42   |
| ミャンマー              | ヤンゴン            | 6    | 6    | 7    | 7    | 7    |
| ベトナム               | ホーチミン           | 37   | 24   | 22   | 23   | 24   |

(出所) 表3に同じ。

(注) 年度によって最大の都市が異なる。

ガ都市人口、首位性といった統計指標だけでは、スプロール化の進行や、首都圏郊外部のさらに遠方に広がる拡大都市圏の成立のような、空間構造の変容については判断することができない。表6から確かに首都圏の比率が増大していないことはわかるが、それは、クラッセンの反都市化段階に入ったためか、さらに遠方の地に首都圏が拡大しているのか、あるいは、地方都市が成長した結果、首都圏の比率が相対的に減少したのか明らかではない。そこで、次にマニラ首都圏を事例として、首都圏の都心部と郊外部の人口数の変化を直接検討してみたい。

### 3. 都市規模序列の変化

#### 3.1 マニラ首都圏

表7はフィリピンのマニラ首都圏の人口変動について示したものである。マニラ首都圏は16市(city)と1町(municipality)から構成されており、マニラ湾に面し南北に長く伸びた形をしている。まず、マニラ首都圏の総人口は1960年には246万人であったが、2000年にはほぼ1,000万人のメガ都市となり、2010年現在1,186万人となった。1960年から1980年の人口増加率は年率4%を超える高さであったが、その後急速に低下し、現在1.79%となった。1990年以降、マニラ首都圏の人口増加率は全国平均を下回っている。上述のマニラの首位性の低下は、このように相対的に低い人口増加率と関



表7 マニラ首都圏の人口動態

|             | 人口増加率 (%) |         |         |           |           | 人口密度 (km <sup>2</sup> ) |
|-------------|-----------|---------|---------|-----------|-----------|-------------------------|
|             | 1960-70   | 1970-80 | 1980-90 | 1990-2000 | 2000-2010 | 2000                    |
| 全 国         | 3.08      | 2.75    | 2.35    | 2.34      | 1.90      |                         |
| 行政区 マニラ首都圏  | 4.88      | 4.10    | 2.98    | 2.25      | 1.79      | 15,617                  |
| 1 マニラ市      | 1.57      | 2.05    | -0.18   | -0.13     | 0.44      | 41,282                  |
| 2 マンダルヨン市   | 7.63      | 3.23    | 1.91    | 1.16      | 1.67      | 10,711                  |
| 3 マリキナ市     | 10.86     | 6.44    | 3.90    | 2.35      | 0.81      | 10,056                  |
| 4 パシグ市      | 9.68      | 5.55    | 4.00    | 2.42      | 2.86      | 38,851                  |
| 5 ケソン市      | 6.60      | 4.45    | 3.66    | 2.67      | 2.42      | 13,080                  |
| 6 サンファン     | 6.28      | 2.21    | -0.25   | -0.75     | 0.31      | 11,315                  |
| 7 カロオカン市    | 6.55      | 5.48    | 5.02    | 4.43      | 2.37      | 21,104                  |
| 8 マラボン      | 6.35      | 3.04    | 3.90    | 1.93      | 0.42      | 14,481                  |
| 9 ナボタス      | 5.39      | 4.24    | 4.04    | 2.08      | 0.78      | 88,617                  |
| 10 バレンズエラ市  | 9.03      | 7.99    | 4.83    | 3.62      | 1.71      | 10,328                  |
| 11 ラスビーニャス市 | 11.01     | 11.56   | 8.09    | 4.76      | 1.57      | 11,392                  |
| 12 マカティ市    | 8.75      | 3.47    | 1.98    | -0.18     | 1.75      | 14,878                  |
| 13 モンティンルバ市 | 11.51     | 7.71    | 7.37    | 3.14      | 1.95      | 8,122                   |
| 14 パラニャケ市   | 4.62      | 7.93    | 3.98    | 3.85      | 2.72      | 11,744                  |
| 15 パサイ市     | 4.51      | 3.39    | 2.50    | -0.37     | 1.02      | 25,533                  |
| 16 パテロス     | 6.81      | 4.69    | 2.47    | 1.11      | 1.12      | 5,520                   |
| 17 タギゲ      | 9.72      | 9.27    | 7.11    | 5.77      | 3.27      | 13,869                  |

(出所) National Statistical Coordination Board, 1997 *Philippine Statistical Yearbook, Manila, 1997*,  
Philippine Statistics Authority, 1990, 2000, 2010 *Censuses*.

係していることは明らかである。次にマニラ首都圏を構成する 17 の市町の人口動態をみてみたい。マニラ湾岸に位置するマニラ市（行政区 1）は首都圏の中心に位置している。行政区 2-6 が首都圏東部である。行政区 7-10 が首都圏北部であり、行政区 11-17 が首都圏南部に立地している。

表から明らかであるが、マニラ首都圏の中心であるマニラ市の人口増加率は、1960 年代からマニラ首都圏平均より低い状態にあり、1980～2000 年期はマイナスであった。マニラ市に隣接するサンファン市の人口増加率も、同期間マイナスである。両市の人口増加率は 2000-2010 年期にプラスになったが、依然として首都圏で最も低い水準にある。首都圏中部に位置するマカティ市とパサイ市の増加率も、1990～2000 年期はマイナスであった。ただし、特にマカティ市はフィリピン最大のビジネス街・金融センターでもあり、世界通貨危機などの影響を受けた可能性が高い（2000-2010 年期に回復）。2000-2010 年期になると、マニラ湾岸に位置するマラボン市とナボタス市の人口増加率も、非常に低い水準に落ち込んでいる。ちなみに、両市はマニラ首都圏の最貧地域であり、特にナボタスは、首都圏で人口密度がもっとも高い地域である。首都圏平均が 4 万 1 千人/km<sup>2</sup> であるが、ナボタスの人口密度はその倍の 8 万 8 千人/km<sup>2</sup> であった。以上、

表 8 拡大首都圏の発展

|        | 1990<br>(人) | 2000<br>(人) | 2010<br>(人) | 1990-2000<br>(%) | 2000-2010<br>(%) |
|--------|-------------|-------------|-------------|------------------|------------------|
| 全 国    | 60,703,810  | 76,506,928  | 92,337,852  | 2.3              | 1.9              |
| マニラ首都圏 | 7,948,392   | 9,932,560   | 11,855,975  | 2.3              | 1.8              |
| パタンガス州 | 1,476,783   | 1,905,348   | 2,377,395   | 2.6              | 2.2              |
| カビテ州   | 1,152,534   | 2,063,161   | 3,090,691   | 6.0              | 4.1              |
| ラグナ州   | 1,370,232   | 1,965,872   | 2,669,847   | 3.7              | 3.1              |
| リサール州  | 977,448     | 1,707,218   | 2,484,840   | 5.7              | 3.8              |

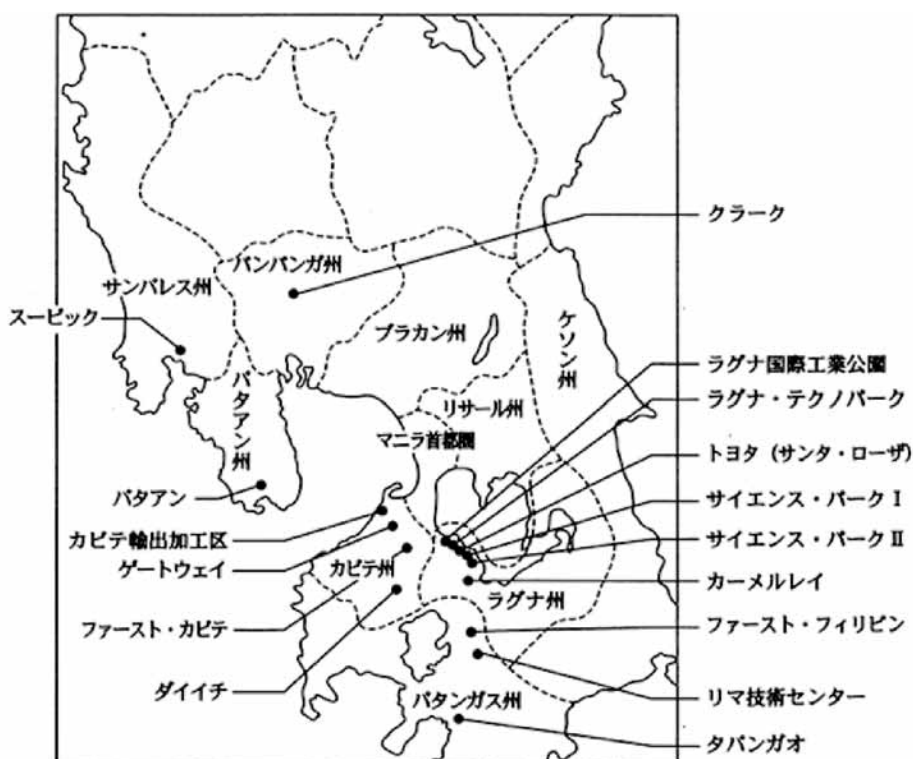
(出所) Philippine Statistics Authority, 1990, 2000, 2010 Censuses.

総じてみれば、マニラ市を含み、マニラ首都圏の中心地と沿岸部の人口増加率が非常に低い状況にあることは明らかである。

表 8 はマニラ首都圏に隣接する 4 州の人口増加率を見たものである。1990～2000 年と 2000～2010 年について比較してみたい。まず、フィリピン全国の人口増加率が 2.3% と 1.9% であるのに対し、首都圏近郊 4 州の人口増加率は、全てそれを上回っている。カビテ州とリサール州の人口増加率は特に高く、1990～2000 年はそれぞれ 6% と 5.7%、2000～2010 年にも 4.1% と 3.8% を記録した。以上のことから明らかなように、フィリピンのマニラ首都圏の人口増加率は、全国的にみてもかなり低い水準で推移し、特に都心部の増加率は 0% 台まで低下した。それに対し首都圏隣接諸州では、全国水準をはるかに上回るレベルで人口が増加している。人口増加の渦が、首都圏に隣接する州にまで及んでいるのが近年の実態であるといえよう。このようなマニラ首都圏を越えた経済的範囲が、いわゆるカラバルソン地域 (CALABARZON) である。カラバルソンの名称は、マニラ首都圏に隣接するカビテ (Cavite) 州、ラグナ州 (Laguna)、パタンガス (Batangas)、リサール州 (Rizal) およびケソン州 (Quezon) の 5 州の名称に由来するものである。

#### 4. 都市化と産業化

以上の人口学的分析から明らかなように、マニラ首都圏の都市化は、都心部の人口増加を含む都市化の段階から、郊外部の人口増加が中心となる郊外化段階に入りつつある。実際には、首都圏からさらに遠隔地の人口増加が顕著になりつつある。この状況は、都心部から郊外へ、そして首都圏外へと、「自然に」人口があふれ出している状況とみられることもできる。しかし、フィリピンの場合はカラバルソン地域という名称が与えられ、積極的に産業分散を志向する地域開発政策が導入され、人口分散が誘導されているという特徴がある。メガ都市のさらに遠方の地域を視野に入れた、拡大首都圏政策が取られているのである。以下、その点についてさらに検証してみたい。



(出所) 秀島敬一郎「マニラ首都圏周辺の工業団地」中西徹・児玉徹・新津晃一編『アジアの大都市 [4] マニラ』日本評論社, 2001 年, p. 121.

地図 1 中部ルソンの輸出加工区

フィリピンの場合、当初から工業団地の建設が非常に明瞭に意識されてきた（地図 1）。時期的に見ると、フィリピンの工業団地の育成は 1972 年の「輸出加工区法」（Export Processing Zone Act）以降盛んになったものであり、特にカビテ州の工業団地は政府系工業団地の草分けとなった。工業団地の建設は、当初工業製品の生産・輸出の振興が目的であったが、1995 年の「フィリピン経済区法」（Philippine Economic Zone Act）の制定以降、自由港、医療・観光・レクリエーション、商業、金融等を目的とした企業進出も可能になったため、「工業団地」や「輸出加工区」という表現はもはや正確なものではない。1995 年法により「フィリピン経済区庁」（Philippine Economic Zone Authority）が設立され、経済区にかかわる管理は一元的に行われるようになった。経済区には政府系と民間資本のものがあるが、現在操業中、計画中の経済区のほとんどは民間資本によるものといってよい。2015 年 1 月現在 317 の経済区が操業中であり、内訳は以下のとおりである（表 9）。

317 の経済区のうち三分二である 201 区が、首都圏に隣接する近郊州に立地している。特に首都圏南部でカラバルソン地域に属するカビテ州、ラグナ州、バタンガス州に多くの経済区が設置されている。その多くはマニラ首都圏を南北に抜ける高速道路によ

表 9 経済区

| 経 済 区                                  | 数   |
|----------------------------------------|-----|
| 農産業経済区 (Agro-Industrial Economic Zone) | 19  |
| 情報区 (IT Parks and Centers)             | 209 |
| 製造業経済区 (Manufacturing Economic Zone)   | 68  |
| 医療観光区 (Medical Tourism Zone)           | 2   |
| 観光経済区 (Tourism Economic Zone)          | 19  |
| 計                                      | 317 |

(出所) Philippine Economic Zone Authority (PEZA)

り首都圏と結ばれ、またマニラ港や国際空港と緊密に結ばれ、拡大首都圏を形成しているのである。ちなみに、カビテはマニラ首都圏から 30km、ラグナは 50km、バタンガスは約 100km 程度の距離にあり、高速道路でつなぐと、交通渋滞さえなければ、1 時間～3 時間程度でマニラ首都圏に到達可能な時間距離にある。また、バタンガスは海に面し、マニラ湾に次いで、フィリピン第 2 の港湾都市でもある。

日系企業の進出も目覚ましい。2015 年現在 521 社がフィリピンに進出している。ただし、その地域的分布をみると、マニラ首都圏に 223 社、首都圏近郊州に 250 社であり、日系企業の 90% が首都圏もしくは首都圏近郊に立地している。近年活況を呈するフィリピン経済を受け、交通の便のよいセブ島への進出も増加しているが、全体的にみると拡大首都圏への集中傾向は明らかである。進出先としては、首都圏南部が多い（表 10）。

表 10 拡大首都圏の経済区と日系企業数

|        | 経 済 区 | 日 系 企 業 |
|--------|-------|---------|
| マニラ首都圏 | 139   | 223     |
| 近郊州    | 62    | 250     |
| サンバレス  | 1     | 8       |
| バンパンガ  | 8     | 12      |
| バタアン   | 2     | 2       |
| ブラカン   | 3     |         |
| ケソン    | 1     |         |
| リサール   | 3     |         |
| カビテ    | 11    | 63      |
| ラグナ    | 19    | 124     |
| バタンガス  | 14    | 41      |
| 全 国    | 317   | 521     |

(出所) Philippine Economic Zone Authority (PEZA),  
東洋経済新報社 (2015) より作成

## 5. 今後の動向

途上国の都市化は複雑である。雇用問題や貧困問題のような古典的都市問題が存在する一方、本稿で指摘したように、着実な経済発展が雇用を創出し、それが首都圏の空間構造を変えつつあるからである。その意味で、従来の過剰都市化論と首位都市化論だけでは、途上国の都市化を理解することは困難になりつつある。

本稿で事例として取り上げたフィリピンについて言えば、首都圏の「首位性」は低下しつつあるが、首都圏の外延は、境界を州単位でみるなら、リサール州、カビテ州、ラグナ州、バタンガス州あたりまで拡大している。このような「拡大首都圏」を単位として考えるならば、「拡大首都圏」への一極集中型都市化は、継続中であるだけでなく、さらに強化されつつあるといってもよい。このような都市化傾向は将来どうなるであろうか。

多くの途上国の出生率は下がりつつあるが、過去の人口爆発期に生まれた子どもたちが今労働市場に参入し、仕事を必要としている。政府は、このような人口ボーナスを活用すべく、積極的産業化を進めている。そのひとつの表れが、郊外部と拡大首都圏における経済区の振興である。このプロセスが機能している限りは、都市圏の拡大と機能的連携の深化が続くことが予想される。その意味で、「首位性」はさらに増加することが予想される。

ただし、都心部に滞留した貧困人口への対応は、依然として喫緊の課題である。さらに首都圏、首都圏郊外部、そして拡大首都圏への過剰な集中による非経済を解消するために、地方都市における産業振興に力をいれる必要があるだろう。日系企業の9割が首都圏近郊に立地していることは、まさにそのような問題が存在していることを示唆している。

### 《注》

- (1) 一般的には確かに経済発展とともに都市システムがよりなだらかな分布パターンに移行する傾向が強い。しかしより詳細にみると、経済発展のレベルとは別に、歴史的・自然的条件等の違いにより首位都市型、対数正規型に加え、多極型都市システムが存在するため、都市システムの変容過程は、たんなる首位都市型から対数正規型へという単純なものではない。このような都市システムの多様性およびその変化の方向性に関しては、松原（1998）参照。
- (2) クラッセンのモデルについては、Klassen, et. al（1981）、高橋他（2011）等参照。東アジアにおける都市化との関連では飯味（2004）。
- (3) 郊外化過程は、労働経済学における実質賃金の均一化の観点から説明することもできる。都心部の賃金は郊外に比べ相対的に高いが、これは負のアメニティへの対価として支払われるものと考えるならば、都心部－郊外部の実質賃金は同じレベルに収束すると考えられる。これが労働経済学における均一化理論（Theory of equalizing differences）である（Rozen 1986）。

### 参考文献

- 新田目夏実「人口爆発と過剰都市化」渡辺利夫編『国際開発学Ⅱ』東洋経済新報社 2000 年, pp. 111-135。
- 新田目夏実「アジアの都市化の新局面」新津晃一・吉原直樹編『グローバル化とアジア社会 ポストコロニアルの地平』東信堂, 2007 年, pp. 99-142。
- 新田目夏実「東南アジア：発展の中の人口問題——出生, 死亡, 都市化」早瀬保子・大淵寛編著『世界主要国・地域の人口問題』原書房, 2010 年 a, pp. 79-103。
- 新田目夏実「新田目夏実, 「東南アジア：発展の中の人口問題——出生, 死亡, 都市化」『日本都市学会年報』28, 2010 年 b, pp. 53-63。
- 飯味淳「東アジアにおける都市化とインフラ整備」『開発金融研究所報』第 20 号, 2004 年, pp. 4-25。
- 小池賢治「首都圏・カラバルソンの開発と財閥」中西徹・児玉徹・新津晃一編『アジアの大都市 [4] マニラ』日本評論社, 2001 年, pp. 147-171。
- 小長谷一之「アジア都市経済と都市構造」『季刊経済研究』Vol. 20, No. 1, 1997 年, pp. 61-89。
- 小長谷一之「都市システムと企業ネットワーク」宮本謙介・小長谷一之編, 『アジアの大都市 [2] ジャカルタ』, 日本評論社 1999 年, pp. 203-228。
- 小林健太郎「都市の再開発過程に関する理論的考察 1——都市の発展過程——」『明星大学経済学研究紀要』vol. 45, No. 2, 2014 年, pp. 35-43。
- 高橋伸夫・菅野峰明・村山祐司・伊藤悟『新しい都市地理学』東洋書林, 2001 年。
- 新津晃一「序章 現代アジアにおけるスラム問題の所在」新津晃一編『現代アジアのスラム 発展途上国都市の研究』明石書店, 1989 年, pp. 13-91。
- 秀島敬一郎「マニラ首都圏周辺の工業団地」中西徹・児玉徹・新津晃一編『アジアの大都市 [4] マニラ』日本評論社, 2001 年, pp. 119-145。
- 松原宏編著『アジアの都市システム』九州大学出版会, 1998 年。
- 渡辺利夫『開発経済学 経済学と現代アジア』日本評論社, 1986 年。
- Clark, David, *Urban World/Global City*, Routledge, 2003.
- Klaassen, L. H., Bourdres, J. A. and Volmuller, J., *Transport and Reurbanization*, Gower, 1981, pp. 8-46.
- Rérat, Patrick, “The New Demographic Growth of Cities: The Case of Reurbanization in Switzerland,” *Urban Studies* 49, 2012, pp. 1107-1125.
- Rosen, S., “The Theory of Equalizing Differences,” In Ashenfelter, O. and R. Layard eds., *Handbook of Labor Economics, Volume I*, Elsevier Science Publishers, 1986.
- Wilson, William Julius, *The Truly Disadvantaged: The Inner City, the Underclass, and Public Policy*, Chicago, University of Chicago Press, 2012.

本稿は平成 25 年度人文科学研究所個人研究助成に基づく研究成果の一部である。

# 『日本風景論』再考

— ポスト・コロニアリズムの彼方へ —

小木田 敏 彦

## Second Thoughts on “*Nihon-fukei-ron* (*Inquiry of the Japanese Scenery*)”:

Beyond Post-colonialism

Toshihiko KOGITA

### 要 旨

志賀重昂の地理学は日本の未来像を模索する試みであって、我流の学問であった。しかし、地域格差を社会進化論的な観点で把握している点、およびその格差が地理的要因に起因する点と考える点で、当時のアカデミック地理学と同じ水準にあった。そして、『日本風景論』を通じて、自然地理学の知識を充実させ、表日本と裏日本という国土空間に関するランド・デザインに基づいて自然景観の多様性を考察する着想を得た。

このランド・デザインはその後の志賀の地理学にも受け継がれ、風土の多様性を考察する視点となった。志賀の「裏日本」論は詩的構想力が豊かで、その詩的構想力はデモクラティックな感性に裏打ちされていた。志賀は文芸を通じて、デモクラティックな感性を身につけた。江戸の文芸は階級透過的で草の根的な広がりを持っており、同人と呼ばれる市民積極参加のネットワークの下で、ソーシャル・キャピタルが育まれた。

キーワード：志賀重昂，日本風景論，裏日本，同人文化，ソーシャル・キャピタル

### はじめに

地理学者志賀重昂が1894（明治27）年に出版した『日本風景論』に関しては、1887（明治20）年に出版した『南洋時事』以上に多くの研究が行われてきた。しかし、研究の大半はポスト・コロニアリズムの観点に立って行われてきたと言っている。ポスト・コロニアリズム研究では、帝国主義における植民地獲得というライトモチーフの下、『南洋時事』と『日本風景論』に共通する国粋主義の告発に重きを置いてきた。このため、『南洋時事』研究に対する批判がほぼ『日本風景論』にもあてはまる構図となっている。たとえば、『南洋時事』南進論伝説<sup>(1)</sup>に関して、文学者の亀井秀雄は「オースト



ラリアとの貿易促進を説いただけで移民的進出さえも説いていなかった」と厳しく批判している（亀井 2003：69）。亀井によると、「帝国主義」を「帝国意識」に置き換えるのが、ポスト・コロニアリズムの作法なのだという。しかし、強引で一方向的なレッテル貼りはコロニアリズムの作法に他ならないのではなかろうか。

『日本風景論』に関しては、民衆にナショナリズムを鼓吹したことが殊更に強調されてきた。日本の風景への賛美を「帝国意識」の発露であるとか、あるいは大国意識を鼓吹する行為であると解釈するのも、ポスト・コロニアリズムの作法である。地理学における代表例は、米地文夫による一連の『日本風景論』研究である（米地 1996, 2004）。たしかに自然地理学的な知見が加えられ、志賀が依拠した原典との対比もなされている。しかし、政治思想に関するテキスト解読の手法は、基本的にポスト・コロニアリズムの《剽窃》でしかない。他方、人文地理学の側でも、杉浦芳夫が「彼（筆者注：志賀重昂）の地理学は、国粹主義（ナショナリズム）と結びついた国民的学問としての性格と課題を担うものであったという点で、後に誕生するアカデミックな地理学とは異質である」（杉浦 1995：147）と指摘している。しかし、この指摘にも問題がある。

日本地理学史ではアカデミック地理学と非アカデミック地理学、あるいは前アカデミック地理学を明確に区別しようとする。つまり、アカデミック地理学を正統に位置づけ、非アカデミック地理学を異端に位置づけるのが流儀になっている。そして、恐らく杉浦はナショナリズムが非科学的であるという前提に立っているのであろう。しかし、政治思想は地理学の方法論の問題と明確に区別すべきであり、ナショナリズムに対する稚拙な理解は日本地理学史に混乱を惹き起こすことになる。たとえば、ドイツ地誌学を確立したヘットナーは、地理学の目標が①「国土そのものの知識、その美への理解およびそれを通じた郷土愛の覚醒あるいは強化」、②「ドイツの全歴史」が「祖国の自然に従属するという理解」の2点にあると指摘している（ヘットナー 2001：598）。つまり、ドイツ地誌学自体が、ナショナリズムと結びついた国民的学問だったのである。

このように、日本地理学史はポスト・コロニアリズムの作法に基づいて、アカデミック地理学を正統化しようとしてきた。しかし、地理学はこの試み自体がコロニアリズムの作法であることにまだ気づいていない。この点に関しては、他分野の研究者の方が敏感なようであって、たとえば歴史人類学の太田幹雄は自ら地理学史を整理して、『日本風景論』に対する評価を試みている（太田 2003）。ポスト・コロニアリズムの作法に基づいた評価ではあるものの、福沢諭吉に地理学的な意義を見出すなど地理学が見習うべき点は数多いと言える。同様の問題は、牧口常三郎が1903（明治36）年に出版した『人生地理学』にも見られる。たとえば、森林学の村尾行一は日本の地理学者が『人生地理学』の学術的位置づけに無関心であることを批判している（村尾 1997：103）。やはり志賀重昂に対しては「国粹主義に墮する」（村尾 1997：10）ものだと手厳しい。し

かし、そうであるとすれば、その志賀を牧口が私淑していた理由をどのように説明するのだろうか。地理学にはこうした問題に答えていく責務があるはずだ。

『日本風景論』に関して、筆者は主に景観地理学との関連で考察を続けてきた。しかし、志賀は地理教育の分野で遥かに大きな功績を残している。そこで、本稿では地理教育の領域をも含めて『日本風景論』の地理学史的意義について検討してみたい。本稿の構成について説明しよう。まずⅠ章では「裏日本」の成立についての見解を通じて、地理教育をも射程に含めた『日本風景論』の地理学史的な位置づけについて検討する。コロニアリズムは国内の後進地に対する眼差しに明らかであり、「裏日本」論には『日本風景論』とアカデミック地理学を結びつける接点も存在する。その接点に注目すれば、両者を比較することが可能となる。また、Ⅱ章では、「裏日本」論との関連で美意識における文化帝国主義の問題について検討する。筆者は民衆の美意識に価値を認めずに、上流階級の美意識を賛美する態度を「美意識における文化帝国主義」と呼んで批判してきた（小木田 2013, 2014）。本稿では志賀の「裏日本」論に見られる美意識に着目することで、志賀の国粹主義の健全さを明らかにしてみたい。

## Ⅰ 『日本風景論』とアカデミック地理学の接点

### 1. 「裏日本」論における『日本風景論』

「裏日本」の成立、あるいは誕生とは、もともと本州の日本海沿岸地域を指す自然地理学的な用語<sup>(2)</sup>であった裏日本に、経済的な後進地というイメージが付与されたことを指す。「裏日本」という表記は一般に後進地イメージを伴う地域名称を意味し、その研究史は千葉徳爾が歴史地理学の観点から行った産業革命期研究に始まる（千葉 1964, 1966）。研究史上の起源は「裏日本」が差別的な意味で用いられるようになった時期と重なるが、それ以前から「裏日本」は経済的な後進地を指す言葉として一般化していた。そこで、千葉は「裏日本」を近代化過程で生じた地域格差の問題として定式化し、その成立要因を東海地方と北陸地方における住民の近代化への志向の違いに求める独自のエートス論を展開した。また、地域格差が顕著になった時期に関しては「明治年代の後半から大正の末年までの、日本の産業革命の進行期」（千葉 1964：169）とした。したがって、成立時期についてはかなりの幅を持たせていた<sup>(3)</sup>ことがわかる。

その後、産業革命研究の進展とともに、「裏日本」論が新たな展開を見せた。その特徴は資本主義の発展に伴う国土空間の変容と捉える点にある。たとえば、内藤正中は「裏日本」を先進地域に食料や工業原料、労働力を供給する後進地域と規定し、成立時期も「産業革命をおえた日本資本主義が、社会全体をとらえて確立した時期」である「明治末から大正初年にかけて」（内藤 1982：121）とした。この見解は産業革命の終期

を日露戦争後とする立場に立ったものである。神立春樹もこの見解を概ね踏襲し、成立時期も「明治末から大正初期」としている（神立 1985：151）。ただし、神立は「工業＝都市と農業＝農村」、「中央と地方」、「表」と「裏」などのように格差問題が多面的展開を見せたことを指摘し、「裏日本」の成立が「東北が『東北』になる」過程と同時進行であったという見解を提示している<sup>(4)</sup>（神立 1985：150-151）。これに対して、古厩忠夫と阿部恒久は詳細な文献渉猟に基づいて、1900（明治 33）年頃を成立時期とする新たな解釈を提示すると同時に、成立要因に関しても先進地域と後進地域という空間構造を規定した社会資本整備のあり方を問題視している（古厩 1997：7；阿部 1997：6）。さらに、「裏日本」の定義を改めて、東北地方は含まれないとする独自の見解をも提示することで、新たな「裏日本」論を展開している。

古厩と阿部は国土空間において新潟県が相対的地位を低下させる過程に「裏日本」化の本質を見出し、そのモデルが適合的な地域を「裏日本」と再定義した。このため、視野狭窄的で、成立要因に関する議論と成立時期に関する議論にも整合性を欠く結果となっている。成立時期に関して争点となっているのは、1906（明治 39）年に出版された山崎直方・佐藤伝蔵編『大日本地誌 巻五』（北陸）において「裏日本」という言葉が用いられつつも、千葉が「表日本に対する経済的な低開発性はみとめられない」と指摘している点である（千葉 1964：166）。この指摘に素直に従えば、成立時期は明治末以降だということになる。これに対して、『日本風景論』では「裏日本」という言葉こそ用いられていないものの、「日本海岸はいまだ発展進暢しんちょうせず、今日より発展進暢せんとするもの」「太平洋岸は甚だ発展進暢し、日本の文化は多くは此所に聚りたるもの」（志賀 1995：28）と記されている。したがって、たしかにこの記述に従えば、日本海側と太平洋側で既に文化的な格差があったという解釈も可能である<sup>(5)</sup>。しかし、当然のことながら、志賀は日本海側から東北地方を除外しているわけではない。

たしかに阿部の研究は数多くの地理学文献を渉猟しており、地理学史的に見ても非常に価値が高い。しかし、かなり恣意的な文献解釈が行われているという印象は拭えない。たとえば、阿部の立場に立った場合、なぜ山崎と佐藤が格差について記述しなかったのか、あるいはなぜ志賀が「裏日本」という言葉の使用を控えたのかが問題となる。まず阿部が眼をつけたのは、志賀が 1903（明治 36）年に出版した『中学地理 日本之部』において、「裏日本」という言葉を用いていることである。その理由は志賀が裏日本という用語を知りつつも、敢えて『日本風景論』では使用を避けたと考えていることにあるようだ（阿部 1997：40）。ただし、明確な根拠が示されているわけではない。阿部の立場からは、『大日本地誌 巻五』には地域格差の記述がない理由がより大きな問題だったようである。そして、「地域格差観念の側面を意識的に除こうとする力が働くこともありえるだろう」という推測の下、山崎と佐藤が『裏日本』『表日本』の用例から地域

格差観念性を除去せしめている」と推察している（阿部 1997：45）。要するに、地理学者には格差問題から眼を背けようとする性向があるとでも言いたいのであろうか。

以上の阿部の推察に対して反証を提示するのは極めて容易である。たとえば、1904（明治 37）年に出版された『大日本地誌 卷二』（奥羽）には、「此等の不便に加ふるに奥羽の地素と本邦開化の中心を距ること僻遠なるを以て、人文の発達は常に他に後るゝを免れず」（山崎・佐藤 1915a：4）という記述があるからである。「此等の不便」とは陸奥湾を除いて天然の良港に恵まれていないといった交通上の不便さを指している。また、「他に後るゝ」という表現は明らかに後進性に関する記述であって、ここには同時に「人文の発達」が「開化の中心」からの文化の伝播によるといった見方も記されている。したがって、地域差が格差という量的な次元ではなく、「開化」や「人文の発達」といった社会進化論的な次元の問題とされている点に注意する必要がある。この観点に立てば、後述するように『大日本地誌 卷五』にも社会進化論的な記述がある。したがって、千葉の解釈には疑問が残るという形での批判も十分に可能なのである。

また、たしかに『中学地理 日本之部』において、志賀は裏日本という言葉を用いている。しかし、「太平洋岸は弓状なる諸島の凸面をなすを以て表日本又外面と云ひ、日本海岸は凹面をなすを以て裏日本又内面と云う」（志賀 1903：17）といったように、基本的に自然地理学的な用語として用いている。さらに、第 4 章「日本帝国人文誌」では、「住民」「政治」「生業」「交通」「南日本と北日本」に続いて、「表日本と裏日本」という節があり、そこでたしかに表日本と裏日本との間に見られる地域差にも言及している。注目すべきは「六、交通」の項目であって、表日本は「鉄道線長し」、裏日本は「鉄道線短し」という記述になっている（志賀 1903：75）。しかし、「八、文化」の項目において、表日本は「今日まで発達す」、裏日本は「将来発達すべし」となっており（志賀 1903：75）、地域格差は社会資本整備の差ではなく、文化的な問題として把握されている。この文化とは生活水準と同義であって、文化的格差は生活文化の西欧化の中で生じていた。そして、当時、鉄道は文化の伝達者であると素朴に信じられていた。

志賀もまた鉄道を文化の伝達者と考えていた。このため、格差問題は「此等の不便」と一括され、「表日本は地利を占め居りたれば裏日本よりは今日に至るまで発達せり」（志賀 1903：76）と分析している。つまり、利便性の違いは鉄道網の整備等に見られる開発の遅れではなく、むしろ地理的要因によって形成されたとされている。そして、志賀はこの不便は解消へと向かいつつあり、「鉄道、汽船、郵便、電信等の発達と共に裏日本も固より発達すべし」（志賀 1903：76）と述べている。以上を総合すれば、表日本は地理的条件に恵まれていたために、社会資本整備の面で優先されたと要約できる。費用対効果を考えれば、至極妥当な見解である。したがって、「裏日本」の成立は「日本資本主義の発展が内在していた地域的不均等発展の法則」（内藤 1982：121）によるも

のではなかったということになる。経済地理学的に言えば、まさに「建造環境 (built environment)」は自然条件をも含めた幅広い観点から検討すべきだということである。

それでもなお、「かつての時代、日本列島には表も裏もなかったといえる」(内藤 1982: 120) とすれば、どのようにして「裏日本」は成立したのであろうか。言い換えれば、なぜ地理的条件が表日本と裏日本の明暗を決定づけることになったのであろうか。この問題に関して、「シルク・ロード」の名付け親として知られるドイツの地理学者リヒトホーフェンは、1860 年に日本を訪れた際に次のように日記に記している。

「横浜に定住している多くの商人たちは直ちにそこへ移住するために、大坂開港の瞬間を待ち焦がれていた。従って本当の将来の日本にとっての上海はそこに求められていよう。その間横浜も成長を続け、常に日本島の東部のための輸出基地であり続けるだろう。新潟は外国勢力からは十分ではないとして相手にされなかったし、彼らは代わりの港を選ぶ気はないようだ」(リヒトホーフェン 2013: 53)。

つまり、日本海側は外国商館から見放されていたのである。新潟が開港したのは 1869 (明治 2) 年であって、初のアメリカ大陸横断鉄道とスエズ運河が完成したのと同年である。したがって、交通革命が大きな進展を見せた年であったが、リヒトホーフェンはグローバリゼーションの観点から「裏日本」成立の予兆を既に察知していたことになる。言い換えれば、「表」か「裏」かを決定づけたのは、日本国内における資本主義の発達ではなく、むしろ外国資本の動向だったということになる。従来の「裏日本」論には後進性をグローバリゼーションとの関連で把握するという地政学的発想が皆無であったことを考え合わせれば、まさに卓見と言えるのではなかろうか。

## 2. 『大日本地誌』との比較

『大日本地誌』は教科書ではなく学術書であって、ドイツ地誌学の影響<sup>(6)</sup> が強く感じられる。表 1 は『大日本地誌 巻五』の目次であって、まず自然環境を概観した後で人文地理を系統的に考察し、最後に地誌という順番になっている。編者のひとり山崎直方はドイツに留学して、ボン大学のライン教授やウィーン大学のペルク教授に学んだ後、「日本に独立科学としての地形学を打ち立てた」(吉川・杉村・貝塚他 1973: 372)。つまり、山崎は日本にアカデミック地理学を確立した立役者のひとりであった。帰国と同時に、瀬戸内の海底地形と日本の氷河地形に関する画期的な研究を発表した。そして、この研究によって、日本における地形研究の対象が大地形から中、小地形へと移ることとなった。しかし、「その後しばらく山崎は佐藤伝蔵とともに『大日本地誌』10 巻の作成に力を注いだため、地形研究の上ではあまりみるべきものがない」状況が続いている

表1 『大日本地誌 五』の目次

|             |
|-------------|
| 総 論         |
| 第一編 地 文     |
| 第一章 地 形     |
| 第二章 海岸並に海岸線 |
| 第三章 地 質     |
| 第四章 気 象     |
| 第二編 人 文     |
| 第一章 沿 革     |
| 第二章 政治行政    |
| 第三章 産 業     |
| 第三編 地方誌     |

〔出典〕 山崎・佐藤（1915b）より。

（吉川・杉村・貝塚他 1973：373）。ここにアカデミックな地誌学の確立に対する熱意を感じることができる。『大日本地誌』はまさに「近代的地誌の代表といわれる著作」（内藤 1982：121）だったのである。

本稿では総論に注目してみたい。その第一の理由は「裏日本」論が総論のみを分析対象としているからであり、第二の理由は志賀の「裏日本」論との接点を総論に見出すことができるからである。まず第一点に関して、哲学者の和辻哲郎は、19世紀後半におけるドイツ地理学の特徴を「似寄った地形によって民族の類型を分け、文化発達の段階を定めるやり方」（和辻 1979：250）に求めている。これはラッツェルの文化伝播論を指しているものと見られる。「似寄った地形」に着目するのは文化の伝播が人間や物資の移動性の容易さに深くかかわっているからであって、たとえばラッツェルの弟子センプルも人類史の中に見られる「自然の障壁の厳然たる影響」や「自然のハイウェイの明らかな影響」の体系化を研究の主軸に据えている（センプル 1979：4-6）。センプルの基本的な発想は「自然の障壁」によって孤立した地域は文化的に停滞的であるのに対して、「自然のハイウェイ」によって文化交流が活発な地域は発展的だというものである。たとえば、山岳地域や海岸線がなだらかな地域は文化交流が不活発であるのに対して、入江の多い半島や島嶼部は文化交流が活発であるとされている<sup>(7)</sup>。

拙稿（2011）において指摘したように、実は「裏日本」の成立も、以上の観点から説明することができる。たとえば、1878（明治 11）年に来日したイギリス人女性探検家イザベラ・バードは、新潟における「自然の障壁」、つまり信濃川が運ぶ大量の土砂がもたらす影響について次のように述べている。

「手を焼かせる信濃川が天然の重要交通路である海との行き来をしつこく阻んでいるので、日本でも有数の豊かな地方の主都であるこの新潟は『取り残されて』お



り、地方自体も米、絹、茶、麻、人参、藍ばかりか、金、銅、石炭、石油を大量に産しながら、その産物の多くは荷馬に積み、私がたどったような悪路を通して山脈を越え、江戸まで運ばなければならないのです」(バード 2008: 268-269)。

この土砂こそ、新潟港が「外国勢力からは十分ではないとして相手にされなかった」最大の要因だった<sup>(8)</sup>と見られる。夏に会津経由で新潟に行ったので、バードに脊梁山脈や豪雪に関する記述はない。しかし、その陸路が山脈越えの「悪路」であるため、新潟が「取り残されて」と感じていた点に注意が必要である。そしてそれ以上に、この「取り残されて」という感覚が交通革命に伴うグローバリゼーションという文脈の中で生まれた<sup>(9)</sup>ものであって、バードに国内市場の形成や資本主義の発達という発想など微塵も見られない点にも留意しなければならない。

『大日本地誌 巻五』でも、「自然の障壁」として脊梁山脈や豪雪に関する問題が指摘されている。まず、脊梁山脈に関しては「表日本との間に一大障壁をなし、独り其地形上の境界線たるに止らず、又延て或は気界の現象に、若しくは人文の発展等につきて特殊に影響を与ふること尠なからざるものあり」(山崎・佐藤 1915b: 2)との記述がある。また、豪雪に関しても「鉄道列車すら時に運転を休止するに到る」など「人文発展に一障しょうがい礙を与ふる」とされている(山崎・佐藤 1915b: 3)。豪雪は文明の利器をも寄せつけないというのだ<sup>(10)</sup>。そして、『大日本誌 巻六』(中国)でも山陽地方と山陰地方に見られる社会進化的な地域差が、「本邦文化の中心から遠かりて僻在せる」といった「各種の地理的原因」によって説明されている(山崎・佐藤 1915c: 3)。さらに、北陸地方と山陰地方に共通する要因として、冬季の強い季節風によって航海が困難であるという要因もあげられている。ここには、紛れもなく自然条件と社会進化の関係に関するアカデミック地理学の知見が集約されていると言えよう。

これに対して、『日本風景論』には、前述のように日本海岸と太平洋岸とに文化的な「発展進暢」の違いが見られるとする記述があるものの、その要因を地形的条件による制約によって把握しようとする意図がそもそも見られない。この点はアカデミック地理学との大きな違いであると言っていい。たしかに「日本海岸は曲屈少し」「太平洋岸は曲屈多し」(志賀 1995: 24)という記述はある。また、「日本海岸は在来交通の利便甚だ少なし」「太平洋岸は交通の利便甚だ多し」という記述も存在する(志賀 1995: 28)。しかし、「日本海岸は冬春の間風濤險悪、船舶の難破するもの多し」「太平洋岸は夏秋の間風濤險悪、船舶の難破するもの多し」(志賀 1995: 26)といった具合に、志賀は日本海岸と太平洋岸を二項対立的に図式化して対比することによって、自然景観や風景美の多様性を説明することに主眼を置いている。このため、海岸線の「曲屈」の違いによって、「在来交通の利便」に大きな違いが生まれ、文化的な「発展進暢」に著しい対照性



を生み出したといった地誌的な分析は全くなされていないのである。

しかし、ここで重要なのは志賀が地誌的な分析を意図的に封印したということである。1889（明治 22）年に志賀は『地理学講義』を出版した。志賀地理学の特徴のひとつは入り組んだ海岸線を重視する点にあり、その理由は「港湾岬半島内浦ノ多々ナルニ理由スルヲ以テ、船舶交通ノ利便ヲ大ニ誘致シ、地方ノ開進発達ヲ促ス」ことにある（志賀 1889：39）。つまり、海岸線が入り組み天然の良港に恵まれた地域は交通上の利便性が高く、「地方ノ開進発達」に有利な環境にあるという認識からである。この観点から見た場合、「北海岸ニ在ル開港場ハ極メテ不完全ノモノ、ミ」だとして、米子や三国、直江津、新潟をあげている（志賀 1889：40-41）。したがって、「北海岸」とは日本海岸を指す。これに対して、「南海岸」、つまり太平洋岸は横浜や下田、清水、神戸、下関といった天然の良港に恵まれていると述べている。また、「開進」とは「開化」と「進歩」を意味するものと考えられ、その「発達」の違いを地形との関係で説明しているのである。

したがって、「日本海岸は曲屈少し」「太平洋岸は曲屈多し」という記述には、封印された志賀地理学の片鱗を垣間見ることができる。そして、志賀地理学は文化的な格差を社会進化論的な次元で把握しているという点、およびその違いを地理的要因によって分析している点において、まさに『大日本地誌』と同じ水準にあった。しかし、『日本風景論』において、志賀はその地誌的分析を意図的に封印していたのである。産業革命が本格化する前から格差があったとなると、その格差を認識することによって「裏日本」が成立したとする解釈も成り立つ。そして、格差の認識が国土空間を意識することで生まれたとすれば、『日本風景論』によって「裏日本」が発見されたのではないかとする解釈へとさらに展望が広がる。しかし、ここでは議論を急がずに、志賀が『日本風景論』において封印した地誌的分析についてより詳細に検討してみることにする。

### 3. 『日本風景論』の基本構想——『南洋時事』との接点——

『日本風景論』において封印された地誌的分析は、志賀の我流地理学である。たとえば、志賀地理学のもうひとつの特徴に、「輿地図ヲ披キ看レバ北半球ノ主要ナル岬若クハ半島ハ必ラズ南方若クハ東南方ニ突出セリ」（志賀 1889：38）という事実を重視する点にある。これが我流だとわかるのは、世界の主要な半島や岬が南か東南を向いている理由を、地軸の傾きと地球の自転で説明して悦に入る素振りが伺えるからである（志賀 1889：39）。志賀を似非科学者だと非難したいのではない。指摘したいのは実に愛すべき地図マニアだということである。志賀にとって世界地図は自問自答用のパズルのようなものであった。たとえば、「凡ソ大島ハ大州若クハ大半島ノ東頭ニ所在スルモノ多シ」と指摘し、具体例を列挙した後で「是レ地図上ノ一奇事ニシテ其理ハ未ダ詳ラズ」と記している（志賀 1889：41）。たしかに大きな島や大陸が東に膨らんでいることを地軸の

傾きや地球の自転で説明することなどできない。しかし、ここには世界地図を眺めては疑問点を発見し、自分で答えを探し出そうとしていた様子が伺える。

この当時の志賀は単なるアマチュア地理学者であった。自然地理学に関する知識は素朴極まりないものであって、たとえば「高地」を「高原」と「山岳」に区分し、「山岳」に関連する用語として「山脈」「山系」「丘陵」「火山」の説明を行っている（志賀 1889：18-19）。ここにはアルピニストの面影など微塵もない。それでも、前述のように、文化的な格差の問題に関する理解は『大日本地誌』と大差が見られず、地域差を経済格差といった量的な次元ではなく、社会進化論的な次元で把握する点では一致していた。たとえば、志賀は「人類開化ノ程度」を「野蛮」「半開」「開明」に区別している（志賀 1889：28-29）。ただし、「野蛮」は「一社会ヲ成立セズ、文学モ無ク、倫理モ知ラ」ないが、「半開」には社会があり、「理想未ダ発達セザル」ものの、「農業ヲ知り且ツ文学ヲモ所有」しているとして、「文学」を社会進化の尺度に加えている点はいかにも志賀らしい。明らかにこの尺度は「半開」の段階にある日本を念頭に置いたものだが、後に風景との接点となったことを考えれば優れてフンボルト的でしたらあった。

志賀が地図マニアであって、地理マニアではなかったのは、独自の「日本地形論」（志賀 1889：62）に原因がある。地形に日本が進むべき未来像を求めていたのである。志賀は「予輩ハ其地形地勢上ヨリ貿易製造国ナリト立論ス」（志賀 1889：64）として、表 2 にある 10 項目をあげている。以下にその主張をまとめる。まず、(1)のために、日本は「海運ノ事業ニ便益」であって、気候風土が多様であるため「物産ノ種類太ダ多い」（志賀 1889：64-65）。また、(2)であるため、平野部と山間部とで気温差が大きく、多様な農産物の栽培に適している。(3)は東西に連なる山脈よりも南北に走る山脈の方が鉱物資源に恵まれているという地図マニアらしい独創的な発想に基づく。学術的な裏づけには欠けるのだが、要するに日本には鉱産資源が豊富であるということである。そして、(4)であるため、日本は漁業の発展に恵まれた環境にあるとされている。

表 2 日本地形論であげられている 10 の恩恵

- |      |                                |
|------|--------------------------------|
| (1)  | 南北に長い地形からの恩恵 — 長い海岸線と多様な風土 —   |
| (2)  | 中央にある分水界からの恩恵 — 多様な植生 —        |
| (3)  | 海岸線に並行する山脈からの恩恵 — 豊かな鉱産資源 —    |
| (4)  | 四方を海に囲まれた島国から恩恵 — 豊かな漁場 —      |
| (5)  | 日本列島の位置からの恩恵 — 東西南北に隣国 —       |
| (6)  | 貿易風からの恩恵 — オーストラリア・南アメリカとの交易 — |
| (7)  | 日本海流からの恩恵 — 北アメリカとの交易 —        |
| (8)  | 北半球と南半球との季節の違いからの恩恵            |
| (9)  | 日本の風景美からの恩恵 — 優れた美意識 —         |
| (10) | 日本人の美意識からの恩恵 — クール・ジャパンの展望 —   |

〔出典〕 志賀（1889：64-71）より。

次の(5)～(8)は基本的に『南洋時事』において述べられている内容に等しい。まず(5)では、「東隣」にアメリカ市場、「北隣」にロシア市場、「西隣」に中国市場、「南隣」にオーストラリア・ニュージーランド市場があり、インドやメキシコ、ブラジルといった「新販路」も有望だと述べられている（志賀 1889：67）。こうした見方は日本が輸出主導型の離陸経路を辿ったとする見解とよく符合する。また、パナマ運河開通によって、アメリカ東海岸や西ヨーロッパとの貿易が活発になれば、「日本国ハ実ニ東洋商業ノ中心トナルベシ」（志賀 1889：68）との展望も語られている。加えて、(6)や(7)のおかげで、南北アメリカやオーストラリアとの交易条件に恵まれており、(8)のおかげでもし国内で夏物が売れ残ってもオーストラリアで売り捌くことができると指摘されている。

これに対して、(9)と(10)には『日本風景論』の発想の原点を見出すことができる。そこでやや詳細に検討しよう。まず、(9)は「日本ハ天然ノ山水ニ富ミ、其風景甚ダ優美ナリ」、「西洋人ハ日本ノ国土ヲ歎喜シテ世界ノ極楽国ト唱呼セリ」というものである（志賀 1889：70-71）。そして、日本の国土は「天然ノ美ヲ鍾<sup>あつ</sup>メ」ており、知らず知らずのうちに「日本国民ガ美術的ノ感念ヲ養成發育セシムルニ足」る環境にあるという解説が続いている。また、(10)は「日本国民ハ美術的ノ観念ニ富メリ」というもので、明らかに前項を受けたものである。志賀は日本人が世界に対して美的感覚に溢れた作品や商品を発信し続ける文学的才能や感性を失いつつあるのではないかとの危惧・懸念に対して、「這般ノ勢力ガ潜伏シツ、アルヲ確信スルモノナリ。故ニ日本国民ガ将来ノ間ニ精妙ナル大美術家、大製造家ト化成スルノ容量ヲ認識ス」と述べている。つまり、現代風に言えば「大丈夫！ クール・ジャパン戦略で行ける！」ということだ。

日本人の美的感覚に関して、志賀は「其勢力ニシテ猶ホ未ダ消失セザルモノトセバ、之レヲ正則的ニ誘導スルヲ得可シ」と述べている。つまり、日本人の美意識を自覚的かつ積極的に涵養する必要があると説いていたのである。そして、それを実践して見せたのが、まさに『日本風景論』であった。このように、「日本地形論」には『南洋時事』から『日本風景論』へと至る志賀の思考過程が集約されている。ただし、志賀の「日本地形論」は素朴な地形学的な知識の上にこそ成り立つものであって、『地理学講義』において志賀は日本海沿岸を「北海岸」と呼んでいた。裏日本という自然地理学の用語が地理の教科書に用いられる以前ではあるが、アカデミックな知識とそうでない知識の違いに志賀が無頓着であったことは確かである。しかし、『中学地理 日本之部』ではこの点に劇的な変化が見られている。したがって、『日本風景論』は自然的風景に対する文学的才能や感性を媒介として志賀を非アカデミック地理学からアカデミック地理学へと橋渡しする契機となったと言える。そこで、次章では志賀地理学に見られた変化について検討する。

### Ⅲ 風景論と美意識における文化帝国主義

#### 1. 風景から風土へ ―「裏日本」論における美意識―

『日本風景論』がその後の志賀地理学の礎となっていることは明らかである。たとえば、日本海岸と太平洋岸の二項対立的図式は、『中学地理 日本之部』だけではなく、1904（明治37）年に出版された『地理教科書 本邦編』や1906（明治39）年に出版された『地理講話』にも踏襲されている<sup>(11)</sup>。したがって、『日本風景論』によって、表日本と裏日本を対比する形で日本の風土を総論的に語るという志賀独自の記述スタイルが確立したと言える。また、『中学地理 日本之部』以降、さらに南日本と北日本を対比するというスタイルも確立している。これは今日で言う西日本と東日本の対比に相当するものである。これに対して、『大日本地誌』は地域単位での地誌的記述には優れているものの、日本の風土を総論的に語るという発想に乏しい。このため、北陸編では表日本と裏日本という言葉が用いられてはいるものの、奥羽編や中国編では用いられていない。したがって、国土空間のグランド・デザインの点では志賀の方が明らかに一枚上手であって、表日本と裏日本という国土空間に関する意識を普及・浸透させた点で、志賀が果たした役割は極めて大きかったと言える。

しかし、「日本地形論」に専門的な自然地理学の知識が加わり、日本の風土の多様性に関心を向けたために、封印されていた地誌的分析にやや混乱が生じたようである。たとえば、1899（明治32）年に出版された『内外地理学講義』にその混乱の様子を窺うことができる。これは志賀が執筆したものではなく、遠州西部で行った講演を筆記したものであるので、ある程度の混乱は仕方のないものであったとは言える。もともと『地理学講義』には国民性に関する記述がある。「国粋（nationality）」を問題にしていたのだから当然なのだが、その中にはエートスの違いを自然条件で説明する環境決定論的で、植民地主義的な考え方も含まれていた。最も穏便な箇所を引用すれば、「山国ノ人民ハ頑固質朴節儉忍耐ニ、平原国ノ人民ハ自カラ進取活発ニ、海国貿易国所在ノ人民ハ大概敏捷伶俐ニシテ且ツ奢侈ナリ」（志賀1889：51）といった見方である。ただし、「日本地形論」で、志賀は日本の発展性に眼を向けていた。そして、日本の発展要因を地形に求めれば、幸いにして植民地主義的な眼差しは封印されることになる。

しかし、志賀にグローバリゼーションという文脈の中で、「裏日本」における「地理的依存性からの脱却」というシナリオを描こうとする意欲が生まれた。この結果、『内外地理学講義』ではこの植民地主義的な眼差しが日本の後進地域にも向けられ、自然条件によって住民のエートスに違いが生じることが指摘されている。具体的な引用は控えるが、インパクトが強いだけに講演は大反響だったようで、「筆記者」は「緒言」にお

いて聴講者の分だけではなく「増刷」を行ったと述べている。この反響は『日本風景論』によって国土意識に変化が生じ、故郷や異郷に対する関心が高まった時代状況を反映しているものと思われ、その影響の大きさは牧口常三郎の『人生地理学』にも見てとることができる<sup>(12)</sup>。講演の趣旨は一貫しており、志賀は「世界ノ形勢ヲ会得」し、「我国ノ独立ヲ維持シ国力ヲ発達」させるには、「地理学思想ノ養成」が急務であると主張している（志賀 1899：33）。その「地理学思想」にやや問題があったのだが、同時に志賀は中央山系が「人馬ノ通行ヲ遮断シテ」いるため、「自然南ト北ト間ニ交通力絶ヘテ」、表日本と裏日本の対照性が生まれたとも解説している（志賀 1899：44）。したがって、独自の文学的な記述スタイルが確立しつつもあったこともわかる。

最も辛辣で品位に欠ける言葉を浴びせられたのは山陰地方であって、実は「裏日本」という後進地イメージの形成に一役買ったとも思われるのだが、最終的には国土空間のグランド・デザインが植民地主義的で非文学的な眼差し対して優位に立ったようである。『内外地理学講義』には双方の眼差しが混在しているが、人間の優劣に対する見解はそもそも相反している。したがって、本来は双方が双方を打ち消し合う関係にある。差別主義的な眼差しを封印したのは、『日本風景論』の地誌的な分析の場合と同様、恐らく志賀の「裏日本」論に秘められた美意識である。実際、志賀の「裏日本」論は詩的構想力に満ち溢れている。たとえば、「自然南ト北ト間ニ交通力絶ヘテ」とあるが、「南」の表日本と「北」の裏日本との交通が活発であった時代が存在したわけではない。したがって、明らかに創られた歴史である。そして、どうして歴史を創作したのかを考えた時、この詩的構想力がデモクラティックな感性に裏打ちされている<sup>(13)</sup> ことがわかる。表日本と裏日本とで人間に優劣があるわけではないという信念を読みとることができるからである。したがって、「半開」や「開明」といった社会進化論的な見方が主流だったことを考えれば、優れてデモクラティックな感性だと評価していいだろう。

前述のように、阿部は『大日本地誌 巻五』では格差観念が除去されているという解釈を提示した。教科書の記述を重視していることから、この解釈が生まれた契機は、千葉が自らの「裏日本」論に対して、「人間の力に差異をみとめることは、差別観念を植えつけることになるという、もっともらしい意見」<sup>(14)</sup> が出ることを予測し、「地理的研究は教育手段としてのみ価値があるわけではありません」とあらかじめ反批判を行ったことにあったと見られる（千葉 1964：171-172）。恐らくはこの指摘から、阿部は地理教育には差別や格差に言及することを慎む傾向があると読みとったのではないだろうか。いずれにせよ、もし差別意識を嫌うデモクラティックな感性が日本の地理教育に伝統的に受け継がれているとするならば、その起源を志賀に求めるべきではないだろうか。デモクラティックな感性と詩的構想力によって、志賀は「裏日本」への差別観念を《解毒》してみせたからである。志賀の足跡はかくも偉大なのである。



このデモクラティックな感性は、志賀の風景論にも貫かれている。1915（大正4）年に実業之日本社主催の下で新日本三景の選定が行われ、大沼（北海道）・三保の松原（静岡）・耶馬溪（大分）が選ばれた。しかし、志賀は新日本三景という発想そのものに批判的で、「陸も海も、山も水もゴタ雑にして其間より優劣、即ち『日本新三景』を投票に依て決定する杯とは、世界切つての愚の極愚」であり、『我が某所は日本新三景の内に選定せられたり』と得々自負する杯に至っては「日本人の頭脳そへいの粗陋なることを内外に明示すると同様である」と手厳しかった（志賀 1929：193）。つまり、それぞれの風景が持つ趣・味わいを楽しむのではなく、ただ「優劣」をつけるという発想は、日本の恥を外国に曝すようなものだということである。新日本三景の選定は風景美に新たな尺度を設けようという試みであると解釈できる。したがって、「国粹」である文学的素養に乏しいために何らかの尺度がなければ風景美を楽しむことが出来ない「野蛮」な人びとの発想であって、恐らくこの点が志賀には許せなかったのであろう。

アルピニストの小島烏水は『風景論』が出てから、従来の近江八景式や、日本三景式の如き、古典的風景美は、殆ど一蹴された観がある」（小島 1995：371）と述べている。これは志賀の風景論の本質を突いたもの<sup>(15)</sup>であって、志賀のデモクラティックな感性は美意識における文化帝国主義を拒絶するのである。風景美の問題を突き詰めると、結局のところ風景は誰のものなのかという問題に行き着く。美しさを多くの人たちと分かち合いたいか、独り占めにしたいかに関係するからである。一般に風景はみんなのものであると考えられており、これを「開かれた風景」と呼ぶことにする。これに対して、フランスの人文地理学者オギュスタン・ベルクはエリート層のためにしか存在しない風景があると指摘している。つまり、エリート層は風景の美しさを独り占めにしたいと願っていたということであって、これを「閉ざされた風景」と呼ぶことにする。そして、言うまでもなく志賀の風景論は「開かれた風景」を論じたものである。

風景美を独り占めにするには、独特の作法が必要である。ベルクによれば、教養層・エリート層に属する人々が美をつくりだすプリズムを通して風景を眺めるのに対して、無教養の農民はそうしたプリズムをそもそも持っていない（ベルク 1990：115）。「閉ざされた風景」とはこのプリズムを通して眺める風景であり、エリート層にすれば、農民には美的感覚がないということになる。たしかに美的感覚に乏しい人間は存在する。しかし、「閉ざされた風景」の美しさを理解できないことは無教養を意味するものであっても、決して美的感覚の欠如を意味するものではない。「開かれた風景」とはプリズムを通さずに眺める風景であり、共感し合う美である。この公共財としての美に冷や水を浴びせるような文化帝国主義な発想は、デモクラティックな感性とおよそ相容れるものではない。したがって、志賀が嫌うのは当然である。実際、プリズムなどなくても、美的感覚に優れた農民は風景美を楽しんでおり、その楽しみ方のひとつが文学であった。



## 2. デモクラティックな感性の起源 ―「江山洵美是吾郷」に込めた想い―

明らかに志賀は文学、とりわけ漢詩文を通じてデモクラティックな感性を身につけている。このことを象徴するのが、実は冒頭の「江山洵美是吾郷」という一句なのである。「川も山もまことに美しい、これぞ我が故郷」という意味であって、もともとの読み手は仙台藩士大槻磐溪である。磐溪は江戸で生まれ育ったが、江戸蘭学界のリーダーであった父親の大槻玄沢を心から慕っていた。このため、父親の故郷である奥州はまさしく磐溪の心の故郷であった。名所旧跡の風景ではなく、まさに「開かれた風景」の美しさを詠った句である。しかし、当初、志賀は磐溪の名を記さず、そもそもの句も「江山信美是吾州」であった。このため、ポスト・コロニアリズムは剽窃だと非難すると同時に、「州」を「郷」に改めたことに、志賀のナショナリズムを読み解くという退屈極まりない作業に有り余るほどの精力を費やしてきた。しかし、前者に関して、漢詩文に精通する大室は借用や剽窃ではなく、一種の本歌取りであると指摘している（大室 2003：176）。

これを剽窃と非難するのは、恐らく志賀にすれば野暮なことであった。磐溪の作風に詳しい大島英介によると、17世紀後半から18世紀中頃まで江戸期の漢詩文では中国盛唐の格調高い詩風が好まれていたが、「個性に乏しく日本の情趣に欠けていたため」、マンネリ化が進んでいった（大島 2004：134）。そして、その後に「写实的、叙述的、個性的で表現が清新の意を伴った宋詩に学ぶ運動」が「庶民文化と共に盛んになって」いったのだという。つまり、様々な文芸活動と相互浸透が起こったということである。そして、大室によれば、その際に文体や詩風はもとより、発想や主題、構成や語彙の選択に至るまで、先行の作品を暗示し引用する引喩法によって、作者独自の世界を表現していたため、模倣は恥とはされなかった（大室 2003：177）。また、教養ある読者であれば、誰の詩句を模倣したのかは一目瞭然であって、独自の世界が表現されていれば、その作者の創作として受け入れられた。模倣ではなく、あくまで創作を楽しんだのである。

創作に関する以上のルールは同人文化の作法である。「同人」という言葉の起源に関して、コンテンツ産業論の出口弘は江戸時代の漢詩では「同人集」という用語が使用されていたと指摘している（出口 2009：305）。だからといって、漢詩が本家本元というわけではないが、愛好者の裾野が広い点が同人文化の特徴であって、同時代の歌舞伎や浄瑠璃だけではなく、現代のマンガやアニメにも共通する特殊日本的な創作活動の流儀であった。たとえば、歌舞伎ではもともとの物語である「世界」に様々な要素を加える二次創作が伝統的によく行われてきた。また、アニメの同人誌においても、もともとの物語が醸し出す「世界観」に新たな要素を加える二次創作が頻繁に行われ、そのアイデアへの共鳴者は「布教活動」と称して自主的にPR活動をも行う。今日、こうしたコンテンツ事情もクール・ジャパンの中に含まれることを考えれば、「江山洵美是吾郷」と

いう一句はクール・ジャパンを謳う本の冒頭を飾るにふさわしいと言えるのではないであろうか。前述のように、まさに「開かれた風景」の美しさを賛美しているからである。

「開かれた風景」への愛着は江戸時代の庶民文化の特徴であって、デモクラティックな感性の起源もこの文化的苗床にある。たとえば、出口は「日本的な江戸のコンテンツは、西洋における王宮に庇護された上流階級のハイアートとはまったく異なるビジネスモデルを持」っており、「歌舞伎も人形浄瑠璃も浮世絵も階級透過的なコンテンツであり、特定の階級の庇護なしに成長した」と指摘している（出口 2009：288）。つまり、ソーシャル・キャピタル論的な観点から見た場合、西洋のハイアートは王侯貴族や大資本家と芸術家との「恩顧＝庇護主義的關係（patron-client relationship）」の中で育まれたものと言える。このため、いかに上品で洗練されていようと、芸術の発達はソーシャル・キャピタルの蓄積には結びつかず、近代市民社会的な秩序も育たないのである（パットナム 2001）。そして、美意識における文化帝国主義はハイアート志向であり、志賀が批判した欧化主義もその一例であった。

これに対して、庶民の美的感覚に「国粋」を見出す姿勢は逆にサブカルチャー志向である。歌舞伎や人形浄瑠璃といった庶民文化は上品さには欠けるが、身分や階級を越えた同人や「連」と呼ばれる水平的な「市民的積極参加のネットワーク（network of civic engagement）」を通じて発達を遂げた。知的所有権によって作品を閉ざすのではなく、共有という形で作品を開くことによって、江戸のコンテンツ産業は発展を遂げた。出口がコンテンツ産業育成の観点から強調するのはこの点<sup>(16)</sup>である。これに対して、本稿で指摘したいのは、江戸の庶民文化がソーシャル・キャピタルの蓄積を促し得るものであったということである。前述のように、『地理学講義』の中で、志賀は「半開」の社会が「農業ヲ知り且ツ文学ヲモ所有」と述べたが、明らかにこの「文学」はハイアートではなく、農民参加型の同人文学である。開かれた文学と言ってもいいだろう。そして、階級透過的にして「庶民的（democratic）」なものは「民主的（democratic）」でもある。このため、江戸期以来のサブカルチャーの中で育まれた文学的才能や感性は基本的にデモクラティックなのである。

国土空間のグランド・デザインをデモクラティックな感性に基づいた詩的構想力で彩る感性を地理的構想力と呼ぶことにしよう。地域差が社会進化論的な問題と考えられていた時代にあって、志賀の地理的構想力は眩しいほどの煌めきを放っていた。その煌めきの源である『日本風景論』は特殊日本的な審美地理学であった。つまり、欧米の審美地理学がハイカルチャーの科学とハイアートを融合させようとする試みであったのに対して、『日本風景論』はハイカルチャーの科学とサブカルチャーの文学を融合させようとする試みであった。そして、ここに志賀の地理的構想力の原点があった。サブカルチャーの文学によって、デモクラティックな感性を身につけていた志賀は、その冒頭を「江山

洵美是吾郷」という磐溪の一句で飾った。「吾」とは志賀だけではなく、すべての人間を含むのであって、人間が感じ得るあらゆる風景美が日本の国土に散りばめられていると絶賛したのである。そして、多様な風景美によって育まれる多様な美意識に「貿易製造国」という日本の未来を託していた<sup>(17)</sup>のであった。

## おわりに

「裏日本」論において、『日本風景論』に表日本と裏日本との文化的な格差についての記述があるのに対して、『大日本地誌 巻五』にはないことが問題とされてきた。しかし、当時、地域差は経済格差という量的な次元ではなく、社会進化論的な問題と認識されており、そうした記述は双方に見られた。そして、『大日本地誌 巻五』では、社会進化論的な地域差が地理的要因によって生じた交通の利便性の違いによって説明されていた。これに対して、『日本風景論』において、志賀は地誌的分析を封印していた。しかし、『日本風景論』に先立って出版された『地理学講義』において、志賀もほぼ同様の見解を提示していた。したがって、社会進化論的な地域性に関する説明において、アカデミック地理学と前アカデミック地理学との間に決定的な違いはなかった。

『地理学講義』は志賀の我流地理学であって、地形を手掛かりにして「貿易製造国」という未来像を構想していた。この未来像において、志賀は日本人の優れた美的感覚とその感覚を育んだ美しい風景に大きな期待を寄せていた。したがって、この未来像の中に既に『日本風景論』の基本構想が含まれていた。風景美の多様性を強調しようとする試みを優先させたために地誌的な分析は封印されたものの、『日本風景論』は志賀の我流地理学をアカデミック地理学へと橋渡しする役割を果たした。そして、同時に表日本と裏日本の対照性を軸として日本の風土を語るという後の志賀地理学の礎ともなった。『大日本地誌』にはドイツ地誌学の影響が見られたが、国土空間のグランド・デザインという点において、志賀地理学は『大日本地誌』よりもむしろ優れていた。

国土空間のグランド・デザインは、志賀の地理的構想力の産物であって、志賀の「裏日本」論には独特の美意識が秘められていた。中央山系が「人馬ノ通行ヲ遮断シテ」いるため、「自然南ト北ト間ニ交通カ絶ヘテ」、表日本と裏日本の対照性が生まれたという説明には、創られた歴史が盛り込まれている。そして、社会進化論的な見方が主流の時代にあって、表日本と裏日本とで人間に優劣はないというデモクラティックな感性に裏打ちされてもいた。このデモクラティックな感性は漢詩文における同人文化によって培ったものであり、志賀の風景論にも貫徹されていた。庶民文化である同人文化は階級透過的であって、水平的な「市民的積極参加のネットワーク」によって発達したものであった。このため、ソーシャル・キャピタルを蓄積させ得る条件が整っていた。

一般に「裏日本」や「東北」に対する眼差しには植民地主義が見え隠れする。この点で、志賀の「裏日本」論は異彩を放っていた。まず『日本風景論』における「表日本」と「裏日本」の二項対立的図式を通じて、志賀は「裏日本」を国土空間のグランド・デザインにまで昇華させた。そして、『日本風景論』は特殊日本的な審美地理学であった。欧米の審美地理学はハイカルチャーの科学とハイカルチャーの芸術を融合させようとする試みであった。これに対して、『日本風景論』はハイカルチャーの科学とサブカルチャーの文学を融合させようとする試みであった。『日本風景論』が非アカデミック地理学、あるいは前アカデミック地理学とされてきたのは、サブカルチャーの文学との融合だったからではないかと思われる。しかし、日本のサブカルチャーの文学は上品で洗練された詩的構想力とデモクラティックな感性を育んでいたものであった。

#### 《注》

- (1) たしかにハワイ移民の状況についても報告しているが、あくまで志賀の力点は、アメリカ・中国・ロシアという「東西北ノ三隣国ハ夙ニ吾国人ノ通商貿易スル処ニシテ公私ノ交際往来モ亦頻繁」であるのに比して、オーストラリアやニュージーランドという「南隣」との通商貿易が未発達だという主張にある（志賀 1887：56）。そして、パナマ運河開通によって「南隣」が大きく発展を遂げるのは確実であって、有望だと力説している。
- (2) 表日本と裏日本という用語を初めて用いた地理の教科書は、1895（明治 28）年に矢津昌永が出版した『中学日本地誌』であり（阿部 1997：27）、地体構造の項目で「日本海ニ浜スル方ヲ内面或ハ裏日本ト云ヒ太平洋ニ面スル方ヲ外面或ハ表日本ト云フ」（矢津 1895：23）という形で登場する。「表日本」と「裏日本」は矢津の造語である。
- (3) 「産業革命期の東海・北陸地方の工業比較」という表に用いられているデータは、1903（明治 36）年、1913（大正 2）年、1921（大正 10）年のものである（千葉 1964：167）。産業革命の終期に関しては様々な見解があるが、「大正の末年」も「日本の産業革命の進行情」とする考え方は、古島敏雄の産業革命論に近い。
- (4) 内藤には千葉の研究を参考にした形跡がなく、表日本と裏日本がもともと自然地理学の用語だったという認識も欠如している。このため、山陰地方と北陸地方が「裏日本」とされており、東北地方に関する言及は全く見られない。
- (5) 1890 年代半ばには既に「表面＝先進」、「裏面＝後進」というイメージが芽生えつつあった（阿部 1997：35-36）。やや時代は下るが、1902（明治 35）年に出版した『地理学小品』の「表日本と裏日本」という章で、矢津は「天然上の裏面は亦人事的裏面たるを知るべし」と述べている（矢津 1902：149）。したがって、自然地理学的な意味合いが強い「内・外」を「裏・表」と置き換えることで、人文地理学的な意味合いを持たせようとしたようだ。
- (6) ヘットナーの地誌学体系については、山口幸男の研究を参照されたい（山口 2009）。
- (7) この観点は内村鑑三の『地人論』に見られる霊的構想力の源泉ともなっている。たとえば、内村は「日本国の位置は米、亜の間にあり、其天職は是等兩大陸を太平洋上に於て鍵鎖するにあ」と主張しているのだが、「日本は島国なり、而して島国の用は常に大陸間の交渉を助くるにあり」ということが根拠となっている（内村 1942：167）。
- (8) 阿部（1997：9）は「近世との経済的・社会的発展の落差の大きさ」を根拠のひとつとして、「新潟県を『裏日本』の典型と考えている」。この指摘は示唆に富む。新潟は自由主義帝國主義的な歴史観の反証となるからである。たとえば、1860 年代末から 1870 年代初頭の日

- 本に関して、日本経済史の石井孝は「資本主義諸国、とくにイギリスの市場としての性格が強ま」ったため、「在来産業は壊滅の危機に直面した」と指摘している（石井 1993：128）。しかし、自由主義帝国主義の観点に立った場合、「外圧」が弱かった新潟こそが内発的発展の拠点にならなければならないはずである。
- (9) 『中学地理 日本之部』において、志賀は「シベリア鉄道竣工の後に至れば、裏日本の繁栄は表日本と相違なきに至るや明らかなり」と述べている（志賀 1903：76）。したがって、志賀もまた交通革命に伴うグローバリゼーションの中で「裏日本」が取り残されていると考えていたことがわかる。
- (10) 『大日本地誌』における「裏日本」論が、社会資本整備の遅れによって「裏日本」が成立したといった考え方とは相容れないものである点に注意が必要である。ドイツ地誌学のライトモチーフは「地理的依存性」（ヘットナー 2001：209）である。
- (11) 『日本風景論』では 21 項目であったが、『中学地理 日本之部』と『地理教科書 本邦編』では、海岸・地勢・気候・物産・鉱物・交通・人口・文化・関係の 9 項目に絞られている。「関係」に対岸の諸国・地域を記すあたりが、いかにも志賀らしい。他方、『地理講話』では鉱物が削除され、個々の項目の記述内容がかなり詳細になっている。
- (12) 「裏日本」出身の牧口は『人生地理学』の校閲と批評を志賀に依頼している。牧口は『内外地理学講義』から「裏日本」に関する植民地主義的な記述を数多く引用しているが、恐らくは自責の念からか志賀は削除を要求していない。
- (13) 『中学地理 日本之部』や『地理教科書 本邦編』、『地理講話』においても、障子を例に障害物によって人間の往来が妨げられることが説明されている。人間誰しも億劫なところがあるため、活発な往来が途絶えるという説明であって、恐らくは無意識のうちにであると思われるが、読み手に「他者」を意識させない工夫がなされている。
- (14) 環境決定論批判とともに「地理的依存性」というライトモチーフが否定され、同時に戦後の「開発」イデオロギーによって、ライトモチーフが「地理的依存性からの脱却」に変化した結果、アカデミック地理学においても原因探しのために植民地主義的な眼差しを地域社会内部に向け始めたのである。
- (15) 小島烏水は文学的風景の愛好者であり、志賀のよき理解者であった。たとえば、小島は横浜商学校時代に生糸直輸出運動に共鳴して、横浜正金銀行に入学し、定年まで勤めた（小島 1996）。また、志賀重昂らの地理学者とも親交が深く、サンフランシスコ支店勤務中の 1922（大正 11）年には山崎直方が社宅内の小島宅を訪問してもいる。
- (16) 「市民的積極参加のネットワーク」は「互酬性の規範（norms of reciprocity）」によって支えられている（パットナム 2001）。このため、円滑なコミュニケーション・ネットワークの下で、信頼や相互協力が育まれやすい。江戸の文芸活動の特徴もコンテンツの送り手と受け手の垣根が低く、草の根的な広がりを持っていたことにある。このため、受け手の評判がフィードバックされ、コンテンツを拡大再生産する環境が整っていた。
- (17) ジョージ・アカロフ&ロバート・シラーは「外国の成功を精力的にまねても恥ずかしいことは何もない」として「他人のまねを、日本人の創意と知性のシンボルにした」ことを理由に福沢諭吉を絶賛している（アカロフ&シラー 2009：209）。日本の模倣文化の起源は福澤より古いのであって、これは明らかな間違いである。しかし、近代日本が急成長を遂げ得た理由のひとつに模倣文化があり、模倣文化の起源が江戸の文芸活動にあったとすれば、まさに志賀は卓見であったということになる。

#### 参考文献

阿部恒久 1997. 『「裏日本」はいかにつくられたか』 日本経済評論社.



- 石井孝 1993. 『明治維新と外圧』 吉川弘文館.
- 内村鑑三 1942 [初版 1894]. 『地人論』 岩波書店.
- 大島英介 2004. 『大槻磐溪の世界』 宝文社.
- 大室幹雄 2003. 『志賀重昂『日本風景論』精読』 岩波書店.
- 亀井秀雄 2003. 『南洋時事』 研究. 『北大百二十五年史 論文・資料編』 北海道大学百二十五年史編集室：54-110.
- 神立春樹 1985. 産業革命と地域社会. 歴史学研究会・日本史研究会編『講座 日本歴史 近代 2』 121-202. 東京大学出版会.
- 川俣絹織物同業組合 1910. 『北陸地方視察報告書』 川俣絹織物同業組合.
- 小木田敏彦 2011. 「東北」の文化的転回 ― 伝統地理学の立場から ―. 拓殖大学論集 人文・自然・人間科学研究 24：1-18.
- 小木田敏彦 2013. 田園風景の政治地理学 ― 美意識における文化帝国主義 ―. 拓殖大学論集 人文・自然・人間科学研究 30：13-34.
- 小木田敏彦 2014. ナショナリズムの歴史地理学 ― 田園風景と「安心」社会 ―. 拓殖大学論集 人文・自然・人間科学研究 32：1-24.
- 小島烏水 1996 [初版 1936]. 『アルピニストの手記』 平凡社.
- 志賀重昂 1887. 『南洋時事』 丸善.
- 志賀重昂 1889. 『地理学講義』 敬業社.
- 志賀重昂 1995 [初版 1894]. 近藤信行校訂『日本風景論』 岩波書店.
- 志賀重昂 1899. 『内外地理学講義』 谷島屋書店.
- 志賀重昂 1903. 『中学地理 日本之部』 富山房.
- 志賀重昂 1904. 『地理教科書 本邦編』 富山房.
- 志賀重昂 1906. 『地理講話』 早稲田大学出版部.
- 杉浦芳夫 1995. 小説『土』の歴史地誌学. 杉浦芳夫編『越境する地理学』 117-182. 古今書院.
- 千葉徳爾 1964. いわゆる「裏日本」の形成について ― 歴史地理的試論 ―. 『歴史地理学紀要』 6：165-180.
- 出口弘 2009. 絵巻物空間の進化と深化 ― 絵双紙からマンガ・アニメ・フィギュア・ライトノベルまで ―. 出口弘・田中秀幸・小山友介編『コンテンツ産業論』 287-339. 東京大学出版会.
- 古厩忠夫 1997. 『裏日本』 岩波書店.
- 村尾行一 1997. 『牧口常三郎の『人生地理学』を読む』 潮出版社.
- 山口幸男 2009. ヘットナーに関する地理教育論的考察. 群馬大学教育実践研究 26：1-7.
- 矢津昌永 1895. 『中学日本地誌』 丸善.
- 矢津昌永 1902. 『地理学小品』 民友社.
- 山崎直方・佐藤伝蔵 1915a [初版 1904]. 『大日本地誌 卷二』 博文館.
- 山崎直方・佐藤伝蔵 1915b [初版 1906]. 『大日本地誌 卷五』 博文館.
- 山崎直方・佐藤伝蔵 1915c [初版 1907]. 『大日本地誌 卷六』 博文館.
- 吉川虎雄・杉村新・貝塚爽平他 1973. 『日本地形論』 東京大学出版会.
- 米地文夫 1996. 志賀重昂『日本風景論』のキマイラの性格とその景観認識. 岩手大学教育学部研究年報 56-1：15-34.
- 米地文夫 2004. 志賀重昂『日本風景論』と愛郷心・愛国心 ― 中部日本の火山等に関する記載をめぐって ―. 総合政策 5-2：349-367.
- 和辻哲郎 1979 [初版 1935]. 『風土』 岩波書店.
- アカロフ, A. G. & シラー, J. R. 著, 山形浩生訳 2009. 『アニマルスピリット』 東洋経済新報社.



- ベルク, O. 著, 篠田勝英訳 1990. 『日本の風景・西欧の景観』講談社.
- バード, I. 著, 時岡敬子訳 2008. 『イザベラ・バードの日本紀行 上』講談社.
- ヘットナー, A. 著, 平川一臣・守田優・竹内常行他訳 2001. 『地理学 歴史・本質・方法』古今書院.
- リヒトホルフェン, F. 著, 上村直己訳 2013. 『日本滞在記』九州大学出版会.
- パットナム, R. D. 著, 河田潤一訳 2001. 『哲学する民主主義』NTT 出版.
- センプル, E. C. 著, 金崎肇訳 1979a, b. 『環境と人間 — ラッツェルの人類地理学の体系に基づく — 上・下』古今書院.

# 「パフォーマンス」の心理学に向けて：

ホルツマン「パフォーマンス」論のワークショップ実践への適用

保 坂 和 貴

## Toward a Psychology of “Performance”:

Application to the workshop practice  
of the Holtzman “performance” idea

Kazutaka HOSAKA

### 要 旨

本論文では、ヴィゴツキーから着想を得たホルツマンの心理学論を導きの糸として、筆者が実践している「〈こころ〉と〈からだ〉をつなぐワークショップ」の理論的な意味付けを試みた。そして、実際のワークショップのなかで行なっているエクササイズの分析から、実践のなかでの「身体性」に着目し、心と身体との関係について理論的な枠組みの検討を行なった。「できないことをやってみる」という「パフォーマンス」によって、人はやり方（道具）と振る舞い（結果）とを生成していく。その絶え間ない運動のなかでいまある自分からなりつつある自分へと発達していく、というのがホルツマンの議論である。その論考が、ワークショップの多くに適用できる可能性があること、さらに身体表現が意味理解の基盤であるとともに新たな意味生成の場になっていることを検討した。

**キーワード：**演劇的ワークショップ、身体表現、パフォーマンス、道具と結果の方法論、ホルツマン

## 1. はじめに

現在筆者は「〈こころ〉と〈からだ〉をつなぐワークショップ」と題し、高校生や短大生を対象として、演劇的方法を用いたコミュニケーション能力にまつわる実践を展開している。本論文では、そのワークショップに関する理論的基盤をまとめ展開させるとともに、その実践がもたらす含意を明らかにすることを目的とする。

## 2. 「〈こころ〉と〈からだ〉をつなぐワークショップ」について

### (1) ワークショップの広がり

2010年度から文部科学省の事業として「児童生徒のコミュニケーション能力の育成に資する芸術表現体験」が展開され、芸術家等と教師の連携のもと芸術表現体験活動を取り入れたワークショップ型の授業が展開されるようになった。筆者が居住する地域においても、市民ホールがコーディネーターとなって音楽家や演出家を小学校や中学校に派遣し、ワークショップ型の授業が実施されている<sup>(1)</sup>。

教育の現場にワークショップが持ち込まれ広がりをみせている。とくに大きな要因となっているのは、ワークショップがもたらすコミュニケーション能力の育成の側面である。文部科学省コミュニケーション教育推進会議の審議計画報告（文部科学省，2011）において、コミュニケーション能力は「いろいろな価値観や背景をもつ人々による集団において、相互関係を深め、共感しながら、人間関係やチームワークを形成し、正解の無い課題や経験したことのない問題について、対話をして情報を共有し、自ら深く考え、相互に考えを伝え、深め合いつつ合意形成・課題解決をする能力」と定義されている。従来の学校教育の伝統的な知識伝達型の授業では十分に育成し展開しきれない部分を、ワークショップ型の授業によって補完しようというのがねらいであり、総合的な学習の時間や芸術系科目などを利用して実施されている。そのようなワークショップの教育への広がりのなかで、ワークショップに関わる運営方法（山内・森・安斎，2013）や評価方法（荻宿，2012）、さらにはそれらを支える理論の整備が行なわれている（例えば、佐伯，2012；荻宿，2012）。

筆者も2015年度より「〈こころ〉と〈からだ〉をつなぐワークショップ」を高校生や短大生を対象として実践している。これは、演劇における力量形成・役者の養成として行なわれているワークショップのプログラムやエクササイズを用いた実践である。参加者のコミュニケーション能力の育成も目的のひとつではあるが、それ以上に、演劇的手法を取り入れた身体表現活動によって、心と身体の関係性に新たな気づきを生じさせ、他者との関係構築の糸口を形づくることを主要な目的としている。

### (2) 心の凝りと身体の凝り

そもそも「〈こころ〉と〈からだ〉をつなぐ」とは、どういうことか。現代社会においては、心によって身体をコントロールすることが求められる状況が多いように思われる。仕事を優先して空腹を我慢する、眠気に負けず勉強する、本当は嬉しいことがあっても表情には出さない、笑いたくても友だちのなかで浮くのがいやで冷静を装う、など、

心のありようをストレートに身体表現にあらわさず、心と身体とをコントロールしている例は枚挙に暇がない。

演出家の安田雅弘が指摘しているが、身体の欲することを心でコントロールすることは社会生活を営むうえでは大切なことであるが、それが過度に行なわれると、嬉しくても笑顔をつくれず無表情になっていたり、さらには哀しく感じるような状況でも何も感じなくなったりするようになっていく。このような心と身体の関係性の分離状況を、安田（2003）は「ココロのコリ」、「カラダのコリ」と言い表している。笑顔とは裏腹な無感動の心のありよう、大きな声を出して泣きたいのに平静を装う表情。心と身体とは次第に分離したひとつの「項」として存立するようになっていく。そしてその分離が更に進行するとき、人は病的な状態へと陥るのかもしれない。

本来、心と身体は、どちらか一方がもう一方に作用するという因果関係の図式としては把握することのできない複雑な系をなしていると考えられる。例えば、「カウント」と呼ばれる指を使った活動がある（安田，2003）。右手は親指を一本折った状態にし、左手は全て開いたままにする。そこから両手別々に指を折り（そして開き）ながら、「イチ、ニ、サン……」と10まで数えていくというエクササイズである。単純でありながらも、左右の指は簡単に動いてくれない。指を動かすという行為すら意識的にコントロールすることが難しい。さらには意識を集中させればさせるほど、指を折る行為は上手に進行しないこともある。

身体運動をコントロールできないという状況は、イライラ感やむずがゆい気持ちを喚起させるが、次第に意識を集中させ運動を反復し、練習を重ねることで、それが可能になっていく。そうになると、自然に心のありようも打ち解けてくる。

このような「ココロのコリ」と「カラダのコリ」、心と身体の分離状況を、演劇的な手法や身体表現を用いてほぐし、つなぎ合わせて行くこと、そして、心で身体をコントロールするという「心→身体」図式ではなく、身体を用いた何らかの表現活動を通して、そこでの身体のあり方と心のあり方への気づきを促していくことが、著者が取り組んでいるワークショップの目的である。

さて、上述したワークショップを実践するにあたり理論的基盤としているのが、ホルツマンの心理学論である。異色のヴィゴツキーの研究者であり、かつ多彩な活動の実践家でもある彼女の心理学論には、ワークショップの実践を支える理論的基盤、とりわけ心身関係や人の発達に関する重要な示唆が含まれている。

### 3. ホルツマンの心理学論とその射程

ホルツマンがそのメンターでもあり共同研究者でもあったニューマンとともにヴィゴ

ツキーの探求から導き出した革新的アイディアは2点挙げられる。第一に、「道具と結果の方法論 (tool-and-result methodology)」, 第二に、「パフォーマンス (performance)」概念, である。以下ではそれぞれの内容についてまとめることにする。

#### (1) 「道具と結果の方法論」について

ホルツマンとニューマンが、ヴィゴツキーの研究のなかで特に触発されたもの、それが「道具と結果の方法論」である。

従来の心理学は、行動主義に代表されるように自然科学や物理学の方法、道具主義的な方法によって、人間を探求してきた。例えば、人間の学習の成否を明らかにするために、行動を分析の単位として設定し、その頻度や反応時間を測定し定量化する。そのような道具立て（方法論）を適用することによって、学習の成否に関する結果を導き出す。このように、ある問題を解決するために、道具 (tool) があるとするのが「結果のための道具方法論 (tool-for-result methodology)」である (Newman & Holzman, 1993; ホルツマン, 2014)。

ホルツマンらは、ヴィゴツキーはその方法論を捨て去ることを主張し、人間の心理の探求には別の方法論が必要であると論じている、という。

流通している科学 (accepted scientific paradigm) では、方法とは適用され、結果を生み出す道具であるが、ヴィゴツキーはきわめてラディカルに、このような科学のパラダイムを捨て去るように提案した。流通科学では、方法と結果は一方向的であり、道具主義的で二元論であり、ニューマンと私は、これを結果のための道具方法論と呼んでいる (Newman & Holzman, 1993)。ヴィゴツキーは、質的に異なる方法概念を提唱した。これは適用される道具ではなく、道具も結果も同時に生み出す、持続的プロセスとしての活動（「探求」）である。道具と結果は、二元論的に分離されないが、しかし同じものでも一つのものでもない。むしろ、それらは、弁証法的な統合性／全体性／総体性の構成要素なのである。ヴィゴツキーが主張したのは、適用されるテクニックではなく、実践される方法論なのである。この概念の弁証法的関係性を捉えるために、ニューマンと私は、これを道具と結果の方法論（道具であると同時に結果 tool-and-result methodology）(Newman & Holzman, 1993) と呼んでいる。この新しい方法概念は、明らかに客観主義でも主観主義でもなく、二元論の囚われの外にある。そこにこの方法の可能性と力がある。(ホルツマン, 2014; pp. 13-14)

ここでホルツマンらがヴィゴツキーから引き出した「道具と結果の方法論」とは、実

践を通して道具と結果とが同時に生起してくるという視座である。ごっこ遊びを例にとって考えよう。例えば、ある子どもがお母さん役を演じるとする。現実ではお母さんが何のためにどのように振る舞っているのか、その振る舞い方やルール（つまり道具）を子どもは十分には知らない。しかし、お母さんらしい振る舞いの知識やルールを知らなくとも、ひとまず演じてみることによって、その子なりのお母さんの振る舞いとその演じ方が同時的に生起してくる。つまり、ごっこ遊びの展開のなかで、お母さん役としての振る舞い方やルール（道具）とお母さん役としての振る舞い（結果）とが同時に生起する。お母さん役を演じる「ために」、お母さんの振る舞い方という知識やルールを動員し、適用して遊んでいる、と捉えるのではない。

なぜ、「結果のための道具方法論」が人間の心理活動を捉えるのにふさわしいものではないとヴィゴツキー、ホルツマンは考えるのか。それは、人間の心理という動的なものを捉えるためには、従来の自然科学の方法論である「結果のための道具方法論」では不十分であると考えたからである。とりわけ、人間の「発達」という視座から見るときに、従来の自然科学の方法論の限界が明らかになる。

先ほどのごっこ遊びを例にとれば、従来の自然科学的な方法では、お母さん役としてどれほどの知識を持っているか、あるいはお母さんの振る舞いとして適した行動がどの程度生じたかで、子どもの能力が測定される。あらかじめ到達するゴール（結果）が予測され、それを明らかにするために「方法」が整備され適用されるのである。このとき、事前に想定された予定調和的な発達の道筋は捉えることはできても、現実的に多様に展開していく子どもの振る舞いや振る舞い方の豊かさ、さらには遊びのなかでの子どもの多様な変化のプロセスは捉えられない。

むしろ、日々の活動や実践のなかで、子ども（あるいは人）がしていることに焦点をあて、どのような方法（道具）である振る舞いが生起してくるのか、ある振る舞いが生じているときに同時にどのような方法（道具）によってそれが導き出されているのか、その道具と結果とが分ち難く結びつきながらも、生起してくるプロセスを明らかにすることが人間の心理活動を明らかにする方法として適切であると考えたのである。ある出来事や現象（プロダクト）とその出来事や現象が生じる仕組み（プロセス）が同時に立ち上がる様相を捉えようとしたのが「道具と結果の方法論」なのである。

この「道具と結果の方法論」の視座は、発達を捉える際にこそ重要になる。ある振る舞いとその振る舞いが生じる過程とが同時生成するように、実践では発達のための環境と発達そのものが同時に生成される。例えば、母国語を獲得していく過程では、母親が子どもの話を、大人の言葉の扱い方や話し方とは異なっていたとしても、それを受け入れ大人と会話するのと同じように話すことで、母国語を話すための環境が生じる。子どもが母国語を話すという振る舞いと、その振る舞いを可能にする環境とは同時的に生



起することになる。そして、発達と発達環境が同時に生起しているなかで、人はいまある自分でありながら自分になりつつある者になっていく、という道筋が発達のプロセスであると、ホルツマンは指摘する。

この「道具と結果の方法論」という視座で重要なことは、「実践すること」、「やってみること」が根底にあって、そこから道具（プロセス）と結果（プロダクト）、さらにはいまある自分からなりつつある自分への変化・発達が生じてくるということである。どのように実践したらいいのかわからないことをやってみる過程で、そのやり方と振る舞いも生じるし、その過程でいまある自分を超越して何者かになろうとする環境とそれに成り行く営み——発達のプロセスとプロダクト——とが生成されるのである。

## (2) 「パフォーマンス」について

ホルツマンがヴィゴツキーから継承し創造的に展開させたもうひとつのアイディアは、「パフォーマンス」概念である。この概念は、ヴィゴツキー研究のキーワードであり彼の代名詞ともなっている「発達の最近接領域（Zone of Proximal Development；以下、ZPD と表記）」や学習と発達の関係（「学習が先導する発達」）の論考を含みながらも、その後のヴィゴツキー派の研究に対する批判まで込められたものである。

「パフォーマンス」とは何か。端的に言えば、すでに可能なこと、可能な行為ではなく「できないことをやってみること（ホルツマン、2014：p. ii）」である。すでに可能な行為を演じることは、パフォーマンスではない。この概念をホルツマンはヴィゴツキーの「遊び」の論考から引き出している。

ヴィゴツキーによれば、子どもは遊びのなかで「頭ひとつ分の背伸び（a head taller than you are）（Vygotsky, 1978; p. 102）」<sup>(2)</sup>をして振る舞うことが可能になるという。例えば、ごっこ遊びでは、お母さんやお店屋さんのように自分ではやってみたいと思っても許されない振る舞いを、遊びのなかで創造的に実現する。日常生活では役割やルールに従って振る舞うことが難しくても、遊びの虚構の世界のなかではそれが可能になるという。遊びのなかで、子どもは自分自身でありながらも、自分の能力を超えた全く新しいことがらを演じることになる。子どもは現実では役割やルールにしたがって振る舞うことはできなくても、遊びのなかではよくわからないながらも役割を演じ、それに付随する振る舞いのルールにしたがってやってみる、それが発達を導く領域、すなわち ZPD を創出する、というのがヴィゴツキーの遊びの論考である。

ホルツマンはこのようなごっこ遊びにおける子どもたちの「できないことをやってみる」という振る舞いを「パフォーマンス」の一例として捉えている。それ以外にも、例えば母国語の獲得も「パフォーマンス」という概念で捉えられるという。子どもは養育者や身近な大人きょうだいが話しかける言葉を、それを同じようには操れないけれども、

話して（パフォーマンスして）みる。大人やきょうだいに支えられ環境において、パフォーマンスすることを繰り返し、次第に言葉を獲得した新たな自分になっていくのである。このように、「できないことをやってみる」というパフォーマンスが、いまの自分でありながらも新しい自分になるということを可能にする。「できないことをやってみる」というパフォーマンス概念には ZPD の議論が含み込まれている。

さらに、パフォーマンス概念には、ヴィゴツキーが論じていながらも、その後のヴィゴツキー派の研究では重視されてこなかった論点が含まれている。それは「模倣」である。例えば、次を見てみよう。

子どもにおける模倣の本質的な特色は、子どもが自分自身の可能性の限界をはるかにこえた、一連の行為を模倣しうる点にあります。子どもは、集団活動における模倣によって大人の指導のもとであるなら、理解をもって自主的にすることのすることよりもはるかに多くのことをすることができます。大人の指導や援助のもとで可能な問題解決の水準と、自主的活動において可能な問題解決の水準のあいだのくいちがいが、子どもの発達最近接領域を規定します。（ヴィゴツキー，2003：p. 18）

従来の ZPD の議論は、足場掛け（scaffolding）や仲間との協同学習、いわゆるより有能な他者の援助のあり方に焦点が当てられていた。そして、どのような仲間や大人の働きかけが、学習と発達を導くのか、という問題が検討されてきた。有能な仲間や大人の指導のあり方も子どもの発達を導く有益な要因ではあるが、しかし、子どもが可能性の限界をこえたことでも模倣できるということもまた、学習・発達を導く大きな要因である。

例えば、どんなに優秀なコーチや指導者がいたとしても、その指導だけでは十分なプレイヤーになることができないのは容易に想像できるだろう。それら指導を受けつつも、できないながらもやってみる（パフォーマンス）、さらには自らがより有能な他者を創造的に模倣することがなければ、よりよい熟達したプレイヤーへと発達することは望めない。つまり、パフォーマンスには、自分自身の可能性の限界を超えたものを模倣するという営みが含まれているのであり、そうだからこそ、いまある自分をこえて新たな自分へと至る発達を可能とする領域（ZPD）も創り出されるのである。

さらに、模倣は必ず模倣する対象を必要とする。それが経験に基づくものであれ、対面する他者であれ、できないことをすでにできている人が存在するからこそ、パフォーマンスは可能になる。それゆえ、パフォーマンスはソロの営みではなく、そのはじめから集団的な営みなのである。

ホルツマンはこの「パフォーマンス」の概念、および「道具と結果の方法論」に基づいて、ソーシャルセラピーやニューヨークの実験学校での演劇的な教育実践、企業研修など多種多様な活動を展開している。このホルツマンの方法論およびパフォーマンス概念は、ワークショップのような活動や実践を組織し展開するにあたって、そこでの参加者の振る舞いや発達を捉えるうえで重要な視座を提供するものである。

そもそも、演劇的な方法での身体表現活動は、多くの人にとってははじめての活動であることが多い。それゆえ、「経験のないことをやってみる」というパフォーマンスとしてそこでの実践は展開する。また、演劇的ワークショップの多くは明確な正解が存在しないことが多い。一つの場面を演じるにあたって、集団の成員や環境の違いによって、全く違った表現が生み出される。その生み出されたパフォーマンスと、それが生み出されるプロセスとを記述していく「道具と結果の方法論」が、実践とそれを通しての集団や個の発達を捉えるのに有益な視座になると考えられる。

その一方で、演劇的な身体表現を用いたワークショップの分析は、ホルツマンの理論枠組みでは実践されているが、焦点化されていない位相、すなわちパフォーマンスにおける「身体性」の次元を展開することのできる可能性をもつと考えられる。ホルツマンのパフォーマンス概念は、認知と情動という二項対立を乗り越えようとする際に有益なものであるが、精神（心）と身体との関係性について捉えるにあたって重要な示唆を与えてくれるものであると考えられる。以下では、著者が実践する「ワークショップ」のひとつのエクササイズを取り上げ、ホルツマンの論考を基盤にしながら分析をおこない、更にはその拡張を図る。

#### 4. 「〈こころ〉と〈からだ〉をつなぐワークショップ」の実践とその分析

筆者は現在、高校生の模擬授業や短大におけるゼミ等の時間に「〈こころ〉と〈からだ〉をつなぐワークショップ」を実践している。参加メンバーの集団規模や年齢、男女の構成等の違いによって多少の差異はあるものの、おおよそ次の図1に挙げるようなプログラムでワークショップを行なっている。

ワークショップは基本的に三部構成として組み立てている。第一に参加者相互の緊張感を和らげる「アイスブレイク」、第二に、身体表現を行なう「演劇的エクササイズ」、第三に「振り返り」である。図1のワークショップは90分×2コマのプログラムで、1～4・8が「アイスブレイク」、5～7・10～11が「演劇的エクササイズ」である。個別のプログラムの後や全体のプログラムが終了した際に、「振り返り」として何を意図した取り組みであったのかを参加者に伝えたり、コミュニケーションに関する問いを投げかけたりしている。

ワークショップのプログラム内容は、主に「相互のやりとりに焦点化する身体表現活動」と「協同的に作りあげる身体表現活動」の2つに分けることができる。相互のやりとりに焦点化する身体表現活動は、さらに「同調系」エクササイズと「やりとり系」エクササイズに分けられる。

①「相互のやりとりに焦点化する身体表現活動」：まず、「同調系エクササイズ」は、図1では2「みんなでジャンプ」、4「かっこいい自己紹介」がそれに当たる。参加者1人の身体表現と他の参加者の身体表現をシンクロさせるエクササイズである。「みんなでジャンプ」は、参加メンバーが車座になって立ち、ひとりずつ時計回りにその場でジャンプをする。一周して二周目になると、今度は2人が同時にタイミングを併せてジャンプをする。その際に言葉を交わしてはならない。三周目になったら今度は3人でジャンプする、というように周回毎に一緒にジャンプをするメンバーが増えていき、失敗するまで続けていく、というエクササイズである。4は車座になって一人が中心に歩いていき、好きなポーズをとって自分の名前を言う、そしてそれを見ていた残りのメンバーがその場で同じポーズをとり、その人の名前を呼ぶ、というエクササイズである。同調系エクササイズは、互いに同じ姿勢や身体表現を行ない、同調させることによって、緊張

#### 〈ココロ〉と〈カラダ〉をつなぐワークショップ

##### 〔ワークショップのねらい〕

- ・青年期はココロとカラダのバランスがもっとも崩れやすい時期。
  - 第二性徴、内省機能・抽象的思考の発達
- ・カラダが欲することとは反対の意志（ココロ）を持つように求められる
  - 〈いいひと〉〈優秀な人〉ほど、ココロでカラダをコントロール
- ・カラダを使った表現活動を通して、ココロとカラダのこりを解きほぐす

##### 〔プログラム〕

- 1 バースデイリング
- 2 みんなでジャンプ
- 3 わたしーあなた
- 4 かっこいい自己紹介
- 5 あとだしじゃんけん
- 6 テーブルセット（ナイフとフォーク → お皿・塩 2人→4人）
- 7 フローズンショット

～ 休憩 ～

- 8 ウォッシュ
- 9 だるまさんがころんだ ～大人 ver～
- 10 声のレッスン（おーい、はーい）
- 11 握手でわかるコミュニケーション

図1 ワークショップのプログラムの一例

感を和らげ一体感を生む効果があるように思われる。

次に、「やりとり系」エクササイズ、3「わたしーあなた」、8「ウォッシュ」、10「声のレッスン」、11「握手によるコミュニケーション」がそれに含まれる。このタイプのエクササイズは、日頃それとして意識せずに成立しているコミュニケーションに揺さぶりをかけ、コミュニケーションそれ自体を自覚させることを意図している。

例えば、3「わたしーあなた」は、参加メンバーが車座になって立ち、1人を起点として「わたし」と声に出して自分を指差し、「あなた」といって、車座に立っているメンバーの任意の1人を指差す。そして指差した人の場所へ歩いて移動する。その間に「あなた」と言われた人が、今度は「わたし、あなた」と発声して自分を指し、別の人を指差し、その人の場所へ移動する。そうやって、繰り返していくエクササイズである。このエクササイズでは、しばしば、誰に向けて「あなた」と言っているのか、あるいは「あなた」と言われているのか、伝わらない場面が生じる。自分を指して「わたし」と言うのは簡単であるが、参加メンバーの任意の1人に伝わるように、「あなた」と声を向けること、指をさすこと、そして自分に向けられた声を受け止めることは簡単なことではない。10の「声のレッスン」(1人の人が背を向けた(あるいは目をつぶった)メンバーの任意の1人に「おーい」と声をかけ、自分に声がかけられたと思った人が「はい」と応えるエクササイズ)も同じタイプの活動であるが、コミュニケーションの話し手として、他者に対して声を向けることやそれが伝わることの難しさ、受け手として、自分に向けられていることに気づく難しさ、を自覚するエクササイズが「やりとり」系エクササイズで意図しているところである。

②「協同的につくりあげる身体表現活動」：ワークショップのもうひとつの柱として展開しているのは「協同的につくりあげる身体表現活動」である。7「フローズンショット」、9「だるまさんがころんだ」<sup>(3)</sup>がそのエクササイズに分類される。

ここでは「フローズンショット」を取り上げよう<sup>(4)</sup>。このエクササイズは、4～5人程度のグループで行なう。グループにはある共通のテーマが与えられ、一人ひとりがその課題にそった身体表現を行ない、課題に対応する写真を集団全員で創りあげるというエクササイズである。このとき、グループメンバー間での会話は禁止されている。一人ひとりが課題から身体表現を考え、かつ自分より前に行なわれたメンバーの身体表現との対応を意識して、ひとつの写真を完成させるよう自らの身体表現を行なう。そして、ひとつの写真を完成させたのち、それぞれの身体表現を確認しあう作業を行なう。次に上げる図2は、ゼミ活動のなかで実践したフローズンショットのひとつである<sup>(5)</sup>。

このフローズンショットを創り上げるにあたり、提示された課題は「お花見」である。第三者的に見て、完成した図2-⑤の写真から、「お花見」であると理解することは、なかなか難しいだろう。しかし、①から⑤まで順番に身体表現をつなげて見ていくとき、

そこに独特に意味が立ち上がってくる。例えば、③の写真で、KはMとAを見上げるような身体表現を行なっている。MとAの身体表現にKに身体表現を重ねることで、「お花見」であるかのようなゆるやかな「意味」が生成されてくる。更には⑤のKの身体表現から、徐々に限定された「お花見」という「意味」が創りあげられる。「お花見」という写真を創り上げるために、個々の参加者は前の身体表現の意味を読み取り、そこに自らの身体表現を重ねゆく。そうやって、集団全体で表現される「意味」がゆるやかに立ち上がっていくのである。

ここで「ゆるやか」という表現を用いているのは、身体表現とその意味は、言語化されない限りは一義的なものとして確定ができないからである。身体表現は、一方で理解やその意味を共有化することが可能なものではあるが、他方、同時に理解のズレ、意味の不一致も含み込む。そのことをあらわしているのが、④のHの身体表現である。一

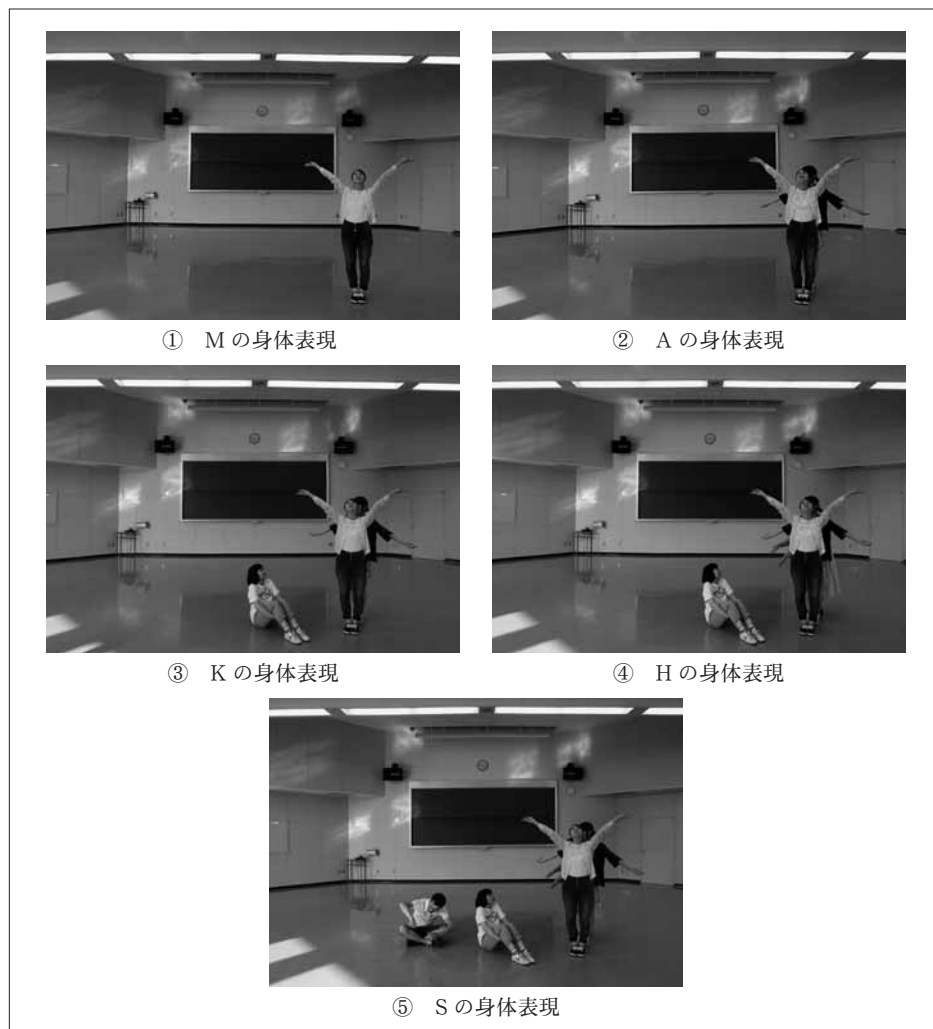


図2 「お花見」のフローゼンショット



見すれば、HはMとKから「木の枝」を身体で表現しようとしたかのように見える。しかし、全体完成後の確認の会話のなかでHは「花見にとしては枝で寂しいから桜の花びらを表現した」と発言していた。一方、他の4人は共通に「枝」として認識していた。このように、身体表現とそこから生み出される意味は、自他のあいだでズレを含み込む。このズレが、自らの身体表現のあり方への気づきを生む。「そのような表現では花びらとはわからないから、別の表現の仕方がよかったかもしれない」というように。

身体表現は多様な解釈に開かれており、それゆえ相互に理解を可能にするものでもあるし、互いに理解のズレを生じさせるものでもある。だからこそ、身体表現は豊かな意味生成の基盤となると考えられるのではないだろうか。そのゆるやかさに限定をかけ、意味を確定させるのが言語なのかもしれない。

図3のフローゼンショット「お正月」もまた身体表現が意味生成の豊かな基盤となっ

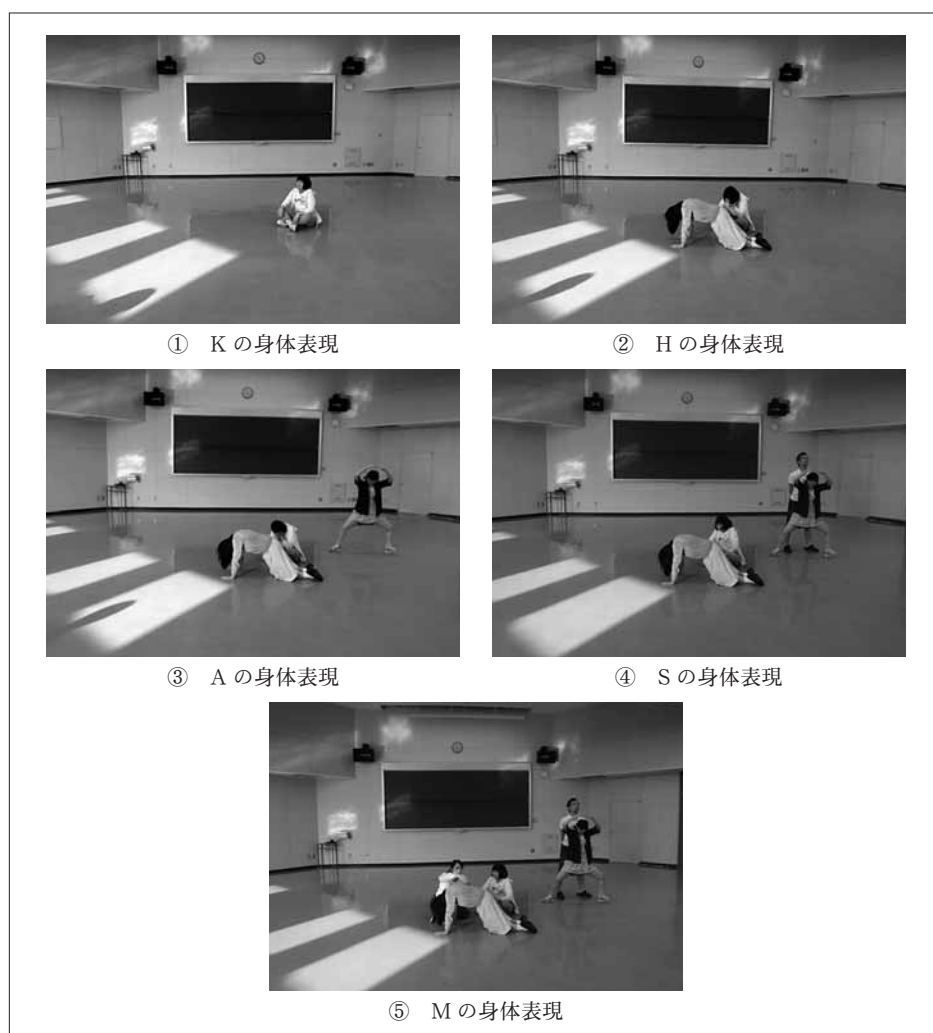


図3 「お正月」のフローゼンショット

ていることを示すものである。完成後の会話にて、①こたつに座っている人、②こたつ、③雪だるま、④鏡餅のだいたい、⑤みかんをとる人を、それぞれ身体で表現したと述べている。ここで注目するのが、③と④である。

③Aと④Sの身体表現から「鏡餅」という意味が生成されているように見える。しかし③は全く異なるものを身体で表現しようとしていた。言語上で、「雪だるま」を「鏡餅」という意味として理解するような発想は簡単には出てこない。しかし、「身体表現」を基盤として理解するからこそ「雪だるま」を「鏡餅」として理解することが容易くなるのである。

このように、身体表現はそれ自体が多義的な意味生成の基盤であり、他者にとっても多義的な解釈に開かれたものでもある。それゆえ、互いの相互理解を可能にもするし、同時にズレを生み出すものである。

③「〈ココロ〉と〈カラダ〉をつなぐワークショップ」の意義と射程：さて、筆者はワークショップを心と身体の関係性の気づきのために実践していると述べた。上述してきたプログラムやエクササイズがそのこととどのようにつながっているのか。第一に、「相互のやりとり」に焦点化する身体表現活動では、日頃意識化することのないコミュニケーションを、その身体面から掘り起こし自覚化させることを意図している。AがBに「おい」と声かけ、それにBが「はい」と受ける。その単純なやりとりが、簡単には成立しない。どのような姿勢で、どのように声を飛ばし、どのような意図をこめて言葉を発し、それを身体のどこをどう使って受け止めるか、それが伝わったときどのような心のありようになるのか、といったことは日頃のコミュニケーションでは意識しない。やりとり、相互行為、コミュニケーションという言葉の内実を身体性の次元から掘り起こすことで、心と身体のあり方に気づきを引き起こすことがワークショップのひとつの目的である。

そして、「協同的につくりあげる身体表現活動」では、意味理解の基盤であり、意味理解のズレの基盤でもあり、また意味生成の基盤でもある相互の身体表現への気づきを促すことを意図している。与えられた課題、例えばフローズンショットにおいて、「お花見」だとわかるように、あるいは「お正月」とわかるように、一人ひとりが課題に基づき思い思いに身体表現をするのであるが、そこでは、自分が思う以上に身体表現が他者に伝わっていること、あるいは自分が思っている以外のこと伝わっていること、さらには自分が思っている以上に伝わらないこと、を経験する。また、自分の身体表現が予想を超えた他者の解釈と身体表現を引き出すことにも気づく。雪だるまのつもりが鏡餅だと思われた、というように。

身体で表現してみることで、「伝わった」あるいは「伝わらなかった」、「別様に伝わっていた」など心のあり方が形作られてくる。意図（心のありよう）を身体に落とし込む

ことの難しさと、それが伝わった時の面白さ、伝わらなかった時の歯痒さ、など身体表現することで同時に生成してくる心のありようを感じられるのが「フローズンショット」をはじめとするエクササイズである。さらには、それぞれの身体表現からひとつの意味が創発することの面白さを実感できるのもこのエクササイズの醍醐味である。

このように、パフォーマンスすること、他者とともに身体表現すること、そのことがある身体表現（結果）とそのための方法（道具）を生み出していく。とりわけ、身体性に根ざしたやりとりは、意味理解、意味の不一致、意味生成といった心のありようをも形作る。また身体に根ざすものであるからこそ、それについて語る場面では情動的な言葉が生起してくるのではないだろうか。ホルツマン（2014）の論考で取り上げられている演劇的な取り組みをしたあとの若者のインタビューで、評価や認知のことばではなく情動の言葉が語られるは、そのパフォーマンスが身体性に根付いたものだからと考えられる。

## 5. まとめと今後の課題：パフォーマンスの心理学に向けて

本論文では、ホルツマンの心理学論における「道具と結果の方法論」、「パフォーマンス」概念によって、筆者が実践している演劇的手法を用いたワークショップの理論的な意味付けを行なった。

パフォーマンスの心理学とは、心の働きを身体から説明するものでもなければ、身体のある様子を心理状態から説明するものでもない。むしろ、それら二元論的な発想とは別のものである。パフォーマンスすること、すなわちできないことをやってみることで、どのような身体表現がどのような環境のなかで立ち上がってくるのか、さらにはその身体表現と身体表現を生み出した方法とが、どのような心理状態を生み出すのか、それがどのように次の身体表現として現れるのか、と絶え間ない運動のプロセスを、記述し、解き明かしていくことが、人間の心理と発達を探究する道なのだと考える。ホルツマンとニューマンがヴィゴツキーの研究から導きだした「道具と結果の方法論」と「パフォーマンス」の概念は、そのことを指し示すものである。実際にやってみること、パフォーマンスすること、それが心の動きを、心理のあり方を、それとともに身体のある方をも動かし、変化を生み出す。その運動に焦点を合わせるのがパフォーマンスの心理学として意図するところである。

また、パフォーマンスにおける「身体性」への着目は、意味理解のあり方や意味生成のあり方に新しい視座をもたらすとともに、コミュニケーション及びその能力の考え方に対する視座の変更をもたらす。身体表現の多義的な意味生成と意味理解、すなわち、自分が思う以上に相手に伝わり、また伝わらないという身体レベルでのありかたが、

「わかる」、「つたわる」といった心理状況と密接に関わっている。そのような「つたわる」「わかる」というのは、単なる認知的なプロセスのみならず情動的な要素も含み込む形で生じているのではないだろうか。「なるほど、わかった」という心理には、理解の側面だけではなく、わかったことの嬉しさや面白さが同時に含まれているのであり、そのプロセスが身体において生じていると考えられるのではないか。

演劇的なワークショップの実践は、意味生成や意味理解に関する身体性のレベルの記述に大きな示唆を与えてくれるものであるが、本論文では、未だ十分に展開できてはいない。身体のある方・表現技法については、演技の世界が豊かな実践的蓄積を持っている。身体で表現することで、観客に役者の心理状態を伝えたり、喚起させたりと、多様な方法を用いて舞台はつくられている。例えば、演技における、動作、表情、声のベクトル（どの方向に向けて声を飛ばし、それがどう他者の身体に届くのか）など、演技は身体性に根ざして展開される。それらは音声波形や映像分析の次元には還元できない質的な含みを持っている。会話の発話プロトコルにはあらわれないような、身体性の次元を掘り起こし理論化していくこと、そして身体性をめぐる理論的基盤を整備することが、今後の課題である。

#### 《注》

- (1) NPO 法人深川市舞台芸術交流協会では、平成 27 年度アウトリーチ（芸術家派遣）事業として、9 組のアーティストが小学校や中学校でのワークショップ実施を計画している。
- (2) 邦訳では「頭の中で自分より年上であるかのようだ（ヴィゴツキー, 1989: p. 30）」と訳出されており、英訳との若干の齟齬がみられるが、ヴィゴツキーの理論の拡張を考えホルツマンの表現の方を採用する。
- (3) 「ダルマさんが転んだ」のエクササイズは、4～5 人でグループを組み、ある題材（例えば、「きりん」）を言って、「だるまさんがころんだ」と発している間に、メンバーが協同してその題材を身体表現する。
- (4) 本プログラムは札幌を中心に活動している演出家弦巻啓太氏が「深川市文化交流ホールみらい」において平成 27 年 3 月に実施した演劇ワークショップに基づいている。
- (5) 本写真の利用においては学生からの了承を書面にて確認のうえ使用している。

#### 参考文献

- 荻宿俊文 (2012a). まなびほぐしの現場としてのワークショップ. (荻宿俊文・佐伯胖・高木光太郎 (編) まなびを学ぶ (ワークショップと学び 1). 東京大学出版会. pp. 69-116)
- 荻宿俊文 (2012b). ワークショップをつくる. (荻宿俊文・佐伯胖・高木光太郎 (編) まなびほぐしのデザイン (ワークショップと学び 3). 東京大学出版会. pp. 31-92)
- 文部科学省 (2011). 「子どもたちのコミュニケーション能力を育むために——「話し合う・作る・表現する」ワークショップへの取組」(平成 23 年 8 月 29 日, コミュニケーション教育推進委員会審議経過報告) ([http://www.mext.go.jp/b\\_menu/houdou/23/08/\\_icsFiles/afieldfile/2011/08/30/1310607\\_2.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/23/08/_icsFiles/afieldfile/2011/08/30/1310607_2.pdf))

- 佐伯胖 (2012). 「まなびほぐし (アンラーン)」のすすめ. (荻宿俊文・佐伯胖・高木光太郎 (編) まなびを学ぶ (ワークショップと学び 1). 東京大学出版会. pp. 27-68)
- Holzman, L. (2009). *Vygotsky at work and play*. Routledge. (茂呂雄二訳 (2014). 遊ぶヴィゴツキー：生成の心理学へ. 新曜社.)
- Newman, F. & Holzman, L. (1993). *Lev Vygotsky: Revolutionary scientist*. Routledge.
- Vygotsky, L. S. (1978). *Mind in Society*. Harvard University Press.
- ヴィゴツキー, L. S. (1933a). 学齢期における教授・学習と知的発達の問題. (土井捷三・神谷栄司訳 (2003) 「発達の最近接領域」の理論：教授・学習過程における子どもの発達・所収. 三学出版)
- ヴィゴツキー, L. S. (1933b). 子どもの心理発達における遊びとその役割. (神谷栄司 (訳) 1989. ごっこ遊びの世界：虚構場面の想像と乳幼児の発達. 所収 法政出版. pp. 2-34)
- 安田雅弘 (2003). ハッピーなからだ：カラダとココロの「こり」をほぐす 64 のレッスン. 洋泉社.
- 山内祐平・森玲奈・安斎勇樹 (2013). ワークショップデザイン論 ― 創ることで学ぶ. 慶應義塾大学出版会.

# キリスト教系中等学校の英語教員に関する研究

— 立教学院の場合 —

保 坂 芳 男

## English Teachers at Christian Middle Schools:

In the case of Rikkyo Gakuin

Yoshio HOSAKA

### Abstract

Generally speaking we have no choice but to pay attention to Christian Middle schools when we look back on the history of English education before WW II. Rikkyo Gakuin is primarily focused on in this study as being representative of such schools. The level of English education there was high and Rikkyo Gakuin has become famous for its quality. Many native speakers of English were hired and the teaching skills of both native speakers of English and Japanese teachers of English were high. Based on its history, Rikkyo Gakuin has become one of the most prestigious Christian schools in terms of English education.

**キーワード：**立教学院，英語教育，日本人英語教員，外国人英語教員

## 1. はじめに

日本の英語教育の歴史を語る時にキリスト教系の学校を抜きにしては語れない。明治期に創立され現代に於いても定評のある英語教育を行っている学校として、立教学院、青山学院、明治学院等を挙げることができる。

それぞれの学校は主に外国人宣教師によって創設され、徐々に質の高い英語教育が評価されるようになった。一方で明治後期からの日本の右傾化に伴い、明治 32 年の文部省訓令第十二号を初めとする圧力に悩まされながら今日の地位を築いてきた。本研究ではその過程を英語教員に焦点を当てて追ってみたい。まず、今回は立教学院を取り上げる。

## 2. 沿 革

立教学院は、アメリカ聖公会派遣の宣教師 Williams Channing Moore (1829-1910)



資料1 立教学院略年表（『立教大学の歴史』より筆者が作成）

|        |                                             |
|--------|---------------------------------------------|
| 1829 年 | ウィリアムズ、ヴァージニア州リッチモンドで出生                     |
| 1859 年 | ウィリアムズ、長崎に來日                                |
| 1866 年 | ウィリアムズ、二代目中国・日本伝道主教に按手                      |
| 1872 年 | ウィリアムズ、大阪の居留地に私塾（後の「大阪英和学舎」）開設              |
| 1874 年 | ウィリアムズ、東京・築地に私塾（後の「立教学校」）開設                 |
| 1879 年 | 「立教学校」として私学開業願を提出                           |
| 1883 年 | 「立教大学校」（6 年）と称す                             |
| 1890 年 | 「立教学校」に戻す                                   |
| 1896 年 | 4 月始業とし、学校を「立教尋常中学校」（5 年）と「立教専修学校」（3 年）に分ける |
| 1898 年 | 「私立立教尋常中学校」が中学校令により正式に認可                    |
| 1907 年 | 専門学校令により「立教大学」が認可                           |
| 1922 年 | 大学令による大学として認可                               |
| 1923 年 | 関東大震災により築地の中学校全壊、中学校は池袋で授業を再開               |
| 1926 年 | 池袋に中学校の新校舎建設                                |
| 1942 年 | 「皇国ノ道ニヨル教育」に変更                              |
| 1945 年 | 「基督教主義ニヨル」に復帰を理事会は可決                        |
| 1948 年 | 高等学校設置認可                                    |
| 1974 年 | 創立 100 周年                                   |

が 1874（明治 7）年に築地に私塾を開いたことに始まる。しかし、立教学院が 125 年史編纂のために再調査した結果、Williams は、それ以前の 1859（安政 6）年に長崎に上陸し、そこでも英語と数学を教えていたらしいことも判明した。

これから立教中学<sup>①</sup>の歴史を英語教育、英語教員に焦点を当てて述べていくわけであるが、1876 年の大火、関東大震災、太平洋戦争の戦火で貴重な資料が焼失したので全貌を明らかにするのは極めて難しい。

立教学院の略史を資料 1 に示しておく。これによると立教中学は、1898（明治 21）年 4 月に正式に認可され、私立立教尋常中学校としてスタートした。その後の変遷は、『立教学院百二十五年史』が詳しい。1899 年 2 月に私立立教中学校、1899 年 11 月に私立立教学院立教中学校、1931 年立教中学校、1948 年立教中学校（新制）と変遷する。

### 3. 英語教育

立教中学設立当時の教育課程（資料 2）、教科書配当表（資料 3）が残されている。

外国人教員が多いのが特徴である。訳読中心に陥らないように、4 技能の総合的な発達を目指したレベルの高い英語教育が行われていたように思われる。当初は 2 クラスで

資料2 立教中学校教育課程（明治30年）（『立教学院百二十五年史』, pp. 786-787）  
（英語の教育課程のみ抜粋）

|     | 一 年                           | 二 年                           | 三 年       | 四 年                        | 五 年      |
|-----|-------------------------------|-------------------------------|-----------|----------------------------|----------|
| 英 語 | 語学（4）（綴字，<br>読方，書取，<br>会話，習字） | 語学（4）（読方，<br>書取，会話，<br>文法，作文） | 語学（4）（同左） | 語学（3）<br>（読方，会話，<br>文法，作文） | 会話・作文（3） |
|     | 訳解（4）                         | 訳解（4）                         | 訳解（5）     | 訳解（6）                      | 訳解・翻訳（6） |
| 計   | 8                             | 8                             | 9         | 9                          | 9        |

資料3 明治32年度各学年教科書配当表（『立教学院百二十五年史』, p. 777）

|                  | 一 年                            | 二 年                         | 三 年                                        | 四 年                                      | 五 年                                              |
|------------------|--------------------------------|-----------------------------|--------------------------------------------|------------------------------------------|--------------------------------------------------|
| 課<br>読           | ナショナル<br>一，二，三<br>ロングマン<br>一，二 | 同左<br>三，四<br>同左<br>二，三      | 同左<br>四，五<br>ユニオン<br>四                     | 同左<br>五<br>同左                            | ベルプスマツ<br>セース<br>セルフ，カル<br>チャー                   |
| 英<br>語<br>語<br>学 | 読方習字                           | パーレー万国史<br><br>読方，書取，<br>会話 | ゴルドン將軍<br><br>ス井ントン万国<br>史<br>読方，書取，<br>会話 | マコーレー 論<br>文<br>オビアムウォアー<br>読方，書取，<br>会話 | ピュームインター<br>コース<br>グレートリーダー<br>ズ<br>読方，書取，<br>会話 |

あったが、外国人数員が2人もいた。この傾向はそれ以後も続くことになる。

教育課程から言えることは、全体的に時間数が多い。明治19年の「尋常中学校ノ学科及其程度」で示されている時間数は各学年、週28時間である。一方、立教中学のそれは、1年から4年までは週30時間、5年は週29時間となっている。なかでも、英語の時間数が多い。明治30年と言えば、中学校令改正（明治32年）以前であり中学校令（明治19年）の適用がなされるはずである。当時は外国語を重視していたとは言え、標準的には1,2年次に週6時間、3年次に7時間、4,5年次に5時間で、合計5年間で29時間である。立教中学では、各学年8時間以上である。5年間で43時間もあるので、かなり英語教育に力を入れていたように思われる。私学の独自性故なのであろうか。

明治期の英語科カリキュラムに関しては松村（1997）が詳しい。高知二中は、立教中学と同じで5年間で43時間の英語の授業となっている。それ以外の公立中学は、1,2時間程度、英語の授業を増やしている学校が若干ある程度である（松村, pp. 52-53）。東京府から認可をもらう必要性から、府へは中学校令の公立中学のそれに即した教育課程（資料4）を提出した。一方で当時の立教中学は良質な生徒確保のために受験校として運営されており、実際の教育課程は資料2,3の通りであったと考える（帆足, p. 87）。

授業内容も特徴的である。低学年では、「語学」という総合的な科目の中で、英語の綴字や読方、会話などを教えている。上級学年になるにつれて、英文法や英作文が加わ

資料4 私立立教尋常中学校学科課程表（『東京の中等教育』，pp.31-32）

| 外国語 | 1 年級                           | 2 年級                                    | 3 年級                            | 4 年級                            | 5 年級                            |
|-----|--------------------------------|-----------------------------------------|---------------------------------|---------------------------------|---------------------------------|
|     | 6                              | 7                                       | 7                               | 7                               | 7                               |
|     | 綴字，読方，<br>訳解，書取<br>聴取，会話<br>習字 | 綴字，読方，<br>訳解，書取<br>聴取，会話<br>習字，文法<br>作文 | 読方，訳解，<br>書取，聴取，<br>会話，文法<br>作文 | 読方，訳解，<br>書取，聴取，<br>会話，文法<br>作文 | 読方，訳解，<br>書取，聴取，<br>会話，文法<br>作文 |

り，5 年次には，会話・作文の授業が行われている。一方で1 年次から訳解の授業は独立して行われており，学年が上がるにつれて時間数が増えている。

教科書配当表を見ても立教中学の英語教育の水準が高いことが窺える。明治期から大正期まで多くの学校で用いられた *National Readers* は，5 年次に第五巻を教えるのが理想であると思われていた（松村，pp.207-208）。しかし，立教中学では，3 年次の後半から第五巻を教え4 年次は終了している。さらに他にも読本の教科書を用いるなど，全体的に講読に力を入れているように思われる。

#### 4. 英語教員

立教中学の英語教員については、『中等教育諸学校職員録』（以下『職員録』）が詳しい。明治 37 年から昭和 14 年までの教員の異動に関してほぼ網羅されている（資料 5）。なかでも特徴的な教員を紹介すると以下ようになる。

資料5 立教中学の英語教員（『職員録』より筆者が作成し，最初の明治 37 年次と昭和 13 年次のものを紹介）

| 明治 37 年当時の立教中学の英語教員 |      |             | 昭和 13 年当時の立教中学の英語教員 |      |                     |
|---------------------|------|-------------|---------------------|------|---------------------|
| 職                   | 担当科目 | 名 前         | 職                   | 担当科目 | 名 前                 |
| 教頭                  | 西史，英 | 久保田寅次郎      |                     | 英，柔  | 衣笠保良                |
| 教員                  | 修，英  | 市川勝太郎       |                     | 英    | 浅井武                 |
|                     | 英    | 小野秀太郎       |                     |      | 中屋忠雄                |
|                     |      | 根岸由太郎       |                     |      | 高橋 <sup>ひろし</sup> 晃 |
| 講師                  |      | 増田藤之助       |                     |      | 垣内武二                |
| 教員                  |      | 不破保         |                     |      | ゴントレット              |
|                     |      | 杉浦貞二郎       |                     |      | シェファー               |
|                     |      | エーチ・エス・タッカー |                     |      |                     |
|                     |      | ミス・マッカダム    |                     |      |                     |

#### 4.1 日本人英語教員

校友会報等で卒業生の回想によく出てくる日本人教員は、元田作之進（1862-1928）、帆足秀三郎（1893-1965）、鈴木一、衣笠保良らである。

元田作之進は、久留米出身で前身の大阪英和学舎に入学。その後、10年間、ペンシルヴァニア大学などで学び日本に帰国、チャプレン<sup>(2)</sup>を務める。明治32年に中学校長になる。その直後には訓令第十二号<sup>(3)</sup>が文部省から発令された。中学校では宗教教育は行わずに、非認可の専修学校や寄宿舎で行うという柔軟な対応で乗り切った。彼は校長として、当初は英語を教えていたが、後に修身に専念した。彼の英語の授業に関しては、回想はないが、修身を習った学生の一人は、「元田先生は温厚玉の如く、キリスト教界の代表的な人物でした」（学友会文芸部、p.36）と書き残している。元田について、「他校を放逐された素行不良の生徒を立教中学に集められた。そのおかげで救われた者がどれほどあったか知れない」（『日本キリスト教教育史』、p.457）と回想している卒業生もいる。彼は、立教学院総理であった Arthur Lloyd（1852-1911）と一緒に中学の英語教科書<sup>(4)</sup>を著した。1907年立教大学校の校長となった。1922年に立教大学の大学昇格に成功した。Arthur Lloyd は、後にハーンの後任として東京帝国大学で英文学や英語学を教えた。日本文学の英訳や日本仏教研究に力を注いだ。

帆足秀三郎は、幕末の剣豪千葉周作の曾孫にあたる。父が立教学校の剣道の教員であった。兄が立教中学で学んだ関係から彼も1909年に立教中学に入学する。1913年に立教大学文科に入学。1919年に立教中学の英語教員になり宗教主事や舎監を勤めた。この時の様子は『立教史メモ・ノート』が詳しい。彼の英語教員としての回想は見当たらない。彼は1936年に立教中学校長となる。「立教を廃校にしてやる」と息巻いた配属将校の派遣など、軍部や日本政府の迫害から立教を護った人物として高く評価されている。

当時の立教中学の教員の実力がすこぶる高かった。帆足秀三郎は二人の恩師を回想している。「久保田寅次郎先生は、英語の難解な文章を読破できた、英学者であられると同時に、経済学の本書をよく読まれて、後に、立教大学の経済学部教授となられた」（『いしずゑ』、p.7）と回想し、鈴木一については以下のような回想を残している（『いしずゑ』、p.8）。

鈴木一先生も舎監。先生はいつも読書。先生の政治、経済、宗教、その他各方面にわたる広い蘊蓄（略）。毎夜毎夜生徒たちは自習時間が終わると、五六名は御高説拝聴に舎監室に出かけた。（略）少年から成年に成長してゆく時代に、こんな先生に接して、学校の教科書以外に視野を拓め、社会的な知識に触れたことは、私たちにとって幸福なことであった。

同様の指摘は、他にも見られる（『改訂版 立教のあゆみ』, p. 36）。明治後半から大正初期の話である。当時の立教中学の英語の教員は英語学力だけでなく、人格的にも素晴らしい教員が多く、生徒の人格形成に多大な影響を与えたことが推察できる。

衣笠保良<sup>きぬがさやすら</sup>は、1934 年の『職員録』では、柔道と英語の教員であった。1939 年の職員録では柔道のみの担当となっている。彼は K 先生として回想録に出てくる（『愛行 — あいぎょう —』, p. 386）。昭和 18 年秋の出来事である。配属将校らの強要により、柔道場に軍神を奉祀することになったが、クリスチャンの衣笠は一切敬礼をしなかった。それを見た配属将校は、衣笠を国賊と罵った。衣笠は 1943 年 3 月に退職、その後木工場の筋肉労働者になったが、栄養失調で死去した。当時の様子は『立教中学校 100 年史』が詳しい。

他にも市川勝太郎も素晴らしい教授陣の例として挙げられている（小木, p. 285）。市川は、福沢諭吉の直弟子で英語、漢文、数学を教えていた。

## 4.2 外国人英語教員

卒業生の回想によく登場する外国人教員は、Henry St. George Tucker (1874-1959), George Edward Luckman Gauntlett (1868-1956), Mabel Ruth Schaeffer (1886-1946) である。

Tucker は、1903 年、29 歳で立教学院の 2 代目総理となる。彼の指導理念は、日本人の本当の意味での独立・自立であり、そのために、中学校長、元田作之進を深く信頼し、多大な権限を与え、自分は補佐役に徹した。彼は、『職員録』によると、1908 年まで中学で英語を教えた。明治 40 年に入学したある生徒は、「血色の良い丈の高い謹厳な方」（『改訂版 立教のあゆみ』, p. 36）と Tucker の印象を述べ、リーディングを習ったと回想している。当時の旧制中学にも外国人講師がいた場合があるが、多くは英会話や英作文の授業を担当している。Tucker は、日本語がかなりできたのでリーディングの担当になったのではないだろうか<sup>(5)</sup>。

Gauntlett は、『職員録』によると、1926 年から 1939 年（以降は不明）に立教中学に勤務している。彼の詳細は、『紫立会会報』（No. 3）と『E. ガントレットの一生』（No. 3 別冊）に詳しい。彼は、1, 2 年生の英会話を担当していたようである（『紫立会会報』, p. 14）。Gauntlett は、「多芸多才の人で、英語の先生であると同時にコレスポンド（通信文）、英習字、簿記、速記はみな、達人であって、それらを教える傍ら教科書まで作られた」（『紫立会会報』, p. 16）とある。穏やかな性格で授業中に怒ることではなく、生徒からガンちゃん<sup>(6)</sup>の愛称で呼ばれていた。

Schaeffer はとにかく英語の発音にうるさかったらしい。1948 年立教学院が小学校を設置した時に主事になったが、病気のため一月でアメリカに帰国した。彼女の教え子た

ちが回想録を作成したらしいが所在が不明である。前出の浅岡は、「英会話を教えて下さった米人の S 先生（お年を召された御婦人でしたが授業はなかなかきびしくシユンとしていました。）から毎火曜日の放課後聖歌を習ってそれが終わると学校のすぐ近くの先生の家に遊びに行き、日本茶におせんべいを頂くのが楽しみ」（『改訂版 立教のあゆみ』, p. 49）だったと回想している。

#### 4.3 吉田先生排斥運動

早稲田の英文科を首席で卒業した吉田甲子太郎は、翻訳等が忙しく授業の準備が不十分であった。それを受験が迫っている 5 年生に追及され退職を選択した。当時の同僚、小木は、「先生も生徒もその行動、態度、進退がいかに立派で流石立教的だったと思う」（小木, p. 290）と回想している。詳細は以下の通りである（小木, pp. 290-291）。

吉田さんは（略）秀才だったが、その頃一方には、《殴られるあいつ》の翻訳や創作に取り組んでいたもので、折々翌日の授業の準備を怠って教室に臨む場合があったらしい。そこで、当然英語の語法的文法的受験の扱いを希望する当時の生徒は、常に不安と欲求不満に置かれる結果となった。その頃、正則英語学校出身で齊藤秀三郎さんの直弟子だった S 先生（引用者注：坂井新五郎か）がいて、独特で、一種魅力ある受験英語の指導をされていたので生徒はその先生との対比からいよいよ不満を感じたらしい。そこで生徒は先生に対して十分な準備の上で、教室に臨まれることを願い出る事となり、今後その願いが容れられない場合は、排斥運動を起こす旨を吉田さんに伝えたのである。その後も吉田さんは文学か教育か悩みながらも、折々不準備なままで教室に臨んだ。生徒は、個人吉田さんに対する感情的な、或いは憎しみではもちろんなかった。彼らにとっては上級入学を控えた切実な問題だったのである。

或る日のこと級長の岡田太郎が五年生を代表して、吉田さんに最終交渉に立って言った。

「（略）われわれの最終的なお願いですが、先生は文学を棄てて下さるか、それとも英語教師となって下さるかについてお答えを願いたいと思います。先生が文学を棄てて下さらない限りはわれわれは先生を排斥せずにはいません。」と言い切ったのである。（略）「私は文学は棄てられません、学校の方を退めさせてもらいます」吉田さんの良心はこう答えたのである。

吉田はその後明治大学の教授となる。この排斥運動の中心的人物の一人に、後の英国大使大野克己がいたという噂があった。当時の生徒の様子がよく分かるエピソードとし



て掲載した。

## 5. ま と め

立教中学の沿革から始まり、特色ある英語教育、元田や帆足などの日本人英語教員、Tucker や Gauntlett などの外国人数員のことを述べた。

当初社会的評価がそれほど高くなかった立教中学が、英語教育に力を入れていった。そして大正の末期には 30% の卒業生が官立の高等学校か有名私大の予科に入学する中で社会的信頼を得るようになった。一方で、キリスト教の学校であるがゆえに、多くの嫌がらせを経験することになった。

最後に採り上げた吉田先生排斥運動からも窺うことができるように、立教中学には優秀な教師陣を求めて徐々に優秀な生徒が集まり、戦後の MARCH の 1 つとして定評のある私学に成長したように思われる。

### 謝 辞

本研究は、主に立教学院史資料センターの田中智子氏の協力で完成することができた。センターの業務で多忙の中、適切な資料を揃えて頂き研究が格段に進んだことに感謝したい。誠にありがとうございました。

なお、本研究は、拓殖大学人文科学研究所の助成を受けたことも記しておかねばならない。誠にありがとうございました。

### 《注》

- (1) 本稿では、原則的に明治 32 年の私立学校令当時の名称を題名には使用する。その後、いろいろ名称の変遷が行われるが、本文中では、一般的な名称として「立教中学」を使用する。
- (2) チャプレン (chaplain) とは、「学校、病院、修道院、外国公館などの機構で聖務に従う牧師 (司祭)」(『日本キリスト教歴史大事典』, p. 868) である。
- (3) 訓令第十二号というのは、「私立学校でも学科課程が法律で規定されている学校、すなわち小学校・中学校・高等女学校では課外においても宗教教育、および宗教的儀式を行うことを禁止するというものである。(中略) キリスト教教育弾圧を目的としたものと解されやすい」(『日本近代教育史事典』, p. 435) とある。
- (4) 明治 35 年に *English Readers* (全 4 巻) と、*The New English Readers* (全 5 巻) を共著で普及会より出版した。Lloyd に関しては手塚 (1968) が詳しい。
- (5) 筆者は旧制中学の外国人数員の研究を行っているが、山口の中学で勤務した外国人講師は管見の限り英会話や英作文の担当である。一方、京都中学で大正末期から昭和の初期に勤務した Ponsonby は、神道研究を主としており、かなり日本語ができたので、講読も担当していた。Tucker の日本語力については、「とにかく頭のいい人で、日本に来てから日本語の勉強をしては日本語で説教されたが、実に文法的に精緻な日本語を話された」(村田, p. 4) とある。

### 主要参考文献

- 伊藤俊太郎 (1996). 『立教史メモ・ノート』 非売品.
- 海老沢有道 (編) (1974). 『立教学院百年史』 立教学院.
- 学友会文芸部 (1971). 『改訂版 立教のあゆみ』 立教中学校.
- キリスト教学校教育同盟 (編) (1977). 『日本キリスト教教育史』 創文社.
- 小木鐵彦 (1969). 『愛行 — あいぎょう —』 日本聖公会出版事業部.
- 紫立会 (編) (1996). 『紫立会会報』 No. 3, 非売品.
- 紫立会 (編) (1996). 『E. ガントレットの一生』 (『紫立会会報』 No. 3 別冊), 非売品.
- 中等教科書協会 (編) (1904). 『中等教育諸学校職員録』 秀英舎.
- 手塚竜磨 (1968). 『英学史の周辺』 吾妻書房.
- 東京都 (編) (1974). 『東京の中等教育』 二, 研文社.
- 日本キリスト教歴史大事典編集委員会 (編) (1988). 『日本キリスト教歴史大事典』 教文館.
- 日本近代教育史事典編集委員会 (編) (1971). 『日本近代教育史事典』 平凡社.
- 帆足秀三郎 (1954). 「思い出」『いしずゑ』 第 3 号, 立教中学校校友会.
- 帆足秀三郎 (1957). 「修史余談 (八)」『PTA 会報』 第 16 号, 立教中学校 PTA 発行.
- 松村幹男 (1997). 『明治期英語教育研究』 辞游社.
- 村田恵次郎 (編) (1971). 『チャペルニュース』 第 200 号, 立教学院諸聖徒礼拝堂発行.
- 立教学院百二十五史編纂委員会 (編) (1996). 『立教学院百二十五年史』 非売品.
- 立教大学立教学院史資料センター (編) (2007). 『立教大学の歴史』 立教大学.
- 立教中学校 100 年史編纂委員会 (編) (1998). 『立教中学校 100 年史』 非売品.



## ○拓殖大学 研究所紀要投稿規則

### （目的）

第1条 拓殖大学（以下、「本学」という。）に附置する，経営経理研究所，政治経済研究所，言語文化研究所，理工学総合研究所及び人文科学研究所（以下，「研究所」という。）が発行する紀要は，研究成果の多様な学術情報の発表の場を提供し，研究活動の促進に供することを目的とする。

### （種類）

第2条 研究所は，次の紀要を発行する。

- (1) 経営経理研究所 紀要『拓殖大学 経営経理研究』
- (2) 政治経済研究所 紀要『拓殖大学論集 政治・経済・法律研究』
- (3) 言語文化研究所 紀要『拓殖大学 語学研究』
- (4) 理工学総合研究所 紀要『拓殖大学理工学研究報告』
- (5) 人文科学研究所 紀要『拓殖大学論集 人文・自然・人間科学研究』

### （投稿資格）

第3条 研究所が発行する紀要の投稿者（共著の場合，投稿者のうち少なくとも1名）は，原則として研究所の研究員でなければならない。

- 2 研究所の編集委員会（以下「編集委員会」という）が認める場合には，研究員以外も，投稿することができる。

### （著作権）

第4条 研究所が発行する紀要に掲載された著作物の著作権は，研究所に帰属する。

- 2 研究所が必要と認める場合には，投稿者の許可なく，著作物の転載や引用を許可する。ただし，事後に投稿者に報告するものとする。
- 3 研究所の紀要に掲載した著作物は，電子化しコンピュータネットワークを通じて，本学のホームページ等に公開するものとし，投稿者はこれを許諾しなければならない。

### （執筆要領および投稿原稿）

第5条 投稿する原稿は，研究所の執筆要領に指示に従って作成する。

- 2 投稿する原稿は，図・表を含め，原則として返却しない。
- 3 学会等の発行物に公表した原稿あるいは他の学会誌等に投稿中の原稿は，研究所の紀要に投稿することはできない（二重投稿の禁止）。

### （原稿区分他）

第6条 投稿区分は，別表1，2のとおり，定める。

- 2 投稿する原稿の区分は，投稿者が選定する。ただし，研究所の紀要への掲載にあたっては，査読結果に基づいて，研究所の編集委員会の議を以て，投稿者に掲載の可否等を通知する。
- 3 研究所の紀要への投稿が決定した場合には，投稿者は600字以内で要旨を作成し，投稿した原稿のキーワードを3～5個選定する。ただし，要旨には，図・表や文献の使用あるいは引用は，

認めない。

- 4 研究所研究助成を受けた研究成果発表（原稿）の投稿区分は，原則として論文とする。
- 5 研究所研究助成を受けて，既に学会等で発表した研究成果（原稿）は，抄録として掲載することができる。

（投稿料他）

第7条 投稿者には，一切の原稿料を支払わない。

- 2 投稿者には，掲載の抜き刷りを50部まで無料で贈呈する。50部を超えて希望する場合は，超過分について有料とする。

（正誤の訂正）

第8条 印刷上の誤りについては，投稿者の申し出があった場合，これを掲載する。ただし，印刷の誤り以外の訂正や追加は，原則として取り扱わない。

- 2 投稿者の申し出があり，研究所の編集委員会がそれを適当と認めた場合には，この限りでない。

（その他）

第9条 本投稿規則に規定されていない事柄については，研究所の編集委員会の議を以て決定する。

（改廃）

第10条 この規則の改廃は，研究所運営委員会の議を経て研究所運営委員会委員長が決定する。

附 則

この規則は，平成26年4月1日から施行する。

別表1 原稿区分（理工学総合研究所以外）

|           |                                                                             |
|-----------|-----------------------------------------------------------------------------|
| (1) 論文    | 研究の課題，方法，結果，含意（考察），技術，表現について明確であり，独創性および学術的価値のある研究成果をまとめたもの。                |
| (2) 研究ノート | 研究の中間報告で，将来，論文になりうるもの（論文の形式に準じる）。新しい方法の提示，新しい知見の速報などを含む                     |
| (3) 抄録    | 研究所研究助成要領第10項(2)に該当するもの。                                                    |
| (4) その他   | 上記区分のいずれにも当てはまらない原稿（判例研究，解説論文，調査報告，資料，記録，研究動向，書評等）については，編集委員会において取り扱いを判断する。 |
|           | また，編集委員会が必要と認めた場合には，新たな種類の原稿を掲載することができる。                                    |

別表2 原稿区別（理工学総合研究所）

- (1) 展望・解説，(2) 設計・製図，(3) 論文，(4) 研究速報，(5) 抄録（発表作品の概要を含む），(6) 留学報告，(7) 公開講座，(8) 学位論文

## 『拓殖大学論集 人文・自然・人間科学研究』執筆要領

### 1. 発行回数

『拓殖大学論集 人文・自然・人間科学研究』（以下、「紀要」という）は、原則として年2回発行する。

原稿提出期日および発行は、次のとおりとする（厳守）。

- (1). 原稿の提出締切 6月－10月発行
- (2). 原稿の提出締切 10月末日－3月発行

上記の発行に伴い、電子化し、コンピュータネットワークを通じて、本学の人文科学研究所（以下、「研究所」という）のホームページ等に公開するため、投稿者は、その旨を許諾する。

### 2. 執筆予定表

投稿希望者は、研究所が定めた日までに、紀要の執筆予定表に必要事項を記入・捺印し、学務部研究支援課（以下、「研究支援課」という。）に提出する。

### 3. 使用言語

使用言語は、日本語又は英語とする。ただし、これら以外の言語での執筆を希望する場合は、事前に人文科学研究所編集委員会（以下、「編集委員会」という）に書面にて申し出て、許可を受ける。

許可を受けた投稿者は、必ず外国語に通じた人の入念な校閲を受けたものに限る。

### 4. 様式

投稿する原稿は、完成原稿とし、原則としてワープロ原稿2部を、編集委員会に提出する。

- (1). ワープロを使用する際は、A4判の白紙片面を縦長に用い、横書きで、1行39文字、1ページ34行で印字する。その際、天地、左右各30mm程度の余白をとっておく。縦書きの場合もこれに準ずる。
- (2). 欧文による原稿の場合は、A4判の白紙片面を縦長に用い、天地左右の余白を30mm程度とり、1行78文字、1ページ34行で印字する。外国語の要約の原稿もこれに倣う。
- (3). 原稿の分量は、本文と注及び図・表を含め、原則として、A4縦版・横書で次のとおりとする。

なお、日本語以外の言語による原稿の場合もこれに準ずる。

- ① 日本語および全角文字で記す場合、原則として24,000字以内。
  - ② 欧文の場合、原則として48,000字以内
- (4). 投稿者は、紀要の複数の号にわたり、同一タイトルで投稿を希望することはできない。  
ただし、「資料」の場合は、同一タイトルの原稿を何回かに分けて投稿することができる。  
その場合は、最初の稿で、記載原稿の全体像と回数を明示しなければならない。

### 5. 原稿

- (1). 原稿区分は、「拓殖大学 研究所紀要投稿規則」に記載されているとおりとするが、研究所において「その他」には、以下の区分が含まれる。

研究動向・調査報告・資料・討論・研究会記録・公開講座記録



- (2). 原稿の受理日は、研究支援課に到着した日とする。
- (3). 投稿は、完成原稿の写しを投稿者が保有し、原本を編集委員会宛とする。
- (4). 投稿する原稿とあわせて、紀要の投稿原稿表紙に必要事項を記入・捺印して研究支援課に提出する。

## 6. 本文表記

- (1). 本文の構成を章・節・項のように分ける場合、それぞれの表記の仕方は、例えば、章はⅠ・Ⅱ……、節は1・2……、項は1)・2)……などの表記方法があるが、本紀要の場合、執筆者の研究分野が多岐にわたることを考慮し、とくに定めない。各執筆者が所属する学会の学会誌などの表記方法に準ずること。
- (2). 数字は算用数字を用いる。数字や欧字は、1字のみの場合を除き、半角とする。ただし、縦書きの場合に限り、数字は原則として漢数字を用いる。
- (3). 特殊な字体（イタリック・ボールド・ギリシャ文字など）・紛らわしい文字（l〈エル〉・1〈イチ〉・i〈アイ〉・0〈ゼロ〉・O〈オウ〉など）や大文字・小文字（W と w など）は、明瞭に区別できるよう指定する。また、添え字も、上付き・下付きを明瞭に指定する。
- (4). 本文中に文献・資料を引用・参照する場合は、下記の例のように、文献・資料の著者名（姓のみ）と発表年を示し、必要に応じて関連ページも示す。

青木（2001）は……、 上村（2002：50-61）は……、 青木・上村（2003）によれば……、 ……という説がある（大山 1998：43-52）。……という見解もある（飯田 2003；太田 1999）。青木ほか（2004）は……、 など。
- (5). 本文中に文献・資料の一部を引用する場合は、引用部分を、「」でくくる、字下げする、活字ポイントを小さくする、などの方法で表す。

## 7. 図・表・数式の表記および作成

- (1). 図（図には写真も含む）および表は必要最小限にとどめる。とくに、同じデータに関する図と表の重複は避ける。
- (2). 図および表は、各図・各表ごとに別紙とし、それぞれ、図1・図2… 表1・表2…のように通し番号を明示し、執筆者名を記入する。
- (3). 図および表のタイトル・説明文・出典などの原稿は、別紙にまとめる。外国語の要約をつけた場合は、図・表のタイトルと説明文は、外国語を併記することができる。
- (4). 本文中の図および表の挿入希望位置は、本文原稿の右側余白に記入する。また、図・表の大きさや体裁について希望がある場合は、本文原稿上に枠で指定するか、おおよその大きさなどを右側余白に記入しておく。なお、図・表の大きさや体裁は、編集委員会で決める。したがって執筆者の希望に添えない場合もある。
- (5). 図および表を本文中に引用する際は、「図1によれば……」「……は表3に示される」などのように示す。
- (6). 図は、黒インクで明瞭に描いたものか、ワープロあるいはコンピューターソフトを使用して描いたもので、そのまま写真製版が可能なもの（版下原稿）に限る。
- (7). 表は、ワープロあるいはコンピューターソフトを使用して作成する。
- (8). 図中や表中の文字や数字の大きさ、図の表現の細かさについては、刷り上がりの大きさと明瞭に読みとれるよう、縮小率を十分考慮して決める。
- (9). 数式は専用ソフトなどを使用して正確に表現する。数式の上下は1行ずつあける。

## 8. 注とその記載方法

- (1). 注は、本文内容の補足説明を行う場合と、引用・参照した文献・資料の出所を明示する場合に用いる。
- (2). 本文中の当該箇所右肩に（ ）でくくった通し番号をつけ、注の内容は、本文のあとに、通し番号順にまとめて記す。

## 9. 文献・資料の表示方法

本文で引用・参照した文献・資料を表示する方法としては、本文中には著者の姓と発表年のみを記し〈これについては、前ページの本文表記4を参照のこと〉、原稿末尾の文献・資料表に詳しく表示する方法と、本文中には記さず、本文のあとの注に詳しく表示する方法の二つが一般的である。

### (1). 文献・資料表に表示する場合

- ①. 文献・資料表に、下記の要領で記載する。なお、文献・資料表は、原稿の末尾（注の後ろ）に掲載する。
  - a. 学術雑誌など定期刊行物の場合は、著者名・発表年・文献名・定期刊行物名・巻または号番号・文献の最初と最後のページを明記する。単行本の場合は、著者名・発表年・書名・出版社（出版所）名を明記する。
  - b. 著者が複数の場合も、全著者名（姓名）を列記する。
  - c. 定期刊行物の巻・号番号およびページについては、巻ごとの通しページがある場合は、巻番号（ゴシック）と通しページを記す。巻ごとに通しページがない場合は、巻番号（ゴシック）のあとに号番号を（ ）でくくって示し、号ごとのページを記す。号番号のみの場合は、（ ）でくくった号番号とページを記す。
- ②. その他の書式（記載順序や方法）については、本紀要の場合、執筆者の研究分野が多岐にわたることを考慮し、とくに定めない。各執筆者が所属する学会の学会誌などの要領に則って、統一した形式で記すこと。
- ③. 文献・資料の並べ方は、下記の要領による。
  - a. 日本語文献・資料、アジア地域言語文献・資料、欧語文献・資料の順に並べる。
  - b. 日本語文献・資料は、著者名の五十音順に並べる。アジア地域言語文献・資料はそれぞれの著者名の当該言語の固有の配列順（あるいはカタカナ表記の五十音順）に並べる。欧語文献・資料は著者名（姓が先）のアルファベット順に並べる。
  - c. 同じ著者の文献・資料は発表年の順に並べる。同じ発表年のものが複数ある場合は、本文の引用順に、a・b……を発表年のあとにつけて並べる。

### (2). 注に表示する場合

- ①. 注の該当箇所に著者名・文献・資料名などを詳しく表示する方式で、この場合は、文献・資料表を省くことができる。
- ②. 表示例は、以下の通り。

#### 【日本語文献・資料】

小林政吉 『宗教改革の教育史的意義』（創文社 1960）p. 12. 《単行本の場合》

林 泰成 「ピーターズのコールバーグ批判」（佐野安仁、吉田謙二編『コールバーグ理論の基底』世界思想社 1993）p. 34. 《単行本所収の論文の場合》

石井雅史 「コミュニケーションと規則」（日本哲学会編『哲学』第51号 2000）pp. 270-272. 《学術雑誌等の掲載論文の場合》

G. ドゥルーズ 『ベルクソンの哲学』宇波彰訳（法政大学出版局 1974）p. 25.

《和訳書の場合》

【英文文献・資料】

Alexander C. Judson, *The Life of Edmund Spencer* (Baltimore: The Johns Hopkins Press, 1945), p. 145.

《単行本の場合》

A. H. Bullen (ed.), *The Works of Francis Beaumont and John Fletcher* (Variorum ed.; London London: George Bell and Sons, 1908), pp. 49–53.

《論文集の編者表記の場合》

G. M. Dutcher et al., *Guide to Historical Literature* (New York: The Macmillan Co., 1931), p. 50.

《著者が3名以上の場合》

F. A. Moe, “School Retrenchment,” *School Review*, XLII (May 1934), p. 40.

《学術雑誌等の掲載論文の場合》

John Calvin, *The Institutes of the Christian Religion*, trans. Henry Beveridge (2nd ed.; Edinburgh: T. & T. Clark, 1895), I, pp. 40–45.

《英訳書の場合》

【欧文文献・資料の略語の用法】

欧文文献・資料の引用・参照の際によく使われる略語（loc.cit., ibid., op.cit.）の用法を、以下に記す。

loc. cit.  同じ文献・資料の同じ箇所を連続して引用する場合に用いる。

ibid.  同じ文献・資料から連続して引用する場合に用いる。その際、前と引用ページが異なる場合には、当該ページを表示する。

op. cit.  前に挙げた文献・資料に、いくつかの注を隔てた後に、再び言及する場合に用いる。したがって、この場合は、著者名（姓のみ）とページ数とを必ず表示する。

上記の略語は、単行本と学術雑誌の場合はイタリック体で、論文の場合はローマン体で表記する。

[使用例]

(1) T. M. Parrot and R. H. Ball, *A Short View of Elizabethan Drama* (New York: Charles Scribner's Sons, 1943), p. 190.

(2) *loc. cit.*

(3) *ibid.*, p. 325.

(4) E. H. C. Oliphant, *The Plays of Beaumont and Fletcher* (New Haven: Yale University Press, 1927), p. 67.

(5) Parrot and Ball, *op. cit.*, p. 198.

(6) Oliphant, *op. cit.*, pp. 89–91.

⋮

その他のよく用いられるページ表記略号（ただし、英文文献・資料の場合）

p. 5.=page 5 の意味

pp. 17f.=pp. 17 *et seq.* と表す。これは page 17 and the following page の意味

pp. 20ff=pp. 20 *et seq.* と表す。これは page 20 and the following pages の意味

\* 欧文文献・資料では、注に示す場合と、文献・資料表に示す場合とでは、著者名などの表記の仕方が異なる。これについては、以下の例を参照のこと。

〈注に示す場合〉

Alexander C. Judson, *The Life of Edmund Spencer* (Baltimore: The Johns Hopkins Press, 1945), p. 145.

〈文献・資料表に示す場合〉

Judson, Alexander C., *The Life of Edmund Spencer*. Baltimore: The Johns Hopkins Press, 1945.

\*なお、インターネット上の文献・資料を引用・参照する場合は、文献・資料表あるいは注に、原則として下記の事項を記載する。

執筆者・タイトル・年月日（掲載年月日あるいは更新年月日あるいは取得年月日）・URL

## 10. 原稿の審査

編集委員会が審査し決定する。その手続きは次の通り。

- (1). 原稿の内容に応じて編集委員以外の査読者を選び、査読を依頼する。それとともに編集委員の中から担当委員を選ぶ。査読者および担当委員は、原則として各1名とするが、場合により複数名とすることもある。
- (2). 査読者および担当委員は、論文・研究ノート・抄録・その他については、以下の11項目について原稿を検討し、査読結果（掲載の可否・原稿種類の妥当性についての意見や原稿に対するコメントなど）をまとめ、それを編集委員会に報告する。
  - ①. タイトルは内容を的確に示しているか
  - ②. 目的・主題は明確か
  - ③. 方法・手法は適切か
  - ④. データは十分か
  - ⑤. 考察は正確かつ十分か
  - ⑥. 先行研究を踏まえているか
  - ⑦. 独創性あるいは学術的価値（資料的価値）が認められるか
  - ⑧. 構成は適切か
  - ⑨. 文章・語句の表現は適切か
  - ⑩. 注や参考文献の表記は、執筆要領に添ったものになっているか
  - ⑪. 図・表の表現は適切か
- (3). 編集委員会は、これらの報告に基づいて、委員の合議により、掲載の可否、原稿種類の妥当性および次項の「審査結果のお知らせ」に添える文書の内容などを決定する。

なお、掲載の可否については、①このままで掲載、②多少の修正の上で掲載、③大幅な修正が必要、④掲載見送りの4段階で判定する。③については、執筆者の修正原稿を査読者と担当委員が再査読し、その結果に基づいて、編集委員会が掲載の可否等を決定する。
- (4). 研究会記録および公開講座記録の原稿については、原則として掲載する。ただし、この場合も編集委員の中から担当委員を選び、担当委員は上記項目の9)等を検討する。その結果、執筆者に加筆修正を求めることがある。

## 11. 原稿の審査結果・変更・再提出

- (1). 投稿の採否は、編集委員会の指名した査読者の査読結果に基づいて、編集委員会が紀要への掲載を決定する。その際に編集委員会は、原稿区分の変更を投稿者に求める場合もある。
- (2). 編集委員会は、査読に基づき、若干の訂正、あるいは書き直しを要請することができる。

また、上記判定を受けた投稿者は、その趣旨に基づいて、原稿を速やかに修正し、再度、編集委員会に提出する。ただし、査読結果の内容に疑問・異論等がある投稿者は、編集委員会にその旨を申し出ることができる。

- (3). 投稿者は、投稿を許可された原稿（査読済）を、編集委員会の許可なしに変更してはならない。
- (4). 査読の結果、大幅な修正がある場合には、投稿者の修正原稿を編集委員会が再査読し、その結果に基づいて、編集委員会が紀要への掲載の可否等を決定する。
- (5). 編集委員会が、紀要に掲載しない事を決定した場合は、政治経済研究所長（以下「所長」という）より、その旨を投稿者に通達する。

## 12. 投稿原稿の電子媒体の提出

投稿者は、編集委員会の査読を経て、修正・加筆などが済み次第、A4 版用紙（縦版、横書き）にプリントした完成原稿 1 部と電子媒体を提出する。電子媒体の提出時には、使用 OS とソフトウェア名を明記する。

なお、手元には、必ずオリジナルの投稿原稿（データ）を保管しておく。

## 13. 校 正

投稿した原稿の校正については、投稿者が初校および再校を行い、所長、編集委員長が三校を行う。この際、投稿者がおこなう校正は、最小限の字句に限り、版組後の書き換え、追補は認めない。また、投稿者は、編集委員会の指示に従い、迅速に校正を行う。

投稿者が、期日までに校正が行われない場合には、紀要への掲載はできない。

## 14. その他

本執筆要領に定められていない事項については、投稿者（執筆者）と協議の上、編集委員会が判断する。

## 15. 改 廃

本執筆要領の改正は、編集委員会が原案を作成し、本研究所会議に報告して承認を求める。

### 附 則

この要領は、平成 18 年 4 月以降に投稿される原稿から適用する。

### 附 則

この要領は、平成 26 年 4 月以降に投稿される原稿から適用する。

静養していた。早川喜代次『徳富蘇峰』徳富蘇峰伝記編集会、昭和五十四年第二版、六〇六―六〇八頁。

(43) 同右、六〇八―六一二頁。

(44) 『昭和十七年病中記 六月―十二月』、昭和十七年十二月三十日。蘇峰が秘書に口述筆記させた原稿である。もともと『昭和戦中・戦後日記』に挿入されていたもので、徳富敬太郎氏はこれも清書原稿の中に付録の形で筆写している。原本、浄書ともに追遠文庫所蔵。

(45) 拙著『徳富蘇峰とアメリカ』、拓殖大学発行、慶應義塾大学出版会発売、二〇一一年を参照のこと。

(46) 前掲、『昭和十七年病中記 六月―十二月』。

(47) なおその後の蘇峰は、それまでほどではないにせよ、依然として三叉神経痛に苦しめられた。以下のような記述がある。

昭和十八年

九月十日 ……眼病再発ノ気味アリ。注意ヲ要ス。

昭和十九年

二月二十九日 イタム。小沢先生来ル、直ニ施術。相当ノ疼痛アリ。

三月三日 ……本日、眼通ニ付、読書ヲ止ム。

三月四日 眼病ヲ医スベク読書ヲ廃シ、函張細工ヲナス。

三月十四日 ……本日眼通ム。読書ヲ止ム。

十二月九日 ……風邪且眼窩上疼三叉神経〔痛〕再発ノ徴アルガ如シ。

昭和二十年

六月二十日 ……眼少シク痛ム。ヤ、持病再発ノ気味アリ、油断無用。

(48) 『昭和戦中日記』昭和十八年五月二十九日、追遠文庫所蔵。正確にいうと、蘇峰は十八年五月二十九日に日記を再スタートした。ただしその際、この直前の五月二十一日から二十八日までの八日間の出来事も合わせて記している。五月二十五日の個所に次のように記されている。「昭和十八年五月二十五日 ……訪東条首相。談話数刻。予ノ国勢ニ関スル意見及首相

其人ニ関シテ二三ノ忠告ヲ試ム」。

(49) 『昭和戦中日記』昭和十八年六月二十九日、追遠文庫所蔵。次のように記されている。「過日予、東條首相ニ言論界優遇奨励ニ付テ意見ヲ併進セリ。是レ予ガ予メ鹿子木博士ニ語リシトコロナリ。果然首相ヨリ良好ノ返事アリ。依リテ博士ヲ招キ、之ヲ報ズ。博士、六月念六日来ル。予懇々博士ニ向テ今后吾人ノ趨向スル方針及方法ニ就テ語焉。六月念九誌」。

(50) 『昭和戦中日記』昭和十八年九月九日、追遠文庫所蔵。

(51) 『昭和戦中日記』昭和十八年九月十二日、追遠文庫所蔵。

(52) 『昭和戦中日記』昭和十九年七月二日、追遠文庫所蔵。それ以前にも蘇峰は明治天皇に拝謁する夢を見ている。日本風の茶室において「明治天皇ノ御膳ニ陪スルノ光栄ヲ荷フ」、天皇から「あなた」と呼び掛けられた、というものである。『昭和戦中日記』昭和十二年十一月二十四日、追遠文庫所蔵。

(53) 『昭和戦中日記』昭和十九年十一月十九日、追遠文庫所蔵。「……国土館ニ赴ク。頭山祭。……ソレヨリ用賀東条前首相ヲ訪、午餐ヲ共ニシ談話一時余、新橋発二時十四分ニテ帰豆。本日ハ昨日ニ比シ快晴、小春日和ニテ良ニ愉快ナリキ」とある。

(54) 『昭和戦中日記』昭和二十年三月二日、追遠文庫所蔵。

(55) 阿南陸相からはその後、七月五日に真尾大佐が蘇峰の下に派遣され、意見を聴取した。『昭和戦中日記』昭和二十年七月五日、追遠文庫所蔵。蘇峰は約二時間にわたって真尾大佐に持論を伝え、前夜にしたためた文書を手渡し、逐一説明を行った。

(56) 『昭和戦中日記』によると、昭和二十年七月十六日、蘇峰は鈴木首相への文書を記し、翌十七日、塩崎秘書にそれを託して上京させている。

(57) 『昭和戦中日記』昭和二十年六月二十七日、追遠文庫所蔵。

伏ノ報。憐ム可シ」『昭和戦中日記』昭和十五年六月十八日、追遠文庫所蔵。

- (23) 例えば以下のような記述がある。「独乙人シユルツエ、ドナツト姜氏ト共ニ来ル。更ニ独乙婦人記者来ル。望ニ応ジ写真ヲ与フ」(昭和十四年十一月三十日)、「丸ノ内会館、大島大使懇話。零時ヨリ三時半、望月、安達、其他」(同年十二月二十五日)、「独逸伯爵来ル、種々談話ス」(昭和十五年四月四日)、「姜氏来訪、独逸大使ヨリノ伝語、姜氏ニ托シテ返事スル」(同年六月二十八日)、『昭和戦中日記』、追遠文庫所蔵。

- (24) 『昭和戦中日記』昭和十五年九月十三日、追遠文庫所蔵。  
(25) 例えば以下のような記述がある。「中央亭、末次、安達、大嶋、中野、橋本諸氏ト会谈久之」(昭和十五年九月十四日)、「東京駅発前、午前六時、中野正剛氏来訪。種々談話。近衛声明云々」(同年九月十六日)、『昭和戦中日記』、追遠文庫所蔵。

- (26) 「夜ハ日比谷ニテ松岡外相ト共ニ講演、大盛会ナリ」とある。『昭和戦中日記』昭和十五年九月十五日、追遠文庫所蔵。

- (27) 『昭和戦中日記』昭和十五年九月二十八日、追遠文庫所蔵。

- (28) 『昭和戦中日記』昭和十五年十月四日、追遠文庫所蔵。「星丘(茶寮)、建川大使送別会。不可侵条約云々。且又、三国軍事同盟推進ニ付キ大運動ノ必要ヲ論ズ。何レモ署名ス。末次、大嶋、久原、望月、安達、中野、橋本、大竹等々ナリ」とある。

- (29) 『昭和戦中日記』昭和十五年十月十二日、追遠文庫所蔵。

- (30) 『昭和戦中日記』昭和十五年十一月七日、十一月十九日、追遠文庫所蔵。

- (31) 『昭和戦中日記』昭和十五年十一月二十六日、追遠文庫所蔵。大島は十二月に正式にドイツ大使となり、翌十六年二月、ベルリンに着任した。

- (32) 『昭和戦中日記』昭和十六年一月五日、追遠文庫所蔵。同日、「紀元二千六百一年の展望」と題し、東京中央放送局から放送された。

- (33) 『昭和戦中日記』昭和十六年一月六日、追遠文庫所蔵。

- (34) 『昭和戦中日記』昭和十六年三月十一日、追遠文庫所蔵。

- (35) 日記には次のように記されている。「独乙大使ト電話、明日ヲ約ス。覚

書ヲ認メ姜氏ニ独訳セシム」(昭和十六年三月六日)、「姜氏同伴、独乙大使館ニ赴キ談話、一時間余、……」(同年三月七日)。加えて左記のようにある(同年三月八日)。いずれも追遠文庫所蔵。

昭和十六年三月初七 午後二時前、約ニヨリ独乙大使二面晤。大使数次面晤ヲ求ム。予不応焉。但夕渠婦人ノ事アリ、仍リテ倉皇(慌てて)渠ト相約シ往訪、叙別情也(叙別の情けである)。

予懷中ヨリ覚書一通十条ヲ出シ、逐一之ヲ説ク。感激の情面ニ溢レ背ニ洩シ。渠逐一首肯、之ヲ自国外相ニ示シ、且ツ之ヲ举行セシメンコトヲ告グ。且ツ曰ク明夕発、四月下旬環京、重相見也ト其覚書ハ別ニ蔵シテ箇中ニ存ス。

昭和十六 三月初八朝

於楽閑荘記之

老蘇七十九

- (36) 『昭和戦中日記』昭和十二年十月十七日、追遠文庫所蔵。

- (37) 『昭和戦中日記』昭和十二年十一月四日、追遠文庫所蔵。

- (38) 十二月、南京陥落時に講演した際、蘇峰は「排英親米ノ説」を主張したと自ら記している。昭和十二年十二月十四日。もっともまだこの時期はイギリスに完全に背を向けていたわけではなく、深井英五郎での茶会でイギリス大使館付武官のF・S・G・ヒグット(Francis Stewart Gidderoy Pigott)少将に一時間余りにわたって自説を述べている。『昭和戦中日記』昭和十二年十一月十七日、追遠文庫所蔵。

- (39) 『昭和戦中日記』昭和十四年十二月三日、追遠文庫所蔵。「丸ノ内会館ニテ、高嶋、桜井尙大佐、横山、伊藤、山野等の諸武官ト会食。予ノ馳走ナリ。大ニ談話ス。排英論ナリ」とある。

- (40) 『昭和戦中日記』昭和十四年七月二十七日、追遠文庫所蔵。

- (41) 『昭和戦中日記』昭和十八年八月五日、追遠文庫所蔵。

- (42) 早川喜代次『徳富蘇峰』によれば、昭和十六年三月二十一日夜、蘇峰は築地の南胃腸病院に入院し、そのときは痛みで眠れない状態であった。しかし五月二十六日には退院し、以後、大森・山王草堂のベッドに横臥して



篇——『講談社二〇〇七年四月、『徳富蘇峰 終戦後日記Ⅳ——『頑蘇夢物語』——完結篇——』講談社、二〇〇七年八月。

(3) もともと口述原稿は「頑蘇夢物語」と題して保存されていたが、原稿所有者である蘇峰令孫の徳富敬太郎氏が出版社の意見もあって「徳富蘇峰 終戦後日記——頑蘇夢物語——」とタイトルを改めて出版した。徳富氏自身も次のように記している。「日記と申しても本書は世間一般の概念による日記と異なり、昭和の大戦を中心に、〔蘇峰が〕わが生涯の信条と行動に関し、百年の後の人々に訴えんとして、中島司秘書に口述筆記させ、さらに和紙に墨書清書せしめ、百年以上の保存に堪える配慮まで行った原稿である。終戦後三日より約二年間、毎日襲い来る三叉神経痛の痛みに堪えながら口述したことから考えれば、広い意味において終戦日記と称しても差支えないと思う。」徳富敬太郎「刊行にあたって」前掲、『徳富蘇峰 終戦後日記——『頑蘇夢物語』——』五頁。

(4) 日記の形状は縦二二×横一五センチ×厚さ三センチ、白無地の自由帳。表紙に文字は書かれていない。「近世日本国民史」原稿のナンバー、小見出し記録は、昭和二十二年二月三日以降はなくなっている。

(5) 縦一九×横一二×厚さ四センチ、白無地の自由帳。表紙に「昭和二一—昭和二三日記 頑蘇八十六」と墨書されている。

(6) 縦一九×横十二×厚さ四センチ、白無地の自由帳。表紙に『蘇峰自伝』（中央公論社、昭和十年）のカバーを再利用し貼りつけることによって補強してある。

(7) 縦一九×横一二×厚さ四センチ、白無地の自由帳。表紙に徳富猪一郎『大久保甲東先生』（民友社、昭和二年）のカバーを再利用し貼りつけることによって補強してある。

(8) 読み易さを考慮して、旧字体はできるだけ新字体に改め、適宜句読点を入れた。以下同様。

(9) 『昭和戦中日記』昭和十二年十月三十日、追遠文庫所蔵。ちなみに多田はその後、蘇峰に講演の依頼を行った。『昭和戦中日記』昭和十二年十一月十日、追遠文庫所蔵。多田の使いとして参部員の本田新太郎中佐が依

頼に赴いた。

(10) 『昭和戦中日記』昭和十二年十月三十一日、追遠文庫所蔵。

(11) 『昭和戦中日記』昭和十三年二月二十五日、追遠文庫所蔵。

(12) 松岡は九月一日にも蘇峰の下を訪れた。『昭和戦中日記』昭和十四年九月一日、追遠文庫所蔵。「松岡洋右氏クル、二時〔間〕以上、高談雄弁焉」とある。

(13) 『昭和戦中日記』昭和十四年八月三十日、追遠文庫所蔵。

(14) 『昭和戦中日記』昭和十三年九月二十九日、追遠文庫所蔵。

(15) 米内閣にも蘇峰は期待しなかった。同内閣崩壊を聞いた蘇峰の感想は以下の通りである。「東京ヨリ電話二回、米内々閣総辞職。閣取引ノ内閣、適正ナル運命、別ニ悲ム可キコトナシ。」「昭和戦中日記」昭和十五年七月十六日、追遠文庫所蔵。なお米内の後を継いで再び首相となった近衛に対して蘇峰は一抹の期待をかけた形跡がある。「本日近衛内閣、大体定ル、一文オクル」（七月二十二日）、「近衛首相ノラジオヲ聞ク、先ツ可」（七月二十三日）といった記述がある。『昭和戦中日記』追遠文庫所蔵。

(16) 『昭和戦中日記』昭和十二年九月二十三日、追遠文庫所蔵。昭和十二年九月、静岡県大宮町の蘇峰会支部で講演した際の一節を日記に記している。

(17) 「柴田〔徳次郎〕氏ト日独運動ニ付、種々相談ス」（昭和十二年十月八日）、「中野〔正剛〕氏、二回来ル。伊独ニ対スルメッセージヲ受ク」（同年十月二十二日）といった記述がある。『昭和戦中日記』追遠文庫所蔵。

(18) 『昭和戦中日記』昭和十三年二月十七日、追遠文庫所蔵。

(19) 『昭和戦中日記』昭和十三年三月六日、追遠文庫所蔵。

(20) 『昭和戦中日記』昭和十三年三月二日、追遠文庫所蔵。三月九日にも蘇峰は電通でイタリア使節接待の相談を行っている。

(21) 昭和十三年四月一日、藤原銀次郎邸で近衛首相、広田弘毅外相らとともにイタリア賓客午餐会に出席。十五年二月二十八日、イタリア大使送別会（於東京会館）で離別の辞を挨拶。『昭和戦中日記』追遠文庫所蔵。

(22) したがって蘇峰はドイツと心情的に一体化しておらず、翌十五年、フランスがドイツに降伏した際は、以下のように記している。「昨夕、仏国降

ラジオ聴クニ勝ヘズ。新聞不來。俗論紛々耳ニ聒（かまびす）シ呵々。

かくして九月二日、東京湾上の米戦艦ミズーリにおいて日本と連合国との間に降伏文書（休戦協定）が調印された。蘇峰は一言次のように記している。

九月二日 雨 国辱日デアル。

## おわりに

本稿ではこれまでその存在と内容がほとんど知られていなかった蘇峰の『昭和戦中・戦後日記』全四冊（昭和十二年八月十日〜三十二年十月七日）のうち、戦時中のものを『昭和戦中日記』として取り上げた。結論としていえるのは、以下の諸点である。

第一に、蘇峰は日中戦争に基本的に反対であり、その継続、長期化を憂慮していた。早期に戦争を終結させるため、彼は逆に積極論を唱え、中国側に打撃を与えた上での講和をめざしたと考えられる。

第二に、日中戦争の継続と並行して、蘇峰はソ連、アメリカ、イギリスを牽制するため、日独伊三国同盟の締結をもくろんだ。ドイツ、イタリア大使館関係者、あるいは同盟推進論者の同志たちと頻繁に交流し、対ドイツ友好仕事を積極的に仕掛けていった。

第三に、日米開戦前後、蘇峰は日記をつけることを停止したが、その

原因は彼のいうように病氣のためだけであるとは考え難い。昭和十六年八月のアメリカによる対日石油禁輸によって蘇峰はアメリカとの戦争は避けられないと考えるようになるが、日米戦争はもともと彼の初志に反するものであった。本来は望まない戦いをせざるを得なくなったという複雑な心境を抱く蘇峰は、後世の人々の目に触れることが予想される日記に本心を吐露することを避けたのではないだろうか。

第四に、日米戦争後半になって日記を再スタートした蘇峰は、戦局の悪化に焦燥感を抱き、東条、小磯首相に天皇親政の実現を訴えたが、それは実現しなかった。サイパン、硫黄島陥落に彼の苛立ちは募るばかりであった。

第五に、ドイツ降伏、沖縄陥落の一方で、蘇峰は鈴木首相に対しても天皇親政を唱えた。玉音放送を予告された彼は、天皇親政の持論が実現するのかと「驚喜」したが、反面、これは「和平ノ御宣論」ではないかとも予感する。現実の後者であり、蘇峰は日本の降伏文書調印という「国辱日」を迎えることになる。

## 《註》

- (1) 近年発表されたもっとも体系的な蘇峰研究として以下を参照のこと。杉原忠啓、富岡幸一郎編『稀代のジャーナリスト・徳富蘇峰——一八六三——一九五七——』藤原書店、二〇一三年。
- (2) 徳富蘇峰『徳富蘇峰 終戦後日記——『頑蘇夢物語』——』講談社、二〇〇六年七月、『徳富蘇峰 終戦後日記Ⅱ——『頑蘇夢物語』続篇——』講談社、二〇〇六年十二月、『徳富蘇峰 終戦後日記Ⅲ——『頑蘇夢物語』歴史

註記セリ。十四日片磐温氏二一幅オクル。新宅母子四人来ル。退去云々ノ件申聞ク。杖ヲ作ル。杜詩ヲ読ンデ鬱ヲ散ズ。高木徳氏来ル、李別荘二一泊。

八月十七日 ……塩崎氏使命ヲ全フシテ帰ル。午後東久邇宮内閣成ル。平凡ノ極ナリ。近比ノラジオ新聞何レモ国民ヲ欺罔スルモノノミ。聴クニ堪ヘズ、見ルニ耐ヘズ。

八月十九日 ……奥村社長、小松、井上、甲府支局長□□帯同ニテ来ル。辞意思止ルベシ云々ノ言アリシモ明白ニ心事ヲ吐露ス。

その後、高石真五郎・毎日新聞会長も蘇峰の下に挨拶に訪れた。

八月二十六日 昨夜大雨、今朝又然リ。……大雨ヲオカシテ高石、阿部氏、小松氏来ル。高石氏ハ予カ辞社ノ挨拶書簡一通ト札一封ヲ携ユ。予高石氏ニ贈ルニ佐渡赤玉文鎮一對ヲ以テス。

昭和四年以来、十六年間社實をつとめてきた毎日新聞社から去るのは、蘇峰にとって感慨深いものであったのだろう。翌日、改めて次のように感想を記している。

昭和二十年八月廿六日 大雨ヲ衝テ高石毎日会長 阿部重役 小松

秘書ヲ帯同シ来ル。……大東亜戦争ト共ニ言論人トシテ予ノ位置ハ漸ク本社モ認め、毎日ノ論壇ハ予ニヨリテ始メテ其光ヲ放テリ。然ルニ事志ト違ヒ、予ノ新聞人タルコトヲ断念スベキ時節ハ到来セリ。……予ガ言論人トシテノ光彩尤モ陸離タル時ニ終リタルハ聊カ始終ヲ全シタルニ幾シ

昭和二十年八月廿七日

ちなみに蘇峰を慰留した奥村社長もその直後に社長職を辞任し、その跡を継いで社長に就任した高石会長も二ヶ月後にはやはり辞職することになる。

八月二十二日、アメリカ軍進駐を予告する放送が行われた。二十八日にはその先遣部隊が、三十日にはダグラス・マッカーサー (Douglas MacArthur) が厚木飛行場に到着する。蘇峰は怒り、悔しさとあきらの入り混じった複雑な心境で進駐軍の到着を待ち受けた。

八月二十二日 早朝米軍進駐云々ノ放送アル。

八月二十六日 昨夜大雨、今朝又然リ。……今日敵米厚木ニ降下、大雨ニテヤ、当惑セン乎。呵々。果然敵米ハ不来四十八時延期トナル。

八月二十七日 ……敵機低空飛行、我ガ頭上ヲ掠メテ過グ。近比ノ

り。果然十二日午後二時鹿子木氏ヨリ二十〔日〕日比谷公会堂講演会出席請望ノ電報来ル。直ニ承諾ノ返電セリ。然シ十一日井上司郎ヨリ内輪ノ報ニ接シ大勢不可ナルヲ知矣。十二日吉田ノ上田特高来リ又タ同様ノ報ヲ伝フ。十四日ノ午後ハ放送不通ナリ。事尋常ナラザルヲ知ル。十四日ノ朝特高前田同ク昨夜云々。而シテヤガテ至尊御放送云々ト。予ハ実ニ驚喜セリ。今日ニ於テモ我等ノ主張ノ通リタルコト未ダ晩シトセザルナリ。然モ私ニ惟ラク是レ或ハ和平ノ御宣論ナラント。予ハ家族ヲ戒メ衣服ヲ改メ家族一同ヲ予ノ書齋ニ整立セシメ、謹ンデ玉音ヲ恭聴シ奉レリ。予ハ此ニ於テ家族一同ニ向ヒ色ヲ正シテ曰ク。我等ハ承諾必謹。故ニ尔〔じ〕後コノ和戰問題ニ付テハ一切口外スルコトナカラシムルコトヲ嚴ニ戒飭セリ。而シテ曰ク、予ノ公人タルノ任務ハ今ヤ終ヲ告グ。仍リテ直ニ新聞社トノ干係ヲ絶ツベシト。直ニ發電ス。不□〔不要力〕コレヲ中途ヨリ返却シ来レリ。然モ予ノ意決矣。予ハ今倉皇自殺スルハ自カラ罪ヲ悔ヒ且ツ謝スルモノト世人ヨリ誤認セラル、虞アレバ姑ラク静観セン。予ハ一点ノ悔ユル所ナシ。自分丈ハ自分丈ノ責ヲ尽シ最善ヲ效シタリト信スレバナリ。但ダ違勅ノ罪人タルコトヲ敢テセザルガ為メニ姑ラク緘黙センノミ。而シテ予ノ任務ハ尚ホ吾人ノ心事ヲ後世子孫ニ伝フルノ一点ニ存矣。因ニ云フ十二日ニハ松岡洋右氏ニモ上村生ヲ以テ予ノ意見一通ヲ托送セリ。未ダ知ラズ到達シタルヤ否ヤ。尚本日前田特高ニモ予ノ態度ハ承諾必謹同時ニ公人タルノ終節ヲ告ゲ、新聞トモ干係ヲ絶ツ旨ヲ語り、之ヲ上司ニ報告シテモ差支ナシ

ト云ヘリ。予ハ十二日ニ既ニコノ決心ヲ塩崎氏ニ語り置ケリ。松井大将モ大体ニ於テ賛同ノ意ヲ示セリ。然モ今日マデ大将ヨリハ未ダ何等ノ報告ニ接セズ。

昭和廿年八月十五日午後七時半於双宜莊

老蘇八十三誌

蘇峰は政府が講和に動き始めたという情報を得て警戒していたが、ついに「講和派ノ勝利」になったかと考えて一旦は自殺についても考えたという。しかし天皇自らによる放送が行われると聞き、自分の持論である天皇親政と徹底抗戦がつかないかなえられたかと一旦は「驚喜」した。しかしすぐに、これは「和平ノ御宣論」ではないかと直観したという。玉音放送を聞いた直後に家族に述べた言葉は、『終戦後日記・頑蘇夢物語』に記されているものとほぼ同様である。

翌八月十六日、蘇峰は塩崎秘書に毎日新聞社實、大日本言論報国会会長、日本文学報国会会長としての辞表を托し、届けさせた。三日後、奥村信太郎・毎日新聞社長は蘇峰宅に足を運んで辞意を思い止めるよう告げたが、蘇峰の意志は変わらなかった。

八月十六日 塩崎氏東京、安藤□〔節力〕熱海ニ赴ク。塩崎氏ニ高石、奥村当一通、鹿子木当一通、毎日社、言報、文報、社實、会長辞表ヲ托ス。横山大観ニ双宜莊画一幅ヲ携ヘ来リ贈ル。山行。揮毫斎藤吊花氏ノ為メ三枚、内一枚ハ敵国降伏コレガ最后ナラン云々ト

蘇峰はこれに大きな衝撃を受ける。

八月九日 …… 帰来東京電話、予ヲ待受曰ク日蘇開戦。予之ヲ聞テ慨然（憤り嘆く）。更ニ後報アリ。塩崎氏ヲシテ松井大将ニ報ゼシム。同夜大将来話。此日国民義勇隊編成アリ。家中ノ者皆之ニ赴ク。同夜一同ヲ集メ勝札〔政府が軍事費調達のため臨時資金調整法にもとづき発行したもの〕ヲ分贈シ、且ツ時局ニ付銘々ノ覚悟ヲ定メ、決シテ皇国臣民ノ本分ヲ失墜セザルベキヲ嚴ニ戒飭（かいちよく、注意を与えて慎ませる）セリ。

八月十二日 塩崎氏ニ向テ時局ニ処スル予ノ決心ヲ告グ。

そうして蘇峰は玉音放送を聞くことになる。

八月十五日 早朝独活（うど）移植。昨夜空襲騒ギニテ安眠ヲ妨ゲタリ。今日正午 至尊御放送、一切ノ事ハ別ニ記ス。山田技師、豎山氏、安田氏等クル。長田毅氏ノ為メニ揮毫ス。本日ハ終日家居、山行セズ、杜（杜甫）詩ヲ読ミテ鬱ヲ遣レリ。

この八月十五日の日記は以下のように詳細な記述が続いている。これは管見の及ぶ限りでは、当日の蘇峰のいわば肉声を聞くことのできる唯一の資料である。文章はまず八月十五日に至る日々を振り返ることから

始まっている。

○八月十四日夜 夢ニ大江義塾、国民新聞社等ニ関スル錯雑混淆。壮年青春ノ後生、何レモ予ノ顔色ヲ覩テ欣喜踊躍ノ状アリ。夢ヲ以テトスルニ予ノ壮心猶未ダ熄マザルモノアル歟。十五朝誌

〔中略〕

政府ノ平和運動（講和への動き）ヲ猜知スル久シ。八月五日柴田氏来ル。本多熊太郎氏ヨリノ文書携帯。五日柴田氏一泊、六日朝又談ズ。依テ本多、鹿子木両氏ヘノ書ヲ托シ。予モ出京、日比谷ニ於テ本多氏等ト大獅子吼ヲ覚期セリ。八月六日井上縫三郎氏、加藤氏ト来ル。翌日又来リテ米国伐謀論ヲ筆記ス。井上記者ニ向テ講演会ヲ□□□□ヲ托ス。八月九日井上氏ヨリ蘇聯宣戦ノ報ニ接ス。依テ米国伐謀論中、蘇聯ニ関スル件修正ノ必要生ジ、即時掲載ヲ見合ハスルコトトセリ。之ヲ松井大将ニ報ジ、松井大将来話、予ノ意見ヲ陳ス。吉田署長谷□氏来ル、又タ陳ス。尔（じ）来新聞ヲ見ルニ査トシテ消息ナシ。予仍リテ講和派ノ勝利ヲ推定シ禍不測ニ生ゼンコトヲ憂慮セリ。予或ハ一死ヲ以テ日本ノ論客ニモ実行者アルコトヲ証明センカト思ヒ、自殺ノ方法ニ就テ考慮シタリ。尔来屢々東京ノ本社ニ対シ井上氏トノ聯絡ヲ促スモ要領ヲ得ズ。松井大将ハイヨイヨ十一日上京、大将ニ対シ講演会ノコト鹿子木氏トノ聯絡等ヲ托セ

五月三日 ……ヒットラーノ死ヲ聞ク。

五月九日 ……独乙無条件降伏、……

一方、東京は五月二十四日から二十六日にかけて大規模な空襲を受けた。

五月二十六日 ……昨夜十時比ヨリ三時間二百五十B 29クル。ソノ為メ東京新聞一切不來、約束ノ井上記者不來、前日ノ読売記者筆記又空トナル。

六月五日 ……正午ツル子（矢野鶴子、蘇峰の六女）來ル。東京諸縁家焼失ノ様子ヲ聞ク。

沖縄では六月二十三日、守備軍（第三十二軍）司令官の牛島満中將が自決し、二日後、大本営は沖縄での戦闘終了を発表した。

六月八日 ……沖縄ノ景氣甚ダ悪シ。可嘆可悲可恨。

六月二十五日 ……夜二入りテ沖縄陥落ノ公報ヲ発ス。天下多事、今後ノ事尤モ注意ヲ要ス。

六月二十九日 ……本日牛嶋中將切腹云々ノ放送アリ。

沖縄陥落の報を聞いた後、蘇峰は鈴木首相に改めて意見書を提出した。<sup>(36)</sup>先に執筆した『頑張読本』原稿の校正はすでに刷り上がっており、蘇峰はこれを出版して抗戦を訴えるつもりであった。さらに八月に入ると、新たに「米国伐謀論」を執筆した。「伐謀」とは孫子の兵法にある「上兵伐謀」（上兵は謀を伐つ）に由来し、ここでは敵であるアメリカの謀略を未然に防ぐことが最良の策であるという意味である。アメリカが意図的に和平、講和の風評を流し、日本の戦意を喪失させようとしているが、そうした謀略に乗せられてはいけないというわけである。その一方で、蘇峰宅の上空にもアメリカの戦闘機が飛び回り、蘇峰自身も相当の決意を固めざるを得なかった。

七月十八日 ……当日敵機來襲殆んど竟日（きょうじつ、一日中の意）ニ亘ル。水戸、日立ナドハ艦砲射撃云々。

七月三十日 ……敵機頭上ニ頻來、終日忙ハシ。

八月五日 ……時局切迫、予モ身命ヲ賭シテ国家ニ酬ユル覚悟デア  
ル。

そうした中で八月九日、ソ連軍が満洲に侵攻して対日参戦を開始した。



四月二日 ……沖繩ノ前途頗ル憂慮ニ堪ヘザルモノアリ。

このように沖繩戦の結果を憂いながら蘇峰は鈴木貫太郎内閣成立の報を聞くことになる。

## 五、ポツダム宣言受諾と降伏文書調印

昭和二十年（一九四五）四月七日、鈴木内閣が発足した。これまでと同様、蘇峰は鈴木首相に天皇親政を訴えるため、先に作成した上奏文の写しを手渡した。また阿南惟幾陸相にも意見書を提出した。

四月八日 昨夜鈴木内閣成立。……鈴木首相ニ一通、迫水（久常）  
 輸長ニ一通、外ニ上奏文謄写一通ヲ塩崎氏ニ托シテ鈴木首相ニ手交  
 セシメタ。

四月九日 昨夕八時過、塩崎帰廬、鈴木首相ニ意見書手交云々。

四月十日 今朝阿南大将ニ一書ヲ認メ、塩崎氏ヲ特使トシテ手交セ  
 シム。阿南氏会議中ニ付副官ニ渡シ還ル。<sup>(55)</sup>

四月十一日 四天王（四王天延孝）中将来訪。上奏文受理云々。

その後、蘇峰は熱海から上京し、鈴木首相と会談した。

四月二十一日 好天気、本年始メテ東京ニ赴ク。久邇大宮殿下ノ汽車ニ陪乗、昭和十四年以来始メテ此ノ好汽車ニ乗ル。……首相中餐ノ席ニ待久矣。首相、左近司（政三）相、迫水輸長等ト会食。首相ニ約三十分進言。顧問云々ノ件ハ此方ノ希望通りニ中止トナル。迫水輸長ト小話。新橋ヨリ帰ル。高橋氏横浜迄見送ル。小池氏同行。塩崎氏ハ始終同行ナリ。此ノ事ニ付テハ別ニ言スルところアルベシ。

四月二十二日 ……中嶋氏、鈴木首相トノ談話ヲ筆記ス。

四月二十五日 ……左近司國務相、鈴木首相ノ代理トシテ来訪、種々談話。鈴木首相ヨリ恩賜ノ蒲桃酒―侍従長時代―二本ヲオクル。

右の記述を見ると、鈴木首相は蘇峰に顧問就任を要請したが、本人は望まず、実現しなかったようである。歴代首相にアプローチし続けたにもかかわらず、なぜ顧問になることを断ったのか、その理由は明らかではない。それからすぐ後、蘇峰にとって悲報が届いた。五月八日のドイツ降伏である。

四月二十六日 ……伯林已ニ半ハ蘇聯ニ帰ス、吁々人事ノ変可□哉。



二月十六日 ……本日ハ敵機動部隊近海ヲ浸シ、艦載機空襲終日。  
実ニ憤慨ニ禁ヘズ。当局何ノ顔アリテカ国民ニ対スル乎。

二月十九日 ……筆記中、B 29 空襲頻、不能開口ナリ。……松山代  
議士、松永寿雄海軍少将、多木□太郎氏来ル。松永少将ハ三万噸飛  
行機制作云々。如何ニモ一考ニ値スル意見ナリ。

松永寿雄少将（予備役）は当時、衆議院議員であつたが、海軍の航空  
畑を歩んだ人物で、蘇峰にも説得力のある意見をもつと思われたのであ  
ろう。その同日、アメリカ軍の硫黄島上陸が始まつた。

二月二十日 ……敵兵硫黄島上陸スル、言語道断ノ事。今后ノ事知  
ルベキノミ。

連日空襲がくり返される中、蘇峰は『頑張読本』の執筆を構想し、そ  
の草稿を作成した。<sup>(34)</sup>しかし三月十日の東京大空襲、同月二十六日の硫黄  
島占領と事態は悪化の一途をたどつていった。

三月十日 ……昨夜東京大空襲家事多シ。東京新聞終日一紙モ不來。

三月二十一日 ……硫黄嶋陥落ノ発表十七日トノコト。痛哭無限。  
如此江山、付人、海陸兩軍何ノ面目カアル。嗚呼是レ不可恨<sup>カ</sup>耶否

耶。……

そうした中で蘇峰は大日本言論報国会を通じて天皇に親政を訴える上  
奏文を提出しようとした。

三月十四日 ……昨日上奏文清書ヲ更ニ訂正シ、重ネテ中嶋氏ヲシ  
テ清書セシム。

三月二十三日 ……本日言報ヨリ上奏文云々ニ付□□ヲ待ツ。消息  
ナシ、頗ル不思議ト云フベシ。

三月二十四日 ……午前鹿子木（員信）博士クル。相談ノ上、上奏  
文清書、夜ニ及ブ。

三月二十五日 ……本日午前、大場女史ヲシテ上奏文一封ヲ□□□  
ニヨリテ書留郵送セシム。是大事件也矣。

三月二十六日、沖縄戦が開始され、四月一日、アメリカ軍が沖縄本島  
に上陸する。

四月一日 ……敵兵沖縄本島上陸云々、禍機イヨイヨ迫矣。廟堂俗  
物共拱手欲做何計歟。

昭和十九年十一月五日 ……午時前敵機クル、防空壕ニ入ル。

十一月七日 ……本日空襲警報。過日来、既二三回、遂二一回モ追撃セズ、追落セズ、遺憾ナリ。

十一月二十四日からB 29による東京の戦略爆撃が開始される。

十一月二十四日 ……正年比ヨリ空襲警報、午餐后防空壕ニ入ル。

十一月二十七日 ……本日正午過ヨリ約一時間半空襲、敵機四十機来ル云々。憾未聞撃墜之快報也。

十一月三十日 ……昨夜々半空襲遂到天明。……昨夜東京ノ被害ハ相当ノ被害アリタルガ如シ。

十二月三日 ……午後二時―三時半空襲、防空壕ニ出入数回。敵七十機墜落十五機云々。中嶋氏筆記。空襲ノ為メ中止又タ始ム。

十二月九日 ……空襲三回、……。……夜、蓄音機中ニ空襲警報来ル。殺風景ナリ。

かくして戦局の悪化は蘇峰の生活にも及んでいたが、それとともに権力のある人々、要路者の言動が彼の怒りを買った。

昭和二十年一月廿七日 ……昨夜空襲三回、今午後五編隊来ル、空襲モ愈々本格的タラントス。然モ俗吏社鼠城狐（権力者の陰に隠れて悪事を働くキツネやネズミに等しい者どもの意）ノ徒、真ニ邦家ノ大事ヲ誤ル、嗚呼悲夫

二月十四日 ……晚景横尾氏来訪……横尾氏ニハ木戸（幸一）内府ガ君徳輔弼ノ任ニ反スル旨ヲ明言シテ平素内府ニ不信頼ノ旨ヲ告白セリ。君側ノ諸氏実ニ邦家累卵ノ危ヲ知ラズ。実ニ憤慨、痛嘆ニ禁ヘザルナリ。他日必ズ吾言ニ驗アラン。

このように蘇峰は内憂外患に直面していたが、まだ日本の敗戦は想定せず、徹底抗戦を考えていた。そのため第十四方面軍司令官を解任され、昭和十九年十月にフィリピンから帰国したばかりの黒田重徳中将（予備役）に会った際、「頑張論」としてそれを論じている。

二月九日 ……黒田重徳中将来ル。戦局ニ付縷々談話。余曰ク高説七八同意、但後ノ二ハ不然。予ハ飽迄頑張論ナリ。彼ニ手ヲ上ゲズ彼ヲシテ手ヲ揚ゲシムルナリ云々。昨日ヨリ又々韓非子ヲ読ム。

あくまで徹底抗戦によってアメリカに勝利を断念させるというのである。しかしそれでも日本の不利は覆せず、蘇峰の苛立ちは募るばかりであった。

后二面会シタルハ七月初一ノ早朝ナリキ。然ルニ其時齋シ与ヘタル書類モ今ヤ紙屑籠中ノ廃物ニ帰セリ。妄庸子誤国前途未逆賭也。十八日総辞職。廿日大命小磯、米内二下ル。二人ニ降ルノ例ハ大隈板垣内閣ノ当初以来、未ダ曾テ見ザル所ナリ。是亦情実ノ弊ナリ。二七・20 双宜莊燈下ニ於テ

反復人情未足馮。白頭憂世慙無能。

当総薄岳笑相揖。六十年来耐久朋。

今朝意見書ヲ認メ、高木氏ニ托シ、之ヲ小磯大将ニ送ルコトセリ。山行新宜園、同行塩西、中嶋、柳原。午後中嶋氏帰京。吉田初三郎氏来ル。〔中略〕晚景同人ヲ双宜園ニ案内セリ。朝ニハ高木徳氏ヲ案内セリ。大命小磯、米内二下ル。嗚呼情実内閣؟؟?

東条は才氣に優れ、弁舌も鋭く、一人行く信念があると思ったが、その気迫は失われ、小事のみにこだわりのみ、大局をおろそかにした。自分は東条に数十回忠告したが、昭和十八年以降は右に向かって語るごとく反応がなかった。道理のわからない凡庸な人間は国を誤り、将来を予測して手を打つこともできないというのである。東条に対する痛烈な批判である。また蘇峰は次期首相・小磯あての意見書を早速書いたものの、小磯・米内内閣は情実内閣ではないかと早くも失望感をほのめかしている。自国の政府指導者に対する彼の不信任は根強かった。ただし蘇峰は退陣した東条への配慮を忘れず、その私邸を訪ねている。<sup>33</sup>その一方で、七月二十二日の新内閣成立にともない小磯へのアプローチを早々に開始した。

七月二十四日 ……原田氏筆記、塩崎氏帰京ス。小磯、東条、赤松三氏ヘノ書簡ヲ托ス。井上氏ニ緒方当書簡ヲ托ス。

七月二十七日 ……塩崎氏、東条前首相ニ挨拶、且又小磯首相ノ書簡ヲ携還ル。

しばらくして蘇峰は小磯に会见し、東条に進言したのと同様に天皇親政の詔書を渙発するよう促した。

十月七日 ……六時過熱海発九時面□〔空欄〕首相約一時間。談皆国事。主上。親征。大詔。秋霜烈日。情報一件。政党逆転其他。

十月十二日 ……今朝小磯首相依頼ノ文ヲ起艸シ、中嶋氏ヲシテ清書セシメ、塩崎氏ニ托シテ之ヲ首相官邸ニ齎ラシ送ラシム。塩崎氏其托ヲ果シテ帰ル。

昭和二十年二月三日 ……横尾氏ノ依頼ニ応ジテ小磯氏ヘ陳白ノ一書起艸頗勞矣。横尾氏来之ヲ渡ス。

しかし日本側の不利はもはや隠すことができず、蘇峰自身、アメリカ軍の空襲によってそれを実体験していった。

蘇峰は筆禍の危険性を感じつつ文章を寄稿した。東条がそれに目を通して、この原稿は自分に一任してほしい、つまり公にしないでほしいと頼んできたので、そうすることにしたのである。一旦妥協した蘇峰は東条に意見書を提出し、さらに首相官邸で東条に面会した。

六月二十九日 ……東条首相二書ヲ呈セリ。正□□論ナリ。

六月三十日 塩崎氏、昨半夜帰ル。首相云々、依テ明朝、東京經由山中〔湖〕行ヲ決ス。尚試ミニ詔書□案ヲ艸ス。時局頗ル重大ナリ。

七月一日 熱海発東京、首相邸日本館ニ入ル。東条首相ト約四十分間。最前二十五分首相戦局概論、後十五分、戦局、海軍、末次、大本営強化、万機親裁、及聖詔渙発。同時ニ其ノ原稿ヲ示ス。

四十分の会談のうち最初の二十五分は東条からの戦局説明で、その後の十五分で蘇峰が持論を主張した。「万機親裁、及聖詔渙発」とあることから、彼は事態の急迫をかんがみて天皇親政の詔書を発するよう東条に促したことがわかる。その夜、就寝した彼は「明治天皇二拝謁シタル吉夢」を見たという。天皇親政を実現し、自ら宮中に赴いて天皇を直接サポートし、時局を救いたいという潜在願望が現れたのであろう。<sup>(32)</sup>

しかし七月七日、サイパン島の守備隊三万人が玉砕、住民八千から一万人が死亡し、日本の敗色は決定的となった。十六日には東条内閣が総

辞職する。

七月八日 ……サイパン島、百事休矣、放送ヲ待ツ、不発表。

七月九日 ……本日鬱々不□〔安カ〕。サイパン嶋悲音ノ為メナリ。

七月十六日 ……晚景塩崎氏帰京、時局忽ニスベカラザレバナリ。

七月十八日 ……社ヨリモ通信部ヨリモ総辞職ノ報アリ。サイパン島玉砕発表。

七月十九日 ……時局急。内閣総辞職。小磯氏トノ報アリ。或ハ然ラン歟。

翌二十日に蘇峰は以下のようなまとまった意見を日記に記している。

東条内閣モ竜頭蛇尾、全ク野垂死ヲ遂ゲタリ。東条首相モ十八年初比ヨリ其ノ初心ヲ一変シ、頻リニ実業家ナルモノノ意ヲ迎へ、全ク物質万能主義ニ化セリ。首相当年ノ卓励風発千里独行ノ気魄ハ殆ンド消磨シ去レリ。予ハ首相ニ対シ数十回ニ亘ル意見書ヲ与ヘタリ。然モ昨年以来ハ殆ンド石ニ向テ語ルニ似タリ。彼ハ小事ニノミ齷齪トシテ遂ニ大局ヲ閑却シ、遂ニ最后ハ陰謀ノ犠牲トナレリ。予ガ最

「国勢二関スル意見」を述べ、東条自身についての忠告を行った。<sup>(48)</sup> また蘇峰は「言論界優遇奨励」についても東条に意見を伝えた。<sup>(49)</sup>

しかし情勢が日本側に不利になりつつあることは蘇峰にも感じ取られた。九月、イタリアが連合国と締結した休戦協定を公表すると「伊太利全面降伏ノ報」とし、その直後、ドイツ軍がムッソリーニを奪還してイタリアを制圧すると、「独逸、伊太利占領。痛快此上ナシ、真ニ痛快矣」と喜んだものの、<sup>(50)</sup> 日本を含む枢軸国にとって事態が有利でないことは明らかであった。

そうした中で蘇峰は秘書の塩崎彦市を介して東条にコンタクトをとり続けようとした。そこには東条のリーダーシップに失望を感じつつも、励まし、忠告を試みたいという姿勢をうかがうことができる。

昭和十八年九月二十二日 ……夜、東条首相ノ放送ヲ聞ク、感銘ナシ。

十月十七日 ……東条首相ニ内閣二年ノ祝規ヲ併兼タル電報ヲオクル。

十二月八日 ……午前、宣戦三年ニサイシ、東条首相ニ五古一首ヲ朝鮮古紙ニ書シ塩崎氏ニ托シテオクル。

昭和十九年五月十九日 ……塩崎氏帰邸、東条首相官邸云々。仍テ

予ノ封書ヲ赤松秘書官ニ預テ還ル云々。

しかし昭和十九年六月、ヨーロッパでは連合軍がローマに入り、かつノルマンディー上陸作戦を行い、ドイツの劣勢は明らかであった。その直後の六月十五日、太平洋ではアメリカ軍がサイパン島に上陸し、日本も追い詰められつつあることが鮮明となる。アメリカ軍が日本に迫り来ることを感じながら蘇峰は『毎日新聞』に自己の率直な意見を記した原稿を渡したが、それが問題になった。

六月十六日 敵機北九州及小笠原嶋ニクル。

六月二十日 ……〔毎日〕本社ヨリ電話ニテ石田氏クル。時局談ヲ筆記セシム。夜、朝日通信員某亦来ル。後筆記セシム。戦局急迫。

六月二十五日 午前八時、上嶋（うえしま）氏、〔毎日〕本社ヨリ来ル。時局論文ヲ艸シテ遺ス。或ハ言禍ヲ沽（か）フノ危険アルモ、断然筆焉。

六月二十六日 ……東条首相一通。……東条首相カンテイヨリ電話、予ノ原稿一任ヲ乞フ云々。蓋シ掲載ノ日ニハ中外ニ大影響ヲ及ボサンコトヲ畏レテナリ。既ニ首相ガ原稿ヲ見タ上ハ目的ノ一部ハ達シタルモノナリ。故ニ強テ争ハズ、其希望ニ一任セリ。

まめの蘇峰が本来容易に書けるはずの日記を再開しないというのは「病ノ為」だけでは説明がつかないのではないだろうか。

昭和十六年八月一日のアメリカによる対日石油輸出の禁止は、蘇峰をはじめとする日本のリーダーに開戦を決意させる最大の契機となった。蘇峰はできれば日米戦争を避けたかった。しかしアメリカの出方次第では戦わざるを得ず、そうであれば積極的に打って出るしかないと考えていた。アメリカの石油禁輸は蘇峰を戦争に踏み出させるもっとも大きな衝撃であったが、ちょうど同じ時期、彼が日記をつけようと思えばできないことはなかったはずであるのに、それをしなかったというのは、そのショックの大きさを示すものとはいえないだろうか。本来戦争は避けるべきである、しかしもはや戦わざるを得ないという複雑な心境、憂鬱感が、彼を日記から遠ざけた可能性があるのではないだろうか。日記を記している多くの著名人がそうであるように、彼もまた将来自分の日記が他人の目に触れることを意識していたであろうし、そこに心底の真情を書くことができない場合もあったであろう。

一方、その後、十七年五月中頃からの蘇峰は、三叉神経痛のため日記を思うように書けない状態にあったことは確かである。その頃、蘇峰は顔面の三叉神経痛が再発して再び病臥した。それ以来「予は殆んど全く病床の人となった」と彼は記している。六月から七月は徳富家の主治医の治療を受け、その上で眼科の専門医を呼び、八月にはやや小康を得た。しかし十月一日から十一月二五日まで入院し、退院後も全快には至らず、合計三十八本の注射を受けた。その間、「殆んど耐え難き苦痛あり。運

動の自由は勿論、飲食さへも殆んど不可能に近き程の困難を嘗めた」という。<sup>(46)</sup> そうした中で日記を書くのはほとんど不可能であった。またそこから回復しても、一年半以上の長期のブランクを空けてしまった後では、元のように日記をつけるという習慣を取り戻すのは容易なことではなかったと推察される。こうして蘇峰は昭和十八年五月まで日記から遠ざかることになる。

要するに蘇峰は少なくとも、①昭和十六年三月から夏までは胃腸病、②十七年五月から十一月には三叉神経痛のため、日記をつけられる状態にはなかった。しかしそれ以外の十六年夏から十七年四月までは、記そうと思えばそれは可能であったはずである。したがって蘇峰は病気とは関係なく日記をつけることを避けた、それは彼の初志に反して日米戦争が避けられなくなったからではないか、複雑な心境にあり日記という自己の内面を吐露しなければならぬ場を避けたからではないかという推測が成り立つことを指摘しておきたい。<sup>(47)</sup>

#### 四、日米戦争後半期

昭和十八年（一九四三）五月、蘇峰は日記を再開した。それ以降の記述に顕著であるのは、積極的に首相に働きかけようという姿勢である。東条英機、小磯国昭、鈴木貫太郎の三人の首相に対して彼がどのような行動をとったかを中心に見ていきたい。

まず東条首相との関係である。十八年五月、蘇峰は東条を訪問し、

十一月三日 ……時々神経痛、食時尤劇。

十二月二日 昨夜ヨリ神経痛加ハル。今朝ハ食スル能ハズ。

十二月十五日 ……本日神経痛ニテ悩メリ。

十二月十六日 ……本日神経痛甚ダシ。午後、日本橋中村医師ニ赴キ、電気療法ヲナス。

十二月十九日 本日ハ朝来、神経痛劇甚。民友社ニテ一時安臥。

昭和十六年一月十日 ……夜半ヨリ神経痛。6.30起床ス。午前神経痛ニテ平臥、0.30ニ至ル。

一月十七日 ……勉強ノ結果、顔面イタム。

しかしこの三又神経痛の痛みはそれ以降、若干後退したようである。そこで次に重要になるのは胃腸病である。昭和十六年三月、蘇峰は胃腸病にかかった。そのため約二ヶ月間入院し、その間は痛みをこらえながら秘書に国策論を口述筆記させ、新聞に掲載するという有様であった。<sup>(43)</sup> 蘇峰の日記が停止したのは三月十八日、入院したのはその三日後の二十一日である。もともと三又神経痛によって断続的に苦しんでいたが、さ

らに胃腸病となって入院を余儀なくされたため、彼は日記の筆を断つしかなかった。したがって蘇峰がいうように病のため日記を中止したというのは、確かにその通りであったといえる。少なくとも昭和十六年三月から六月にかけての蘇峰は日記を書けるような健康状態にはなかった。しかしそれから夏に入ると蘇峰は回復して外出できるようになっている。九月一日には半年近く中断していた「近世日本国民史」の執筆も再開した。その後は執筆や講演を活発に行いながら日米開戦を迎えている。<sup>(44)</sup> 彼自身もそのころの様子を以下のように記している。

昭和十六年十月廿一日下山より昭和十七年六月十三日青山会館の講演まで半ヶ年強は、予の一生涯中、最も効果的な時期であつた。米英に対する宣戦の大詔渙発前後、予が如何なる働きをなしたるかは、予自ら之を知るのみ。謂はゞ十ヶ年の仕事をこの半ヶ年強に圧搾したると云ふも差支へない。<sup>(45)</sup>

十六年夏に胃腸病から回復した蘇峰は九月には執筆活動を再開しただけでなく、右の記述にあるように十月末からの半年間には十年分の仕事を圧縮したような中身の濃い活動を行ったのである。そうした経緯を見ると、昭和十六年夏ごろから日記を復活させようと思えばできたはずである。四ヶ月以上のブランクが空いてしまったため、日記の習慣が薄れてしまったということもあろう。しかし「近世日本国民史」の原稿ナンバーは同じ日記帳に記録しているのであり、元来人並み外れて筆



## 三、日米開戦前後と日記の中断

ドイツとの同盟を積極的に目指した蘇峰であるが、その目的は松岡外相と同じく、一つにはソ連の共産主義拡大を抑制すること、もう一つはアメリカ、イギリスを牽制することにあったと考えられる。しかし日米関係の悪化を蘇峰自身は望んでいなかった。それだけに日中戦争が始まってから間もない昭和十二年（一九三七）十月、渡米経験のある竹下勇海軍大将（後備役）と日本外交、日米関係について意見交換を行い、<sup>(36)</sup>その上で十一月、竹下とともにアメリカ大使館を訪ね、ジョセフ・C・グルー（Joseph Clark Grew）駐日大使と約五十分、通訳付で会談している。全体の九割は蘇峰が意見を述べ、グルーは聞き役に回るというものであった。<sup>(37)</sup>

この時期、蘇峰はグルー大使に積極的に働きかけを行ったように、アメリカに対しては融和的であった。しかしイギリスに対しては異なる態度をとった。東南アジアに多くの植民地をもち、「持てる国」の「旧体制」維持をはかる国としてイギリスに批判的であり、彼自身の言葉を用いれば「排英親米」論者であった。<sup>(38)</sup>

昭和十四年（一九三九）末、日本陸軍による天津租界封鎖事件に関してイギリスの対日世論が悪化すると、日本の言論界では反英的風潮が高まり、一部に日英戦争論が唱えられるようになる。そうした中で蘇峰は陸軍の反英的な佐官級将校と会合し、席上「排英論」を主張している。<sup>(38)</sup>

しかしその一方で日記には反米的な言葉が見られない。その蘇峰に一つのショックを与えたのは、昭和十四年七月のアメリカによる日米通商航海条約の廃棄通告であった。この件について当日の日記には「米国条約破棄通告。」としか書かれていない。その他にいろいろと所感を述べていない点に、逆に彼の受けた衝撃の強さをうかがうことができる。<sup>(40)</sup>

以上をふまえた上で、本稿の冒頭で述べたようにこの日記が昭和十六年十二月の日米開戦前後に空白となっている点に着目したい。その理由を蘇峰自身は「昭和十六年三月十七（正しくは十八）日以来日記ヲ中止シタ。病ノ為メニ」としている。<sup>(41)</sup>ここでいう「病」とは三叉神経痛と胃腸病、とりわけ直接的には後者を指すと考えられる。まず三叉神経痛であるが、その症状が彼の顔面に出始めたのは昭和十五年初めごろからであった。以後、苦痛を訴える記述が以下のようにくり返し登場する。

昭和十五年二月五日 神経痛甚ダシ。左方眼ヲ中心トシテ顔面疼痛  
矣。

六月十日 ……式氏ト共ニ中村医博ヲ訪問、神経痛ノ治療ヲ受ク。

七月十七日 ……本日午后、特ニ夜ニ入りテ神経痛再起、苦痛禁ジ難シ。本日、伊太利人口政策ノ一書ヲ読ンダ為メ歟。

十月二十八日 ……神経痛甚ダシク閉口ス。

小阪、緒方其他。夜九時半帰京。

ヒトラの受難を聞くやドイツ大使館を訪問するなど、蘇峰の心配りは細やかであった。その後も蘇峰とドイツ側との接触は続いている。<sup>(28)</sup>昭和十五年七月、第二次近衛内閣の外相に就任した松岡洋右は、翌八月よりドイツとの同盟交渉を本格的に開始した。それとともに蘇峰とその同志たちも三国同盟の締結に向けてラスト・スパートをかけた。

九月六日 ……星丘茶寮ニテ末次〔信正〕、頭山〔満〕、安達〔謙蔵〕、永井〔柳太郎〕、中野〔正剛〕、橋本、久原〔房之助〕、大嶋〔浩〕、白鳥〔敏夫〕諸氏ト会合。予ノ案文〔三国同盟即時締結の建白書〕ニ各員記名シテ末次氏ヨリ之ヲ首相ニ呈出スルコトナレリ。其外、外相陸海両相ニモ。

右のように蘇峰が起草した日独伊三国同盟即時締結の建白書は同志の署名を得て、近衛首相に送られることになった。その後、主要メンバーの大嶋浩が民友社を訪れ、また蘇峰と同志たちの会談は継続された。<sup>(29)</sup>加えて蘇峰は松岡外相とともに日比谷公会堂で講演を行い、その結果に満足した。<sup>(30)</sup>そうした経緯を経て、昭和十五年九月二十七日、蘇峰の宿願とする日独伊三国同盟がベルリンで調印される。

九月二十七日 記念ス可キ日。……柴田氏ヨリ親展電ニ回来ル。日

独伊条約一件ナリ。……夜ハ重大事件発表アリ。詔書、首相ノ添書、外相ノ演説等ナリ。多年ノ苦辛、至此了矣。

翌日、蘇峰はオイゲン・オット (Eugen Ott) 駐日ドイツ大使に祝電を送った。<sup>(31)</sup>また条約の締結にただ満足するだけでなく、率先して同盟の推進をはかろうとし、末次信正、大嶋浩、久原房之助、安達謙蔵、中野正剛らの共鳴を得て、同盟推進会に参加した。<sup>(32)</sup>その後も蘇峰は、末次、大嶋、中野、安達、白鳥らと会合し、<sup>(33)</sup>十五年十二月、大嶋が正式に駐独大使に任命される直前には、大嶋からドイツ赴任について長時間、話を聴取している。<sup>(34)</sup>

このように日独伊三国同盟の実現を後押しし、大嶋をはじめとする親独派の人々と協力した蘇峰は、松岡外相にとって有力な支持者と映ったに違いない。昭和十六年に入って早々、蘇峰がラジオ放送で対アメリカ、イギリス国策論を主張すると、松岡から感謝の電報が寄せられ、<sup>(35)</sup>それに応えて蘇峰も松岡を激励する書簡を送った。<sup>(36)</sup>さらに三月から四月にかけて松岡がドイツ、イタリアを訪問した際には、柴田を介して餞別の手紙を渡している。<sup>(37)</sup>その一方で、ドイツに一時帰国することになったオット大使に面会し、ドイツ語に訳した覚書を手渡して説明を加えている。<sup>(38)</sup>以上のように蘇峰は、政府外にいる著名人と連携するとともに、外相やドイツ大使のようなキーパーソンに接触し、自己の構想を実現しようと試みたのである。

イツとの提携を強化しようと努めた。それは明治期に帝政ロシアの南進を抑制するため、イギリス、アメリカとの協力促進に尽力したのと同様に、日本の安全と利益の確保を狙った彼なりの戦略にもとづくものであった。したがって蘇峰はナチス・ドイツに対して心情的に入れ込んでいたわけではなく、むしろ本音は逆のところにあった。昭和十三年八月、来日中のヒトラー・ユーゲントの代表団が山中湖の双宜荘に滞在する蘇峰を表敬訪問した。

八月十九日 ……午後ヒットラーユーゲント来着、大賑合、……

八月二十一日 ……少年団ノ朝礼ニ参加ス、見物ノ為メナリ。一人ノ独逸団員ト話ス。少年団モ文部省管轄ニテ官臭紛々可圧也。

ヒトラー・ユーゲントは官臭が粉々としているという。蘇峰はナチス・ドイツをナイーヴな目で理想化して眺めていたのではなく、むしろソ連への対抗上、戦略的に利用しようと考えていたのである。<sup>22</sup>さらに翌昭和十四年になると、ドイツ大使館との交流は一層盛んになる。

昭和十四年一月二十八日 ……独逸情報部員ノ茶話会ニ赴ク。

四月二十六日 ……三時ヨリ東京会館ニテ独逸大使オット氏ト約一時間対話、柴田氏在座。

四月三十日 ……帝国ホテル、独逸新聞記者招待会、会前、予三十分ニ亘リテ講演、大盛會。最后ニ予ノ講演ヲ求ム。仍テ短句一言、ソレガ尤モ独逸大使及ビ新聞記者一行ノ感謝スル所トナツタ。十時半帰家。

七月十二日 ……独乙大使来ル。中野、小山、白柳、大友其他。

十月二十八日 ……民友社ニ式氏、迫氏、姜氏等来ル。姜氏ハ独逸大使ノ使者トシテ予ヲ星岡會食ニ案内ニ来ル。病后多事ノ故ヲ以テ謝絶ス。然モ此方ノ意見ハ姜氏ヨリ得ヘシメタ。

十月三十一日 ……姜氏、独乙ケルレル教授ヲ伴来ル。富士山ノ額面一個オクル。

十一月八日、ミュンヘンで「ビュルガーブロイケラー爆破事件」が起こった。この日、ミュンヘン一揆ゆかりのビアホール「ビュルガーブロイケラー」で、ヒトラーが一揆を記念する毎年恒例の演説を行った。その直後、仕掛けられた爆弾が爆発し、ヒトラーは九死に一生を得たという事件である。これを知った蘇峰は直ちに行動に出た。

十一月十日 独逸大使館ニ赴キ、ヒットラー災難ヲ免レタルヲ祝ス。  
……夜ハ丸ノ内會館ニ防共同志会。小原、永井、安達、望月、松野、

る東アジアに共産主義を流布するため、日本に思想戦、イデオロギー戦争を挑んできた、それが日中戦争の本質だというのである。そのため彼は、ソ連—コミンテルン—中国共産党のラインによる共産主義拡大を抑えるという目的からドイツ、イタリアとの提携を模索していた。例えば昭和十二年十月、柴田徳次郎と「日独運動」について相談し、柴田と親しい中野正剛とも日独伊三国の提携について話し合っている。<sup>(17)</sup>その後、中野はヨーロッパに旅立ち、イタリアでムッソリーニ (Benito Amilcare Andrea Mussolini) 、ドイツでヒトラー (Adolf Hitler) と会見した。中野がベルリンから寄こした手紙によって蘇峰は「大ニ彼国ノ事情ヲ詳ニスルヲ得」、追って帰国した中野から直接欧州談を聞いた。<sup>(18)</sup>右のように親独派の中野、柴田と連絡を取り合いながら、蘇峰はドイツ大使館との接触を深めていった。昭和十三年二月、ドイツ大使館に関して柴田に種々の用事を伝えた蘇峰は(二十一日)、その後、民友社で柴田から結果報告を受けた(二十三日)。「同氏、独逸大使館、予ノ使者トシテ訪問ノ次第ヲ復命ス。好成績ナリキ」と蘇峰は日記に記している。以後、蘇峰はドイツおよびイタリア大使館に対して友好仕事を仕掛けていった。

昭和十三年二月二十八日 ……日独伊親交会祝賀会。予ニ感謝ノ人形贈呈。予、演説ス。左右ニハ独伊大使館ノ代表者アリ、可ナリノ盛会ナリキ。

さらに三月に入ると電通に集まった陸海軍、外務省などの要員とともにイタリア使節の歓迎、接待について相談している。<sup>(20)</sup>その結果、催された晩餐会は蘇峰の満足の行くものであった。

三月二十七日 ……東京会館日伊晩餐会、千二百名。予の演説ハ伊太利人ヲ熱狂セシメタリ。無上ノ好成績ナリキ。近比無類ノ快活事。十時半帰宅セリ。原稿ハ伊国団長ノ望ニ任□贈進。

その後も蘇峰はイタリア使節の歓迎会に参加し続けた。<sup>(21)</sup>一方、ドイツについては、より積極的に関係者との接触をはかった。

昭和十三年三月十八日 丸ノ内会館ニ西大尉、ラインホルト、シュルツエ、ワルテル、ドーナート、古間氏通訳会談、柴田氏参加。

六月二十九日 ……夜ハ末広ニ独乙代理大使ネウイル氏送別。予、演説ス。鳩山(一郎)氏ニ面会ス。

六月三十日 ……今朝、独乙大使館ニ並木氏(仙太郎秘書)ヲ以テ「近世日本」国民史五十冊ヲ、ネウエル代理大使ニ餞別トシテオクル。昨夕ノ約束ニヨル。

このように蘇峰はソ連共産主義の拡大を抑えるために、イタリア、ド

八月二十三日 ……独ソ連不可侵条約云々。嗚呼廟堂諸有司呻吟猶予逆誤邦家大事矣。痛恨々々。

これに続く平沼内閣の総辞職をへて八月三十日、阿部信行が首相に就任すると、蘇峰は「阿部内閣成ル。何等国民ノ熱情ヲ發揮スルニ足ルモノナシ」と重ねて慨嘆した。<sup>(13)</sup> その一方で、彼はヨーロッパの情勢を危惧していた。それ以前から蘇峰は第二次世界大戦発生の可能性を憂慮しており、例えば昭和十三年九月二十九日から三十日にかけてミュンヘン会谈が開かれたときには「欧州ノ形勢、実ニ可憂、危機一髪ナリ。天若シ生靈ニ祐セバ必ラス打開ノ道アラン歟」と記している。大変心配ではあるが天が生靈（人類）を助けるならば、必ず打開の道があるうかというのである。<sup>(14)</sup> しかし第二次大戦はついに勃発した。昭和十四年九月一日、ドイツがポーランドに侵攻し、三日、イギリス、フランスがドイツに宣戦する。蘇峰は次のように痛嘆した。

昭和十四年九月四日 ……英宣戦公布。第二世界大戦。幾千万ノ生靈ヲ殺ス可キ乎。

それから二ヶ月余りをへて蘇峰は阿部首相と会見する。

十一月九日 ……阿部首相ノ需ニ応ジ、数日前ノ約束ニ従ヒ、首相官邸ノ日本間ニ於テ首相ト対坐（遠藤〔柳作〕 幹長〔内閣書記官長〕、

予ノ希望ニテ参加）。約二時間余、国事ニ付対話。時局談ノミ。戦局切上、外交、官紀振肅、対議会策、食料問題等々。

「戦局切上」とあるように、ここでも日中戦争に結末をつけることが蘇峰の重要なテーマであった。しかし阿部から米内光政へと首相は短期間で交代する。そうした中で蘇峰は次のように記した。

昭和十五年七月七日 支那事変満三年。庸人誤国、斯ク事件ノ永引クモ当局其人ヲ得ザレバ也。

庸人すなわち凡庸な人間が国を誤る、優れた指導者がいないため戦争がかくも長引くのだと蘇峰は憤った。<sup>(15)</sup> このように日中戦争に関して蘇峰は一貫して早期停戦を望み、機会を見つけては首相をはじめとする指導層に自説を訴えた。またヨーロッパにおける第二次大戦の発生は膨大な犠牲者を出すことが予想されるため、彼にとって非常に嘆かわしいことであった。

## 二、日独伊三国同盟

以上の過程で蘇峰は当初から、日中戦争の背後にはソ連、コミンテルンの策謀があると考えていた。「相手ハ支那デナク、ロシヤ。物資ガ目的デナク思想戦争デアル」と彼は述べている。<sup>(16)</sup> ソ連が中国をはじめとす

八月三十日 ……点燈前、滝正雄氏、近衛首相ノ書簡ヲ携〔え〕来ル。云々依頼、予、婉辞之ヲ辞シ、且ツ時局ニ付、聊カ憤慨ノ談ヲナシ、之ヲ近衛公ニ通ゼシム。而シテ直書ニハ拳世昏々ノ一詩ヲ録シ、贈ツタ。

滝長官に時局（とそれを收拾できない近衛首相）への怒りを伝え、かつ世をあげて道理に暗い風潮を詩にして嘆じたというのである。一方、戦後の日本では蘇峰は好戦的な軍国主義者であったというイメージが定着している。しかしそれは彼の内面を知らないステレオタイプの見方であり、事実と異なることをこれらの記述が示している。さらに時をへて十月三十日には、事変不拡大派の多田駿参謀本部次長が蘇峰を訪ね、一時間弱、会見している<sup>(9)</sup>。またその翌日には宛先は不詳であるが、日華事変の宣戦の詔勅を出して大本営を設置した方がよいという意見書を人へ手渡ししている<sup>(10)</sup>。宣戦布告を行うことによって事変というあいまいな形に終止符を打ち、きちんと大本営を設け、陸海軍の力を結集して積極的に相手に打撃を与えた上で早期講和を実現するというのが蘇峰の構想であったと考えられる。

十二月、東京で南京陥落を祝う提灯行列を見た蘇峰はそれを素直に受け止めたようであるが、その直前に起きたレディバード号事件、パナイ号事件は「頗ル不愉快ナルノミ」として現地の陸海軍が起こした問題に後味の悪さを感じていた。また南京に入城した中支那方面軍兼上海派遣軍の司令官・松井石根大將は、山中湖畔にある双方の別荘がほど近く、

夏期は親しく行き来する間柄であった。そのため昭和十三年二月に松井が帰国すると、蘇峰は松井宅を訪ね、帰朝凱旋を祝した<sup>(11)</sup>。

しかし戦争が終わらないことへの憂慮は続き、盧溝橋事件から一周年の十三年七月七日には「回顧一個年、前途如何」と記している。蘇峰は近衛が首相に就任したときから期待を抱いていただけに、失望も大きかったと考えられる。それでも彼は有力者に自説を説いて回った。

昭和十三年十一月十二日 ……夜、陸軍大臣官邸ニ赴キ、大臣〔板垣征四郎〕、次官〔東条英機〕及び遠藤氏、晚餐ヲ共ニシ、約二時間近ク談話、遠慮ナク意見申置ク。

また蘇峰の下を訪ねて来る人物もいた。例えば外相に就任する以前の松岡洋右である。松岡はその前日に山中湖畔の別荘・双宜荘に入ったばかりの蘇峰をわざわざ訪ねて来た。

昭和十四年八月十五日 ……富士全貌ヲ見ル。松岡洋右氏来訪。時重要ノ談話アリ<sup>(12)</sup>。

しかしながら事態は変わらず、近衛に代わった平沼騏一郎首相は十四年八月二十三日、独ソ不可侵条約調印の報に直面する。蘇峰は次のように嘆いた。



サル。予ヲ知ルモ此ノ一冊。予ヲ罪スルモ此ノ一冊。……

昭和廿一年五月卅一日夜 於晚晴草堂 頑蘇八十四叟誌

自分を知るのも、罪するのもこの日記であるという。ジャーナリストであるだけに蘇峰は物を書くときに多かれ少なかれ後世を意識していたが、この『昭和戦中・戦後日記』もその点で例外ではなかった。

日記の分量とそこに盛り込まれた内容は膨大であり、一度で取り上げるのは困難である。したがって本稿では紙幅の関係上、とりあえず『戦中・戦後日記』のうち戦中期の分へのみ焦点を絞って検討することとする。すなわち、日中戦争勃発直後の昭和十二年八月十日から日本が降伏文書に調印した昭和二十年九月二日までの約八年間である。その期間でとくに政治・外交に関して重要と考えられる記述を摘出、紹介しつつ、蘇峰の言動を考察してみたい。学術研究において初めて公表されるものであるだけに、煩を厭わずできるだけその原文を引用しながら見ていくことにする。また戦後期の分については後日、稿を改めて考察してみたい。

## 一、日中戦争

昭和十二年（一九三七）七月七日、北京郊外の盧溝橋事件をきっかけに日中戦争が始まった。八月十三日、上海で中国軍と海軍陸戦隊が交戦し、同日、日本政府は陸軍の上海派遣を決定する。十五日、戦局は全面

戦争の様相を呈し、海軍の航空機が南京を爆撃したが、この日とその翌日、蘇峰は次のように記した。

昭和十二年八月十五日 ……上海爆撃、戦争弥（いよいよ）拡大、何辺二底止ス可キ乎、憂慮二禁ヘズ。

八月十六日 ……本日、上海、其他南支ニ於ケル飛行機戦ノ報道ニ接ス。此夜、月色、明々朗々。但ダ戦争ノ為メニ胸中明朗ナル能ハザルヲ惜シム。

戦争はいよいよ拡大してきたが、どのあたりで停止するのか憂慮にたえない、夜空の月は明るく澄んで輝いているが、自分は戦争のために明朗な気持になれないというのである。

八月二十日 ……戦争拡張、上下如狂。前途深憂ニ勝ヘズ。

戦争が拡大し、国民は上から下まで熱狂しているが、前途を思うと深憂にたえないと蘇峰は案ずる。さらに同月二十六日には「時事二憤慨」とも記している。戦闘が不用意に広がり、近衛文磨首相以下指導者がそれを止めることができないことへの怒りである。三十日、近衛の側近、滝正雄法制局長官が蘇峰の下を訪れた。



② 昭和二十一年六月一日～二十三年五月十八日

ちなみにこの時期以降の二十三年五月十九日から六月八日分は書かれておらず、空白期間となっている<sup>⑤</sup>。

③ 昭和二十三年六月九日～二十六年十二月三十一日<sup>⑥</sup>

④ 昭和二十七年一月一日～三十二年十月七日

蘇峰は最後の日記をしたためた後、一ヶ月弱を経て亡くなったが、その半年前ごろから文字が大きくなり、筆跡がやや乱れ、目や体力の衰えがうかがえる<sup>⑦</sup>。

次にこの日記の特徴を簡単に見ておきたい。第一に、蘇峰の幅広い人間関係が浮き彫りにされていることである。そうした様子を典型的に示すものとして、例えば以下のような記述がある。言論人としての評価がほぼピークに達し、著書の『昭和国民読本』がベストセラーになった昭和十四年のケースである。

二月九日 賀陽宮邸ニ赴ク。昭和国民読本二冊献上、殿下ト相對、種々談話。上野展覧会、紐育（ニューヨーク）行ノ富士大写真ヲ見ル。民友社ニ来客如雲。上田碩三、山根真治郎、木村百木、平川清風、斎藤利助、揮毫若干。夜七時半、龍土軒、東方会、社会大衆党合同、予演説ス。彼等ニ向テ方向轉換ノ妙用ヲ説示ス。大民社柴田

〔徳次郎〕、坂口氏来訪。

二月十日 中野正剛氏、クレマンソー額面携帯。加藤寛治大將吊問ニ赴ク。香典持参。東日社〔東京日日新聞社〕ニ販売各地幹部ニ約一時間相語ル。佐々木信綱氏来訪。柴田氏来訪。大民社ニ立寄ル。昭和国民読本、好評、嘖々大強人意也。高木徳氏来訪<sup>⑧</sup>。

民友社に來客雲の如し、という記述からも蘇峰の人氣がうかがえる。もちろん著名人と毎日会っているというわけではないが、皇族・陸軍軍人の賀陽宮恒憲王、教育者で国士館を創立した柴田徳次郎、政治家の中野正剛、歌人・国文学者の佐々木信綱などは、蘇峰としばしば顔を合せており、とくに柴田や佐々木は戦前、戦後を問わず、一貫して蘇峰の常連客であった。また緒方竹虎、正力松太郎なども頻繁に会っている人物として日記に登場する。

第二の特徴として、蘇峰の思いや感情がよく表れていることである。四冊のうち一冊目を書き終えた彼は、次のように記している。

……（この日記帳は）支那事変開始一ヶ月後ニ始マリ、大東亜戦争終結後九ヶ月半ニ終ル。予ノ年齢カラスレバ〔数え年〕七十五歳ニ始マリ、八十四歳ニ終ル。此ノ期間ハ日本ニ於テモ、将タ予ガ一身ニ取リテモ、実ニ極メテ重要ノ時デアリ、特ニ予ニ取リテハ宛モ黄梁一夢ノ心地スル。而シテ這般ノ消息ノ一班ハ此ノ一冊ノ中ニ見出

しかしながら、実は蘇峰は通常の概念でいう私的な日記もつけていた。蘇峰令孫である故・徳富敬太郎氏のご長女であり、蘇峰の曾孫にあたる小野静子氏が保管されている四冊の分厚い日記帳で、昭和十二年（一九三七）八月十日から三十二年（一九五七）十月七日までの約二十年間にわたって記されたものである。この日記の存在についてはこれまでほとんど知られておらず、その内容を明らかにする学術研究は本稿が初めてである。以下『終戦後日記・頑蘇夢物語』と区別して、ここではこの四冊を『昭和戦中・戦後日記』と呼ぶことにしたい。年齢でいうと、蘇峰が言論界の大御所として盛名をさせていた七十四歳から亡くなる約一ヶ月前の九十四歳までの時期に相当する。さらに特筆したいのは、この長年にわたる日記を徳富敬太郎氏が生前、筆写清書していたことである。日記原本の文字は細かく走り書きされ、判読するのは容易なことではない。ところが徳富氏はこれを解読の上、四百字詰め原稿用紙二二五〇枚に浄書し、年ごとにクリップで留めて整理されており、本稿の筆者もこれによって膨大な時間を節約し、研究上、多大な便宜を受けることができた。今回、小野氏のご厚意により、故・徳富氏の追遠文庫に収蔵されたこれらの日記原本と清書原稿の双方を閲覧させて頂いた。記して心より感謝の意を表したい。

この『昭和戦中・戦後日記』は次の四冊から成る。

① 昭和十二年八月十日～二十一年五月三十一日

日中戦争（日華事変、支那事変）勃発から太平洋戦争（大東亜戦争）

敗戦直後にかけての重要時期をカバーしている。ただしきわめて残念なことに、昭和十六年三月十八日から十八年五月二十八日まで日記は中断されている。したがって昭和十六年十二月八日の日米開戦の前後における蘇峰のプライベートルな所感を知ることとはできない。十六年三月十七日までは小さな文字でびっしりと書き込まれているにもかかわらず、三月十八日から急に筆が止まっている。もともと日記帳には、ページの上方・四分の一程度のスペースに『東京日日新聞』『大阪毎日新聞』夕刊に蘇峰が連載していた「近世日本国民史」の原稿ナンバー、小見出し（ない場合もある）、日付がそのつど書き込まれており、こちらの方は引き続き記録されている。例えば十六年十二月八日の開戦当日は「10439 54 16.12.8」、同十二月二十六日は「10438 72 大久保と若倉 16.12.26」といった具合である。しかしそれ以外のスペース（ページの下方・四分の三）は空欄・白紙のままであるか、新聞の切抜が貼られており、あるいは昭和十八年になってから大きな文字で墨書した備忘録がしたためられているだけである。つまり日米開戦の前後というもともと重要な時期に蘇峰は日記の筆を止めているのである。その理由を彼自身は「病ノ為メニ」としているが、この点については後述する。また昭和二十年八月十五日の条は存在しており、これについても後に紹介してみたい。管見の及ぶ限り、玉音放送の当日に蘇峰が記した文章は他に見当たらないため、その日のいわば彼の肉声を聞くことができる貴重な資料である。<sup>①</sup>

## 徳富蘇峰と昭和戦中日記

―一九三七―一九四五年―

澤田次郎

### 目次

はじめに

一、日中戦争

二、日独伊三国同盟

三、日米開戦前後と日記の中断

四、日米戦争後半期

五、ポツダム宣言受諾と降伏文書調印

おわりに

### はじめに

徳富蘇峰（一八六三―一九五七年）は近代日本において精力的な言論活動を行い、多くの人々から支持を集めたジャーナリスト、歴史家として知られている。第二次世界大戦中はオピニオン・リーダーとして国民の士気高揚をはかり、戦争の完遂を唱えたため、敗戦後は否定的な評価

を受ける傾向が強く、それは今日においても同様である。<sup>①</sup>

蘇峰が残した日記としては『徳富蘇峰 終戦後日記――『頑蘇夢物語』――』全四巻がよく知られている（以下、『終戦後日記・頑蘇夢物語』とす）。<sup>②</sup>これは昭和二十年（一九四五）八月十八日から二十二年七月二日までの約二年間、秘書に口述筆記させたもので、敗戦直後の痛憤や東条英機元首相をはじめとする指導者への批判、昭和天皇に対する苦言などが率直に記されている。また過去の歴史を振り返りながら敗戦の原因、アメリカとソ連の動向、GHQ（連合国軍最高司令官総司令部）の占領政策、日本の世相を考察するなど、幅広く多彩な内容となっている。ただしこの『終戦後日記・頑蘇夢物語』は後世の日本人を意識し、彼らに対するメッセージという意味合いで書かれたものであり、一日ごとに記されているという点では広義の日記といえようが、あくまで公に向けて語られたものであって、その日その日のできごとや所感をプライベートに記すという本来の、あるいは狭義の日記とは性質を異にする。<sup>③</sup>

## 執筆者および専門分野の紹介（目次掲載順）

澤田 次郎（さわだ・じろう）政経学部教授 日本政治史，日本政治思想史  
新田目夏実（あらため・なつみ）国際学部教授 都市社会学，人口学  
小木田敏彦（こぎた・としひこ）政経学部講師（非常勤） 歴史地理学，制度派経済学  
保坂 和貴（ほさか・かずたか）北海道短期大学保育科助教 発達心理学，教育心理学  
保坂 芳男（ほさか・よしお）外国語学部教授 英語教育史，応用言語学

表紙ロゴ『拓殖大学論集』は，西東書房，二玄社のご協力をいただきました。  
2社に感謝申し上げます。

- (1) 「拓」 次の2項目を合成  
手偏 西嶽華山廟碑（西東書房刊，p.12の「持」より）  
石 西嶽華山廟碑（西東書房刊，p.15）
- (2) 「殖」 西嶽華山廟碑（二玄社刊，p.90）
- (3) 「大」 西嶽華山廟碑（西東書房刊，p.9）
- (4) 「學」 史晨後碑（二玄社刊，p.52）
- (5) 「論」 尹宙碑（西東書房刊，p.36）
- (6) 「集」 西嶽華山廟碑（西東書房刊，p.11）

編集委員 音在 謙介 犬竹 正幸 大森 裕二 久米井敦子 佐野 正俊 関 良基  
田野 武夫 中川 功 保坂 芳男 松下 直弘

人文・自然・人間科学研究 第34号 ISSN 1344-6622（拓殖大学論集300） ISSN 0288-6650

2015年10月20日 印刷

2015年10月30日 発行

編集 拓殖大学人文科学研究所編集委員会

発行者 拓殖大学人文科学研究所長 犬竹 正幸

発行所 拓殖大学人文科学研究所

〒112-8585 東京都文京区小日向3丁目4番14号

Tel. 03-3947-7595

Fax. 03-3947-2397（研究支援課）

印刷所 (株) 外為印刷

# THE JOURNAL OF HUMANITIES AND SCIENCES

---

Number 34

October 2015

---

## CONTENTS

### Articles:

- |                  |                                                                                                                        |        |
|------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------|
| Jiro SAWADA      | Tokutomi Soho's Wartime Diary, 1937–1945                                                                               | ( 1 )  |
| Natsumi ARATAME  | Industrialization and Spatial Change in Asia:<br>A Case Study from the Philippines                                     | ( 1 )  |
| Toshihiko KOGITA | Second Thoughts on “ <i>Nihon-fukei-ron</i><br>( <i>Inquiry of the Japanese Scenery</i> )”:<br>Beyond Post-colonialism | ( 16 ) |
| Kazutaka HOSAKA  | Toward a Psychology of “Performance”:<br>Application to the workshop practice<br>of the Holtzman “performance” idea    | ( 37 ) |

### Study Note:

- |               |                                                                               |        |
|---------------|-------------------------------------------------------------------------------|--------|
| Yoshio HOSAKA | English Teachers at Christian Middle Schools:<br>In the case of Rikkyo Gakuin | ( 53 ) |
|---------------|-------------------------------------------------------------------------------|--------|

- |                         |        |
|-------------------------|--------|
| Instructions to Authors | ( 63 ) |
|-------------------------|--------|
- 

Edited and Published by  
**INSTITUTE FOR RESEARCH IN THE HUMANITIES**  
**TAKUSHOKU UNIVERSITY**  
Kohinata, Bunkyo-ku, Tokyo 112-8585, JAPAN